

Y a m e
八女市内遺跡群 1

福岡県八女市新庄所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第104集

2014

八女市教育委員会

八女市文化財調査報告書 第104集

y a m e

八女市内遺跡群 1

福岡県八女市新庄所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第104集

2014

八女市教育委員会

序

八女市の西南部、筑後市と境を接する新庄地区には弥生時代から中世にかけての遺跡が現在も地下に数多く存在しており、これまでも数多くの遺跡において発掘調査が実施されていますが、本格的な発掘調査の開始は圃場整備の歴史と共に始まります。

昭和50年代後半から始まった八女南部圃場整備事業を発端とし、福岡県教育委員会や八女市教育委員会が主体となって調査が行われ、弥生・古墳時代の集落や墳墓が多数発見されました。この事実は、当地区の真の歴史の深さを雄弁に物語るものであると確信しております。

中でも昭和62年に発見された中里遺跡は、当時全国的にも珍しい、くびれ部分を有する方形環壕であり、全体の形が前方後方形とも考えられる極めて希有な遺跡として脚光を浴びました。

近年の調査・研究においては、古墳時代前期頃に出現する「豪族居館」の前身ではないかとの論調も見いだされるようになり、中里遺跡を含めた周辺の遺跡に対し様々な角度から再検討が必要となる時期が来ているものと思われます。

今回の報告は、昭和60年から同62年に行われた発掘調査の概要報告について再検討を行い、より精度の高い情報を公表する事で地下に埋没している遺跡に対する深いご理解を頂く事を目的としております。

この報告書が今回公表させて頂きました遺跡のみならず、市内に数多く点在する文化遺産を深く理解するの一助となり、今まで以上の文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであれば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました関係各位、及び、地元の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成26年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市新庄字六反田、字宮ノ后、字ヒヤケ、国武字中里 所在遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査で検出した遺構の名称・番号については、昭和60年～62年の調査時に準じて付しているが、重複等の混乱も見られる事から僅かに新番号を付したものもある。
- 4 本書に使用した現地測量図については、昭和60年～62年に実施された発掘調査当時の担当責任者を中心として参加者で分担して行っている。
出土遺物の実測図作成については岩戸山歴史資料館において一部を除き実施されている。
- 5 本書に使用した現地写真は、発掘調査当時の担当責任者が撮影している。出土遺物の撮影については岩戸山歴史資料館において本報告における整理担当者が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北を基準としている。
- 7 本書の執筆、及び、編集については大塚が行った。この折、平成元年に刊行されている埋蔵文化財調査概報（八女市文化財調査報告書第18集）を参考とした。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1 調査の経過

A 調査に至る経過

B 調査体制

2 遺跡の立地と歴史的環境

3 調査の内容

発掘調査の概要

新庄・六反田遺跡

1) 遺構と出土遺物

宮ノ后遺跡

1) 遺構と出土遺物

ヒヤケ遺跡

1) 遺構と出土遺物

中里遺跡 1・2 地点

1) 遺構と出土遺物

出土遺物観察表

図版 (PLATES)

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡分布図 [1/25,000]
新庄・六反田遺跡	
第 2 図	新庄・六反田遺跡 1～4 地点位置図 [1/1,500]
第 3 図	新庄・六反田遺跡 1・2 地点 遺構配置図 [1/400]
第 4 図	新庄・六反田遺跡 3 地点 遺構配置図 [1/400]
第 5 図	新庄・六反田遺跡 4 地点 遺構配置図 [1/400]
第 6 図	SB-01 実測図 [1/80]
第 7 図	SB-03、SK-11 実測図 [1/80]
第 8 図	SB-04 実測図 [1/80]
第 9 図	SB-06 実測図 [1/80]
第 10 図	SB-07 実測図 [1/80]
第 11 図	SB-10 実測図 [1/80]
第 12 図	SB-11 実測図 [1/80]
第 13 図	SB-14・15 実測図 [1/80]
第 14 図	SB-17・18 実測図 [1/80]
第 15 図	SB-23 実測図 [1/80]
第 16 図	SB-24・30 実測図 [1/80]
第 17 図	SB-25・26 実測図 [1/80]
第 18 図	SB-27 実測図 [1/80]
第 19 図	SB-28 実測図 [1/80]
第 20 図	SB-29 実測図 [1/80]
第 21 図	SB-33 実測図 [1/80]
第 22 図	SB-35 実測図 [1/80]
第 23 図	SB-36 実測図 [1/80]
第 24 図	SB-37 実測図 [1/80]
第 25 図	SB-38 実測図 [1/80]
第 26 図	SB-39・40・90 実測図 [1/80]
第 27 図	SB-41 実測図 [1/80]
第 28 図	SB-42・46 実測図 [1/80]
第 29 図	SB-43 実測図 [1/80]
第 30 図	SB-45 実測図 [1/80]
第 31 図	SB-49 実測図 [1/80]
第 32 図	SB-50 実測図 [1/80]
第 33 図	SB-51 実測図 [1/80]
第 34 図	SB-54 実測図 [1/80]
第 35 図	SB-55 実測図 [1/80]

第 36 图	SB-56	实测图	[1/80]
第 37 图	SB-57	实测图	[1/80]
第 38 图	SB-75	实测图	[1/80]
第 39 图	SB-78·81	实测图	[1/80]
第 40 图	SB-80	实测图	[1/80]
第 41 图	SB-82·83	实测图	[1/80]
第 42 图	SB-85	实测图	[1/80]
第 43 图	SB-86	实测图	[1/80]
第 44 图	SB-92	实测图	[1/80]
第 45 图	SB-94	实测图	[1/80]
第 46 图	SB-96	实测图	[1/80]
第 47 图	SB-97	实测图	[1/80]
第 48 图	SB-98	实测图	[1/80]
第 49 图	SB-99	实测图	[1/80]
第 50 图	SB-100	实测图	[1/80]
第 51 图	SB-102	实测图	[1/80]
第 52 图	SB-103·104	实测图	[1/80]
第 53 图	SB-106	实测图	[1/80]
第 54 图	SB-109	实测图	[1/80]
第 55 图	SB-112	实测图	[1/80]
第 56 图	SB-117	实测图	[1/80]
第 57 图	SB-119	实测图	[1/80]
第 58 图	SB-122·123	实测图	[1/80]
第 59 图	SB-126	实测图	[1/80]
第 60 图	SB-132·133	实测图	[1/80]
第 61 图	SB-135	实测图	[1/80]
第 62 图	掘立柱建物 A	实测图	[1/80]
第 63 图	掘立柱建物 B	实测图	[1/80]
第 64 图	掘立柱建物 C	实测图	[1/80]
第 65 图	5号掘立柱建物	实测图	[1/80]
第 66 图	7号掘立柱建物	实测图	[1/80]
第 67 图	8号掘立柱建物	实测图	[1/80]
第 68 图	9号掘立柱建物	实测图	[1/80]
第 69 图	SK-01	实测图	[1/40]
第 70 图	SK-03	实测图	[1/40]
第 71 图	SK-04	实测图	[1/40]
第 72 图	SK-06	实测图	[1/40]
第 73 图	SK-09	实测图	[1/40]
第 74 图	SK-11	实测图	[1/40]
第 75 图	SK-13	实测图	[1/40]

第 76 图	SK - 1 4	实测图	[1/40]
第 77 图	SK - 1 6	实测图	[1/40]
第 78 图	SK - 2 5	实测图	[1/40]
第 79 图	SK - 2 7	实测图	[1/40]
第 80 图	SK - 3 0	实测图	[1/40]
第 81 图	SK - 3 2	实测图	[1/40]
第 82 图	SK - 3 6	实测图	[1/40]
第 83 图	SK - 4 2	实测图	[1/40]
第 84 图	SK - 5 0 · 5 1	实测图	[1/40]
第 85 图	SK - 5 9	实测图	[1/40]
第 86 图	SK - 6 0	实测图	[1/40]
第 87 图	SK - 6 2	实测图	[1/40]
第 88 图	SK - 6 6	实测图	[1/40]
第 89 图	SK - 6 8	实测图	[1/40]
第 90 图	SK - 7 2	实测图	[1/40]
第 91 图	SK - 7 9	实测图	[1/40]
第 92 图	SK - 8 5	实测图	[1/40]
第 93 图	SK - 8 6	实测图	[1/40]
第 94 图	SK - 8 7	实测图	[1/40]
第 95 图	SK - 8 8	实测图	[1/40]
第 96 图	SK - 1 0 0	实测图	[1/40]
第 97 图	SK - 1 0 2	实测图	[1/40]
第 98 图	SK - 1 0 7	实测图	[1/40]
第 99 图	SK - 1 0 8	实测图	[1/40]
第 100 图	SK - 1 0 9	实测图	[1/40]
第 101 图	SK - 1 1 3	实测图	[1/40]
第 102 图	SK - 1 1 4	实测图	[1/40]
第 103 图	SK - 1 2 0	实测图	[1/40]
第 104 图	SK - 1 2 1	实测图	[1/40]
第 105 图	SK - 1 2 3	实测图	[1/40]
第 106 图	SK - 1 2 4	实测图	[1/40]
第 107 图	1 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 108 图	2 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 109 图	4 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 110 图	8 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 111 图	1 0 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 112 图	1 1 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 113 图	1 2 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 114 图	1 3 号土壙墓	实测图	[1/40]
第 115 图	1 号石盖土壙墓	实测图	[1/40]

第 116 図 K-3 (A・B) 実測図 [1/30]

第 117 図 K-6 実測図 [1/30]

第 118 図 K-11 実測図 [1/30]

第 119 図 K-13 実測図 [1/20]

第 120 図 K-14 実測図 [1/20]

第 121 図 K-17 実測図 [1/30]

第 122 図 K-28 実測図 [1/30]

第 123 図 K-35 実測図 [1/30]

第 124 図 K-41 実測図 [1/30]

第 125 図 K-46 実測図 [1/20]

第 126 図 K-47 実測図 [1/30]

第 127 図 K-52 実測図 [1/30]

第 128 図 K-54 実測図 [1/30]

第 129 図 K-58 実測図 [1/30]

第 130 図 K-63 実測図 [1/30]

第 131 図 K-76 実測図 [1/30]

第 132 図 K-77 実測図 [1/30]

宮ノ后遺跡

第 133 図 SB-01 実測図 [1/80]

第 134 図 宮ノ后遺跡 (A～C 地区)、及び、ヒヤケ遺跡 位置図 [1/5,000]

第 135 図 宮ノ后遺跡 A・B 地区 遺構配置図 [1/600]

第 136 図 宮ノ后遺跡 C 地区 遺構配置図 [1/600]

第 137 図 SB-02 実測図 [1/80]

第 138 図 SB-03 実測図 [1/80]

第 139 図 SB-04 実測図 [1/80]

第 140 図 SB-05 実測図 [1/80]

第 141 図 SB-06 実測図 [1/80]

第 142 図 SK-01・02 実測図 [1/40]

第 143 図 SK-03 実測図 [1/40]

第 144 図 SK-04 実測図 [1/40]

第 145 図 SK-05 実測図 [1/40]

第 146 図 SK-06 実測図 [1/80]

第 147 図 SK-07 実測図 [1/40]

第 148 図 SX-01 実測図 [1/40]

ヒヤケ遺跡

第 149 図 SB-01 実測図 [1/80]

第 150 図 SK-01 実測図 [1/80]

第 151 図 SK-02 実測図 [1/80]

第 152 図 ヒヤケ遺跡 1・2 地点 位置図 [1/400]

第 153 図 ヒヤケ遺跡 1 地点 遺構配置図 [1/400]

第 154 図 ヒヤケ遺跡 2 地点 遺構配置図 [1/400]

中里遺跡 1・2 地点

第 155 図 SD-01 B 土層 断面実測図 [1/40]

第 156 図 中里遺跡 1・2 地点 遺構配置図 [1/400]

第 157 図 SD-01 D 土層 断面実測図 [1/40]

第 158 図 SD-01 E 土層 断面実測図 [1/40]

第 159 図 SD-01 H 土層 断面実測図 [1/40]

第 160 図 SD-01 J 土層 断面実測図 [1/40]

第 161 図 SD-08 断面実測図 [1/40]

第 162 図 SD-11 土層断面実測図 [1/40]

第 163 図 SK-01・02 実測図 [1/40]

第 164 図 SK-03 実測図 [1/40]

第 165 図 SK-04 実測図 [1/40]

出土遺物

第 166 図 SB-01、03、04、06、07 出土遺物 実測図 [1/4]

第 167 図 SB-07、11、13~15、17、18 出土遺物 実測図 [1/4]

第 168 図 SB-23、25~27、33、36、39 出土遺物 実測図 [1/4]

第 169 図 SB-39、75、78、80、81 出土遺物 実測図 [1/4]

第 170 図 SB-82、83、85、86、94、96 出土遺物 実測図 [1/4]

第 171 図 SB-96~100、102 出土遺物 実測図 [1/3]

第 172 図 SB-102~104、106、112 出土遺物 実測図 [1/4]

第 173 図 SB-117、119、122、126、132 出土遺物 実測図 [1/4]

第 174 図 SK-25、27、30、59、62、68、72、86、100 出土遺物 実測図
[1/4]

第 175 図 SK-102、123 出土遺物 実測図 [1/4]

第 176 図 宮ノ后遺跡 SB-01、03、SK-01、07 出土遺物 実測図 [1/4]

第 177 図 宮ノ后遺跡 SK-06、08、SD-04、09、10、11、12 出土遺物 実測図
[1/4]

第 178 図 ヒヤケ遺跡 SK-04、05、SD-01、02、03、05、07、12、13、
20、SD-27 出土遺物 実測図 [1/4]

第 179 図 SD-01 出土遺物 実測図 [1/4]

第 180 図 中里遺跡 SD-01、07、09、11、SK-01 出土遺物 実測図 [1/4]

新庄・六反田遺跡 出土遺物 実測図 [1/4]

表 目 次

第 1 表 出土遺物觀察表

図 版 目 次

PL 1～PL 18 現地遺構写真

PL 19～PL 31 出土遺物写真

1 調査の経過

A 調査に至る経過

昭和57年度を初年度として八女南部地区において実施された県営圃場整備事業は、一級河川である矢部川から山ノ井川までの地域約209haを整備するために計画された事業である。初年度以降においては順次北方地域に向け、毎年20ha程度の事業が実施された。事業開始期である昭和57年～同59年においては矢部川にほど近い川犬地区を中心として整備が行われた。当該地区は矢部川の氾濫原として考えられていたため、埋蔵文化財においては包蔵無しと思われていた。

昭和60年には新庄地区が事業地となり、八女市教育委員会と福岡県南筑後教育事務所が共同で現地の遺跡分布調査を実施したところ、下新庄集落の南側一帯に多量の土器片が確認された。これを受け、八女市教育委員会、福岡県教育委員会、八女南部土地改良区の三者で協議を行い、遺跡の広がりを知るため試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡と考えられる遺構や多数の甕棺墓が発見され、遺跡全体の広がりには相当な範囲に及ぶ事が推測された。試掘調査の結果を踏まえ、八女市教育委員会では国庫補助事業として発掘調査を実施する事となり、昭和60年7月15日より現地での調査を開始した。

これ以後、圃場整備事業実施予定地となった地区においては事業前年度に試掘調査を実施し、事業地内の埋蔵文化財の在り方について把握を行い、関係各機関と協議を行いながら連携を重ね、圃場整備により削平・掘削が実施される部分を中心に毎年発掘調査を実施した。これ以外については遺跡保護の観点から、現状保存の策が採られた。

B 調査体制

【昭和60年度】 (現地調査時)
〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	坂田 不二夫
社会教育課長	末継 清四郎
同 係長	杉山 信行
同 係員	梅野 満、平田 高義、川口 美文、松尾 弘子
同 係員	赤崎 敏男(調査担当)

【昭和61年度】 (現地調査時)
〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	坂田 不二夫
社会教育課長	牛島 景資

同	係長	杉山 信行
同	係員	梅野 満、平田 高義、平島 芳子
同	係員	赤崎 敏男（調査担当）

【平成25年度】（本報告刊行時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生
教育部長	井上 俊裕
文化課長	井上 秀樹
同参事補佐	北島 一雄
同文化財係長	大塚 恵治（総括・本報告担当）
同 係員	永田 寧（別冊報告担当）
同 係員	渡部 真弓
同文化振興係長	
兼文化財係主任	中川寿賀子（別冊報告担当）

以下の方々においては整理期間中多大な御指導・御協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

（順不同、敬称略、当時）

佐賀大学名誉教授 佐田茂、熊本市教育委員会 文化課 檀 佳克、福岡県教育委員会 文化財保護課
吉田 東明、坂元

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の母の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647㎡を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

新庄・六反田遺跡、宮ノ后遺跡、ヒヤケ遺跡、中里遺跡は福岡県八女市新庄、国武に所在している。

当該地周辺は弥生時代から古墳時代、歴史時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られ、大規模な圃場整備事業の実施に伴い弥生時代中期に属する大規模な集落や墳墓群の発見があった。また、同時に中世の遺跡群も発見され、当地区における埋蔵文化財の概要が明らかになってきた。以下、八女市西部における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

（概要）

八女西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。同後期に入ると、南西部のアメメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴式住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来な



- | | | | | |
|-------------|---------|-------------|------------|-----------|
| 1. 新庄・六反田遺跡 | 5. 深田遺跡 | 9. 二反田遺跡 | 13. 川原遺跡 | 17. アモメ遺跡 |
| 2. 宮ノ后遺跡 | 6. 京田遺跡 | 10. 宿町遺跡 | 14. 川犬古墳群 | 18. 岩戸山古墳 |
| 3. ヒヤケ遺跡 | 7. 袴田遺跡 | 11. 立野・大坪遺跡 | 15. 西山ノ上遺跡 | 19. 乗場古墳 |
| 4. 中里遺跡 | 8. 野田遺跡 | 12. 樋の口遺跡 | 16. 亀の甲遺跡 | |

第1図 周辺の遺跡分布図 [1/25,000]

いようになる。ところが中期後半頃になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鍛造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。

これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

3 調査の内容

発掘調査の概要

今回報告を行う新庄・六反田遺跡、宮ノ后遺跡、ヒヤケ遺跡、中里遺跡の4遺跡は八女南部第2圃場整備事業に伴う事前発掘調査により発見された遺跡で、基本的には当該地における小字名がその名の由来となっている。前三者は事業地西側の新庄地区に位置し、中里遺跡については北東側の国武地区に位置している。

新庄・六反田遺跡については、遺跡検出の段階で、多数の竪穴式住居と共に土壙や甕棺墓等の遺構が調査区内に密集している事が判明し、相当広範囲に遺跡が広がっている事が容易に推測出来た。

宮ノ后遺跡については、遺構の密集度は比較的低く竪穴住居や掘立柱建物についても数える程しか検出されていない。墳墓においても須恵器と土師器を合口式に用いた甕棺墓状のものが1基あるのみで、積極的な定住意識は見えない。

ヒヤケ遺跡については、宮ノ后遺跡同様、居住域として使用された痕跡が著しい程少ない。その反面、大小含め数多くの溝状遺構が検出されており、一般民衆の定住域ではなく農地、または、特殊な大型施設が存在していた可能性を含んでいる。

中里遺跡については、非常に特殊な前方後方形の周溝が検出されている。また、当該周溝の外側6～15mの位置において同一方向に延びる同形態を有する溝状遺構が検出されており、二重周溝の可能性も残されている。周溝内側に関して当時の発掘担当者は、削平著しく建物としてまとめられるものが無いとの見解を出されている。この点については他周辺遺跡との比較検討を含め後述する。

以下においては、各遺跡における調査結果について報告を行う。

新庄・六反田遺跡

遺跡の概要

当該遺跡は調査面積が約1万㎡と非常に広く、調査の便宜上、及び、圃場整備事業地における施工状況から3区画4地点に分割されている。縄文時代前期から奈良時代までの遺構が検出されているが、中心を担うのは弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての遺構群である。竪穴住居や甕棺墓の密集度は非常に高く、該期における八女南部地区の有力集落の1つとして位置づける事が可能である。但し、出土した遺物は土器類が中心であり、金属器等の特殊遺物が比較的に少ないことから一般集落の枠内からは突出しないものと考えられる。

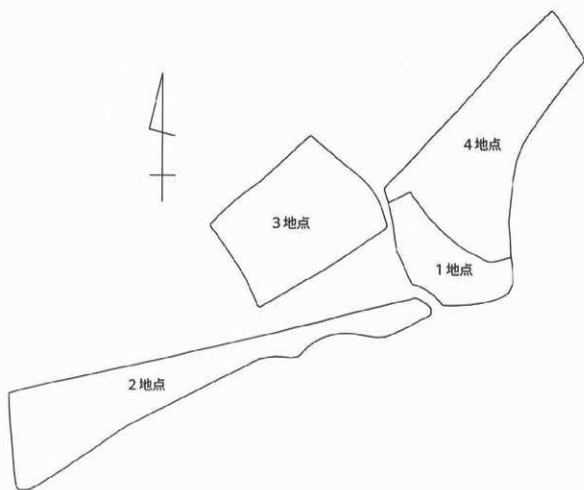
以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述する。

1) 遺構と出土遺物

竪穴住居

SB-01 〈第6図〉

4地点の南西端において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-44°-Eに取り、規模は長軸長6.94m、短軸長5.1m、深さ0.1mを測る。主柱穴と考えられるにビット



第2図 新庄・六反田遺跡1～4地点位置図〔1／1,500〕



第3図 新庄・六反田遺跡 1～4地点 遺構配置図 [1/400]

は4つあり、4本柱の建物であったと思われる。中央に位置するピットは地炉と思われる、多量の炭化物が出土している。また、南東壁の中央にあるピットは屋内土壌、北側コーナー部分にある深さ約40cmの土壌は屋内貯蔵穴と思われる。

SB-03

〈第7図〉

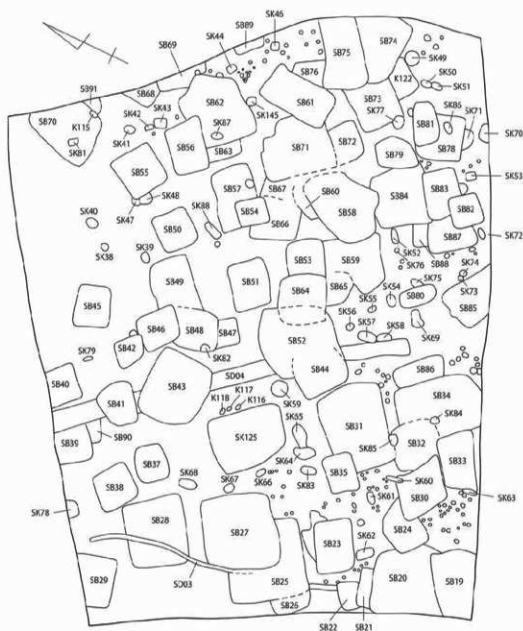
4地点の北西端において検出した平面プランが長方形を呈すると予測される竪穴住居である。遺構本体の一部は調査区外に出る。長軸方位をN-45°-Wに取り、規模は長軸

長4.4m + α 、短軸長3.92m + α 、深さ0.2mを測る。屋内土壌、地炉ともに不明確ではあるが、中央付近に直径1.4m程の高まりがあり、中央部分には直径80cm程度の窪みがある。機能については言及する術を持たないが、西山ノ上遺跡 SB-17（八女市文化財調査報告書第70集）に類似する遺構がある。主柱穴は確認出来ていない。無柱式か。

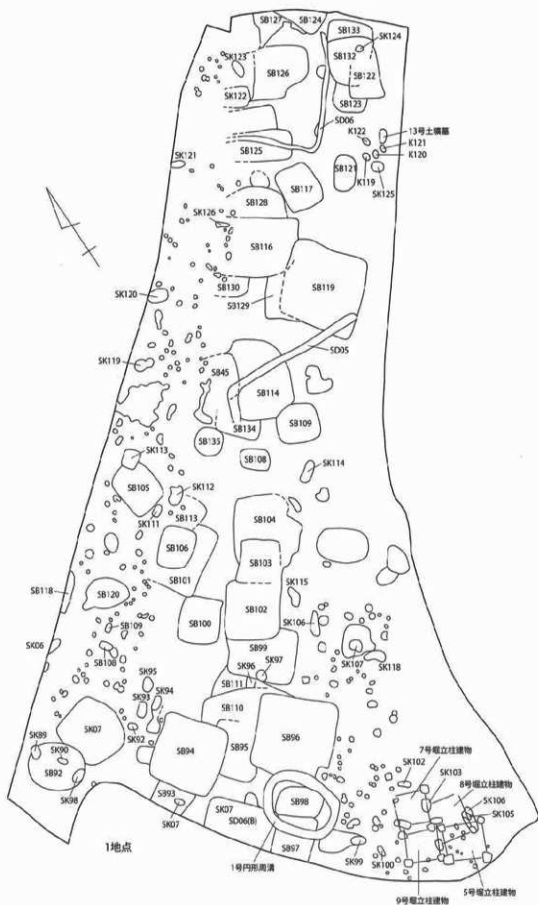
出土遺物として、弥生式土器の甕・高坏形土器等が出土している。

SB-04 〈第8図〉

4地点の北西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-23°-Eに取り、規模は長軸長3.8m、短軸長3.34m、深さ7cmを測る。屋内土壌、地炉ともに不明確である。主柱穴も判然としませんが中央部分に1穴穿たれており、これが主柱穴であるならば1本柱の建物となる。無柱式の可能性も残されている。これが確かであれば、本建物は住居より作業用建物が妥当か。生活感の無さや粘土塊が検出されていることはこの傍証となるか。



第4図 新庄・六反田遺跡3地点 遺構配置図 [1/400]



第5図 新庄・六反田遺跡4地点 遺構配置図 [1/400]

出土遺物として、弥生式土器の甕・高環形土器等が出土している。

SB-06

〈第9図〉

2地点の中央付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-2°-Eに取り、規模は長軸長7.95m、短軸長7.9m、深さ0.15mを測る。中央に地炉状の遺構があるが、判然としない。

主柱穴は4穴（P1～

P5）あり、一部に切り合いが見られる事から建替えがあったものと思われる。4本柱の建物である。P6は屋内土壌か。

出土遺物として、弥生式土器の壺・高環形土器等が出土している。

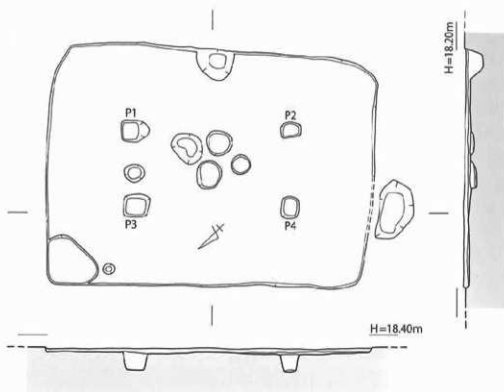
SB-07 〈第10図〉

2地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-63°-Eに取り、規模は長軸長6.64m、短軸長5.5m、深さ7cmを測る。中央に地炉を有し南壁中央に屋内土壌を設ける。主柱穴は2穴（P1・P2）あり、2本柱の建物である。北壁側にSK-23（23号土壌）があるが、土壌内より住居内出土と同様の炭化木材が出土していることから、本住居に伴う貯蔵穴と判断した。

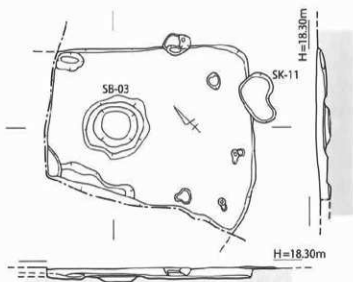
出土遺物として、弥生式土器の甕・壺・高環形土器、投弾等が出土している。

SB-10 〈第11図〉

2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-78°-Eに取り、規模は長軸長3.64m、短軸長3.4m、深さ0.23mを測る。南壁中央にカマドを付設する。検出された全ての柱穴が主柱穴であり、一部に切り合いが見られる事から建替えがあったものと思われる。4本柱のやや小振りな建物である。



第6図 SB-01 実測図 [1/80]



第7図 SB-03、SK-11 実測図 [1/80]

SB-11 〈第12図〉

2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-10の真北に隣接している。長軸方位をN-58°-Eに取り、規模は長軸長4.52m、短軸長4.2m、深さ0.2mを測る。南壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)で、一部に柱穴の重複が見られる事から建替え、または、主柱修理があったものと思われる。4本柱のやや小振りの建物である。

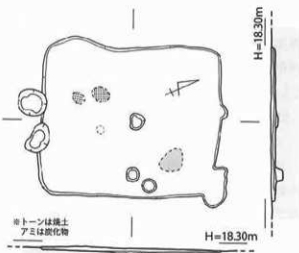
SB-13

2地点の西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-14・17・18に切られている。長軸方位をN-70°-Eに取り、規模は長軸長5.4m + α、短軸長5.4m、深さ0.12mを測る。主柱穴については不明。遺構状況から考えると弥生期の建物であろう。

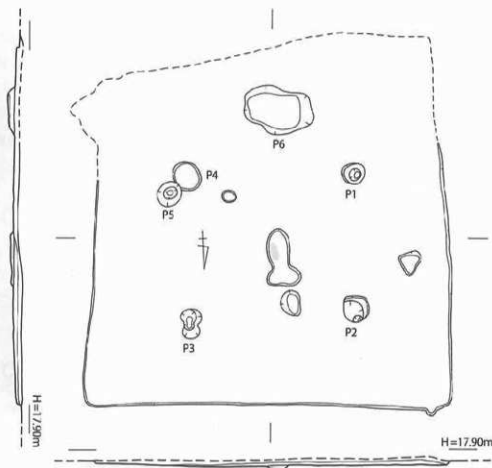
SB-14

〈第13図〉

2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-13を切り、SB-15に切られている。長軸方位をS-30°-Eに取り、規模は長軸長4.1m、短軸長3.7m、深さ0.24mを測る。南壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)ある。切り合い等の痕跡は見られず、建替え等は無かったものと思われる。4本柱のやや小振りの建物である。



第8図 SB-04 実測図 [1/80]



第9図 SB-06 実測図 [1/80]

SB-15 〈第13図〉

2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-13・14を切る。長軸方位を $N-30^{\circ}-W$ に取り、規模は長軸長4.0m、短軸長3.7m、深さ0.17mを測る。北壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)ある。4本柱のやや小振りの建物である。

切り合い等の痕跡は見られず、建替え等は無かったものと思われる。主軸方位が真逆で、ほぼ規模を同一とし、僅かに住居中心部をずらす事から、典型的な同一施者による建替え例と考えられる。長軸(主軸)方

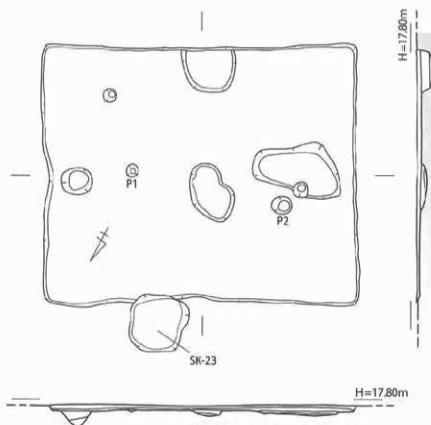
位が逆転しているのは、風向や集落内の状況変化に伴う事象と考えたい。

SB-17 〈第14図〉

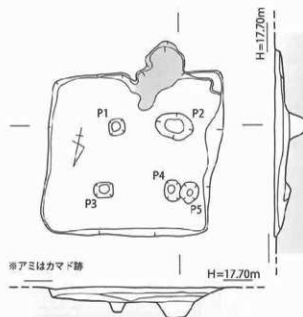
2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-13・18を切る。長軸方位を $N-32^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長4.53m、短軸長3.75m、深さ0.2mを測る。南壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)あるが、P4は建て替えに伴う柱穴か。また、P3が主柱穴として用いられた時の東側の柱はS1を礎石として用いていたか。

SB-18 〈第14図〉

2地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-13を切り、SB-17に切られる。長軸方位を $N-46^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長3.8m、短軸長3.8m、深さ0.3mを測る。南壁中央にカマド付設の痕跡が僅かに遺存している。主柱穴は4穴(P1~P4)あるが、切り合い等の痕跡は認められず、建替え等は無かったものと思われる。



第10図 SB-07 実測図 [1/80]



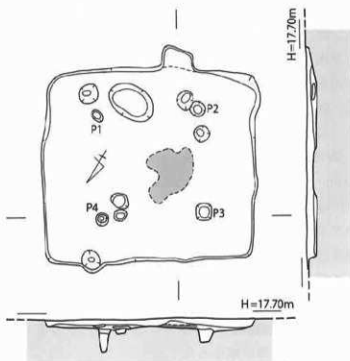
第11図 SB-10 実測図 [1/80]

SB-23 <第15図>

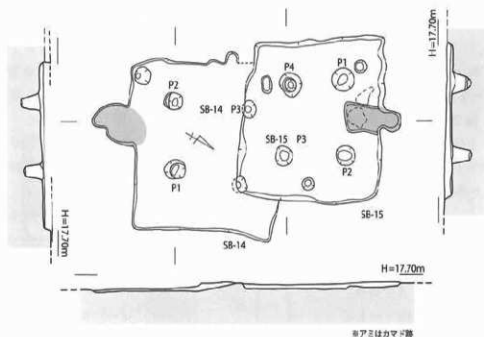
3地点の南西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-57°-Eに取り、規模は長軸長5.3m、短軸長4.2m、深さ0.24mを測る。主柱穴は2穴(P1・P2)あり、2本柱の建物である。南東壁側中央付近にあるP3は屋内土壌であろうか。遺構状況から考えると弥生期の建物であろう。

SB-25 <第17図>

3地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-27に切られ、SB-26を切る。長軸方位をN-57°-Eに取り、規模は長軸長8.4m、短軸長7.75m、深さ0.3mを測る。SB-27に切られている事も影響しているが、住居跡としては生活感が乏しい。主柱穴(P1・P2)が脆弱な割に壁溝が全周し、掘方も直線的に精美であるなどの特徴から、一般住居ではなく集会所等の特殊な建物であった可能性を考慮すべきだと思う。



第12図 SB-11 実測図 (1/80)

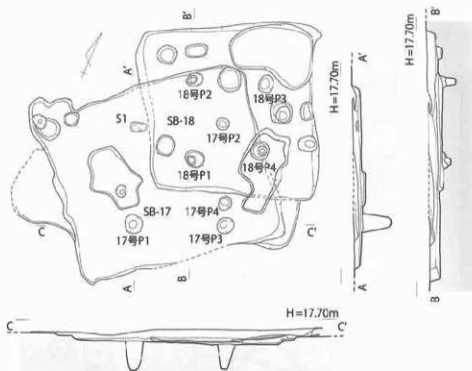


第13図 SB-14・15 実測図 (1/80)

SB-27

〈第18図〉

3地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-25を切る。長軸方位をN-30°-Wに取り、規模は長軸長8.0m、短軸長8.0m、深さ0.5mを測る。南壁中央に屋内土壌を付設する。4壁全てに幅1.2m～1.6m程のベッド状遺構を造り出しており、屋内土壌部分を除いて壁溝も「コ」字形に全周している。主柱穴は4穴（P1～P4）あり、やや大振りな



第14図 SB-17・18 実測図 [1/80]

掘方を成す4本柱の大型建物である。P5・6は屋内貯蔵穴と思われる。位置関係からSB-25との関連性が深く考えられ、SB-25の後継建物として機能していたものと考えたい。

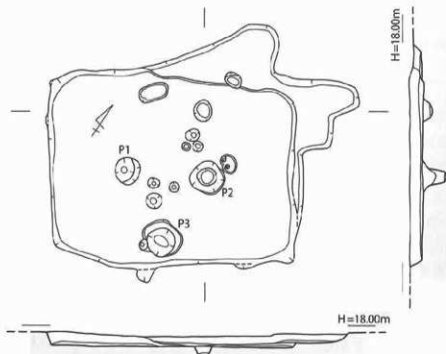
SB-33 〈第21図〉

3地点の南西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-54°-Eに取り、規模は長軸長6.2m、短軸長4.0m、深さ0.25mを測る。主柱穴は3穴（P1～P3）が認められるが、本来は4本柱の建物であろう。南東壁側中央付近にある横長のピットは屋内土壌であろうか。遺構状況から考えると弥生期～古墳時代初頭頃の建物であろう。

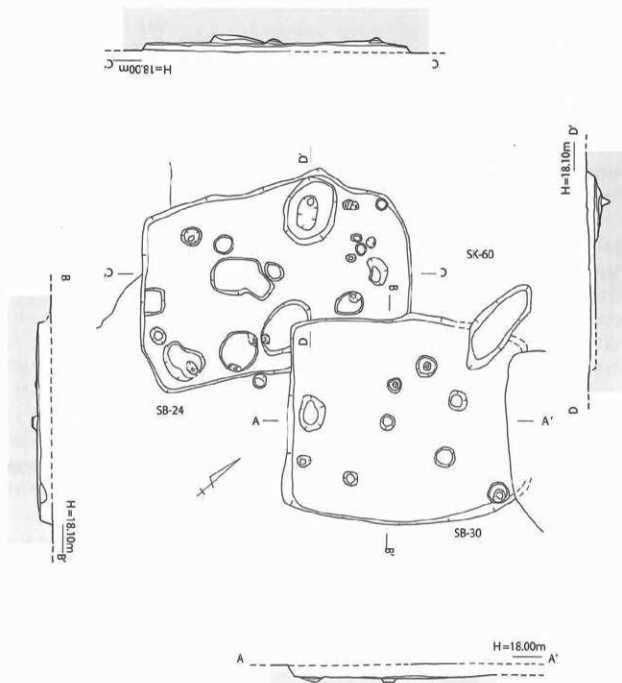
SB-36

〈第23図〉

3地点の中央部西寄りにおいて検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-42°-Wに取り、規模は長軸長8.1m、短軸長6.4m、深



第15図 SB-23 実測図 [1/80]



第16図 SB-24・30 実測図 [1/80]

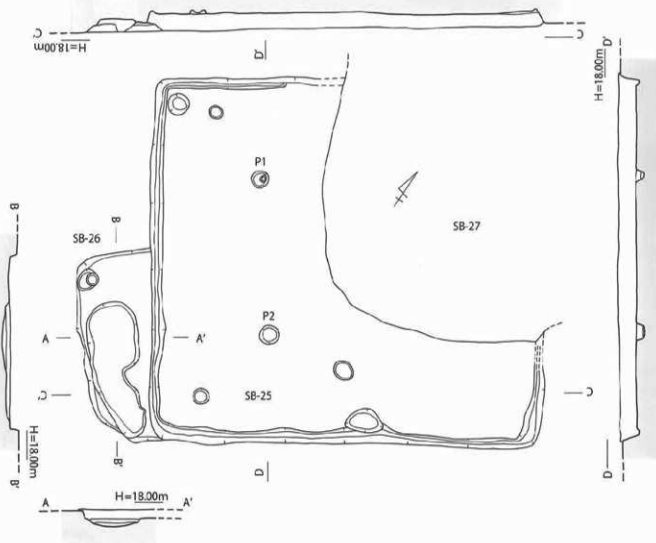
さ0.15mを測る。主柱穴は2穴(P1・P2)が認められ、2本柱の建物であろう。中央付近には地炉を付設する。P1に切られている土壌は当該住居のものではなく、これ以前の遺構であると思われる。

SB-39 〈第26図〉

3地点の北西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-90を切る。長軸方位をN-51°-Eに取り、規模は長軸長5.1m、短軸長3.6m、深さ0.2mを測る。主柱穴は3穴(P1~P3)が認められるが、本来は4本柱の建物であろう。西壁にある横長の土壌(D1)は屋内貯蔵穴と思われるが、八女地区において壁面に貼付く横長屋内貯蔵穴と考えられる事案は少ない。

SB-40 〈第26図〉

3地点の北西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-39と同様、SD-04に切られている。長軸方位をN-51°-Eに取り、規模は長軸長3.9m、短軸長3.4m、深さ



第17図 SB-25・26 実測図 [1/80]

0.12mを測る。主柱穴は不明。南東壁側中央付近にある横長のピットは屋内土壌であろうか。生活感の無い状況を呈しており、軸方向の同一性も鑑み、SB-39と共に機能していた建物と考えられる。

SB-45 〈第30図〉

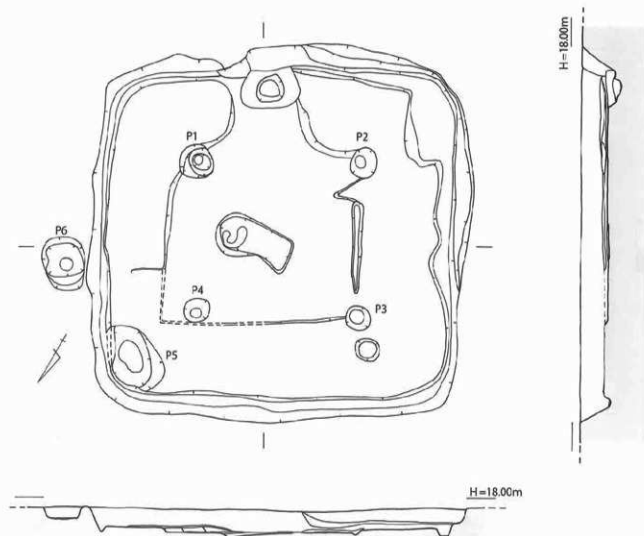
3地点の北端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-22°-Wに取り、規模は長軸長4.05m、短軸長3.8m、深さ0.12mを測る。西壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)ある。切り合い等の痕跡は認められず、建替え等は無かったものと思われる。

SB-50 〈第32図〉

3地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-48°-Wに取り、規模は長軸長4.7m、短軸長3.85m、深さ0.15mを測る。主柱穴は不明。切り合い等の痕跡もなく、非常に生活感の無い状況を呈している事から住居以外の機能も考えなければならないか。

SB-51 〈第33図〉

3地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-50°-Eに取り、規模は長軸長4.7m、短軸長4.05m、深さ5cmを測る。北東壁・南西壁中央に貼付くピットが主柱穴であると思われるが判然としない。SB-50同様、切り合い等の痕跡もなく非常に生活感の無い状況を呈しており、住居以外の機能も考えなければならないか。



第18図 SB-27 実測図 [1/80]

SB-54 〈第34図〉

3地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-57・66を切る。長軸方位をN-39°-Wに取り、規模は長軸長3.4m、短軸長2.6m、深さ0.2mを測る。主柱穴は2穴(P1・P2)ある。南側コーナー部分には焼土が認められ、これがカマドの痕跡であるならば外来系要素が導入されている事も考慮せねばならない。

SB-55 〈第35図〉

3地点の北端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-53°-Wに取り、規模は長軸長4.9m、短軸長4.7m、深さ0.17mを測る。北西壁中央にカマドを付設する。主柱穴は4穴(P1~P4)ある。切り合いが認められ、建替えがあったものと思われる。

SB-56 〈第36図〉

3地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-62・63を切る。長軸方位をN-43°-Eに取り、規模は長軸長5.85m、短軸長3.9m~4.6m、深さ0.2mを測る。主柱穴は4穴(P1~P4)が認められるが、直角を成さず建物壁面の形状に合わせた。南東壁側中央付近にある三角形のピット(P5)は屋内土壌であろうか。

SB-57 〈第37図〉

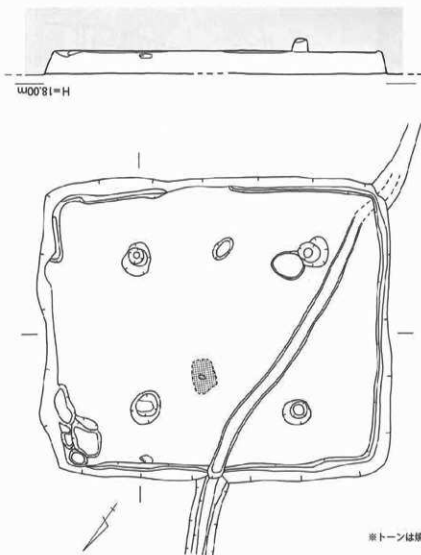
3地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-54に切られ

ている。長軸方位を $N-50^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長6.7m、短軸長4.25m、深さ7cmを測る。主柱穴は不明。

SB-75

〈第38図〉

3地点の東端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-50^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長7.2m + α 、短軸長4.45m、深さ0.25mを測る。主柱穴は不明。南東壁側中央付近にある三角



※トーンは機土

第19図 SB-28実測図 [1/80]

形状のピットは屋内土壇と思われ、左右に小ピットを有しており、同種における筑後地域の特徴を現している。南側の2コーナー付近から中央に向かって延びる溝状遺構の性格については不明と言わざるを得ない。

SB-78 〈第39図〉

3地点の東端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-18^{\circ}-W$ に取り、規模は長軸長4.7m、短軸長4.7m、深さ0.1mを測る。主柱穴は判然としませんが、P1～P3の3穴が該当するか。この場合、本住居は3本柱の建物となり、類別僅少の1例となるか。

SB-80 〈第40図〉

3地点の南端付近において検出した平面プランが楕円形を呈する遺構である。発掘担当者はこれを竪穴住居とされているが、平面形状や主柱穴の有無等から考えて、「建物」と表記の方が妥当と思われる。遺構は長軸方位を $N-47^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長4.35m、短軸長2.4m、深さ0.12mを測る。

SB-81 〈第39図〉

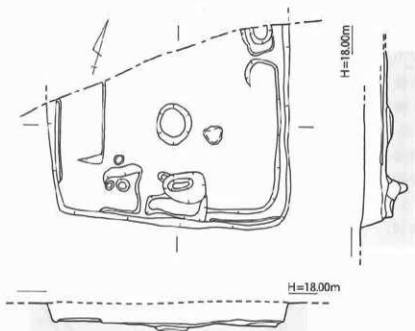
3地点の東端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。長軸方位を $N-47^{\circ}-E$ に取り、規模は長軸長5.25m、短軸長2.8m、深さ0.3mを測る。主柱穴は6穴(P1～P6)あり、内、P1・P2、及び、P4・P5は切り合い関係にあるものと思われる、少なくとも1回の建て替

えがあったものと推定出来る。

主柱を四隅に配し、極端な長方形を呈するなど筑後地区では非常に稀な形態を成しており、注意深く観察する必要がある。

SB-82 〈第41図〉

3地点の南東端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-83・87を切っている。長軸方位をN-35°-Wに取り、規模は長軸長3.5m、短軸長3.4m、深さ0.18mを測る。主柱穴は4穴(P1~P4)認められるが、P3のみやや直交軸線上を外れている。北壁中央にはカマドを付設している。



第20図 SB-29 実測図 (1/80)

SB-83 〈第41図〉

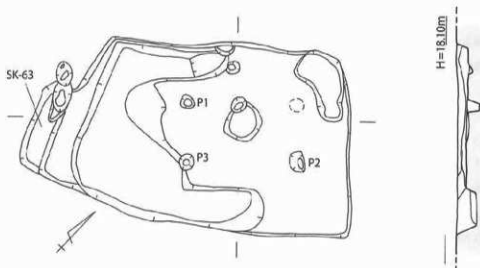
3地点の南東端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-82に切られている。長軸方位をN-55°-Eに取り、規模は長軸長4.8m、短軸長3.95m、深さ0.2mを測る。主柱穴は4穴(P1~P4)認められるが、P1~P4とP2~P3との柱間が異なり、また、西辺の柱穴と東辺の柱穴規模が明白に異なっている点等、本住居の上屋構造が片屋根であった事を推測させる。

建物の性格としては定住の住居より、作業場のイメージが強い。

SB-85

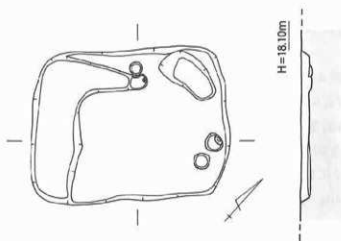
〈第42図〉

3地点の南端付近において検出した平面プランがやや不整形な竪穴住居である。遺構の一部は測



第21図 SB-33 実測図 (1/80)

査区外に延び、プラン自体が不整形という事もあり主軸方向については明示出来ない。遺構規模は南北長4.65m、東西長5.0m、深さ0.1mを測る。

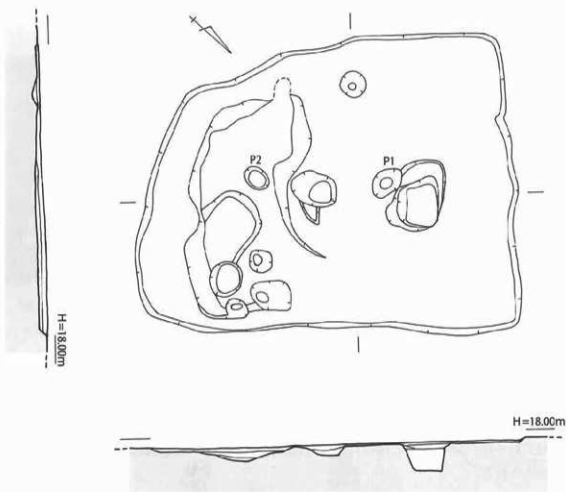


SB-86 〈第43図〉

3地点の南端付近において検出した竪穴住居である。遺構の大半がSB-34に切られているため平面プランを含めた詳細については不明であり、主軸方向に



第22図 SB-35 実測図 (1/80)



第23図 SB-36 実測図 (1/80)

ついても明示は出来ない。遺構規模は南北長 $2.2\text{m} + \alpha$ 、東西長 5.2m 、深さ 0.28m を測る。

SB-92 〈第44図〉

4地点の西端付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する竪穴住居である。SB-112を切っている。長軸方位を $N-46^\circ-W$ に取り、規模は長軸長 5.8m 、短軸長 4.4m 、深さ 0.2m を測る。主柱穴は不明。

SB-94 〈第45図〉

4地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-93・95・110を切っている。

長軸方位を $N-56^\circ-E$ に取り、規模は長軸長 8.0m 、短軸長 7.05m 、深さ 0.3m を測る。主柱穴は4穴確認出来、4本柱の建物であったと思われるが、比較的大型でありながら主柱穴の規模が小さく感じられる。また、主柱穴に切り合いが認められない事から建替等は無かったものと思われる。壁溝は南壁中央の屋内土壁を除きほぼ全周している。

SB-96 〈第46図〉

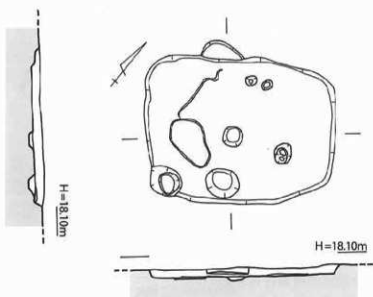
4地点の西端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。1号円形周溝状遺構を切っている。長軸方位を $N-39^\circ-W$ に取り、規模は長軸長 8.0m 、短軸長 8.0m 、深さ 0.3m を測る。主柱穴は3穴(P1~P3)が確認出来ているが、本来は4本柱の建物であったと思われる。SB-94と同様、比較的大型でありながら柱穴規模が小さく感じられる。東壁から南壁内側に壁溝が認められ、また、これに沿うように東壁1m内側にL字状の溝が掘られているが、用途は不明。

SB-97 〈第47図〉

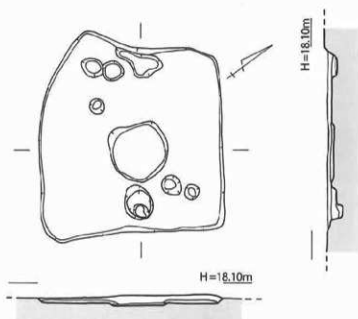
4地点の西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。1号円形周溝状遺構とSB-98を切り、SB-02に切られている。長軸方位を $N-41^\circ-E$ に取り、規模は長軸長 $4.9\text{m} + \alpha$ 、短軸長 4.75m 、深さ 0.25m を測る。主柱穴は不明。SB-94と同様、比較的大型でありながら柱穴規模が小さく感じられる。東西壁側に壁溝が認められる。

SB-98 〈第48図〉

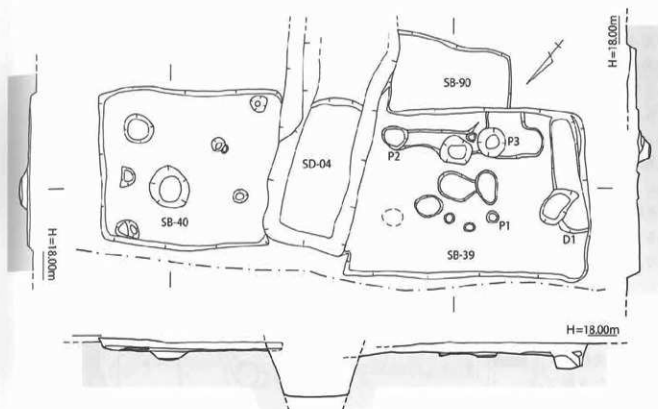
4地点の西端付近において検出した平面プランが楕円形を呈する竪穴住居である。1号周溝状遺構を切



第24図 SB-37 実測図 [1/80]



第25図 SB-38実測図 [1/80]



第26図 SB-39・40・90 実測図 (1/80)

り、SB-97に切られている。長軸方位をN-55°-Wに取り、規模は長軸長4.85m、短軸長2.9m+α、深さ0.18mを測る。主柱穴は不明。竪穴住居以外の用途についても検討が必要か。

SB-99 〈第49図〉

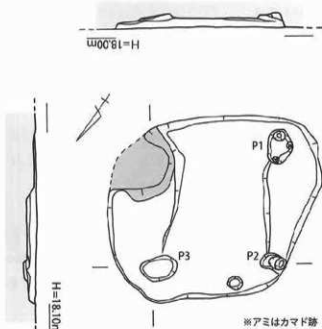
4地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-111を切り、SB-102に切られる。長軸方位をN-51°-Wに取り、規模は長軸長8.0m、短軸長5.5m、深さ0.3mを測る。主柱穴は2穴確認出来、2本柱の建物であったと思われる。3壁の内側にある深さ0.4mの溝状の遺構は、竪穴住居造営当初の粗掘りの痕跡と思われる。

SB-100 〈第50図〉

4地点の中央付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-101に切られる。長軸方位をN-46°-Eに取り、規模は長軸長4.6m、短軸長4.4m、深さ0.25mを測る。主柱穴は4穴確認出来、4本柱の建物であったと思われるが、やや不安定。生活感に乏しい印象がある。

SB-102

〈第51図〉



第27図 SB-41 実測図 (1/80)

4 地点の中央付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-99を切り、SB-103に切られる。長軸方位をN-40°-Eに取り、規模は長軸長6.6m、短軸長6.2m、深さ0.45mを測る。主柱穴は不明。中央にあるピットは地炉と思われるが、判然としない。

SB-103

〈第52図〉

4 地点の中央付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。SB-102・104を切る。長軸方位をN-50°-Wに取り、規模は長軸長5.0m、短軸長4.7m、深さ0.45mを測る。主柱穴は不明。

SB-104

〈第52図〉

4 地点の中央付近において検出した平面プランが不整形を呈する竪穴住居である。SB-103に切られる。方位は不明。規模は南北長6.8m、東西長7.35m、深さ0.15mを測る。主柱穴は不明。

SB-106 〈第53図〉

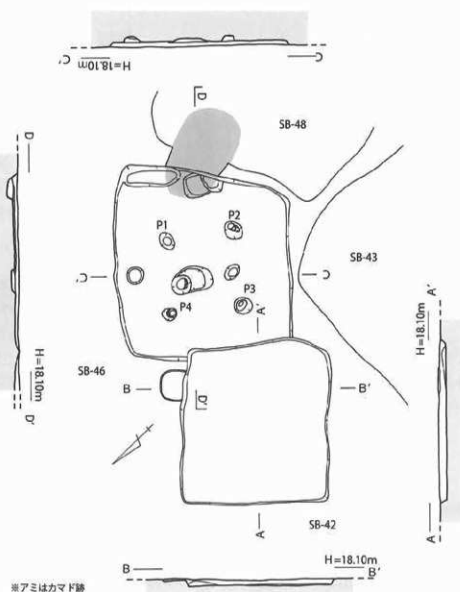
4 地点の中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。SB-101を切る。長軸方位をN-52°-Eに取り、規模は長軸長5.4m、短軸長3.9m、深さ0.18mを測る。主柱穴は2穴確認出来、2本柱の建物であったと思われる。

SB-109 〈第54図〉

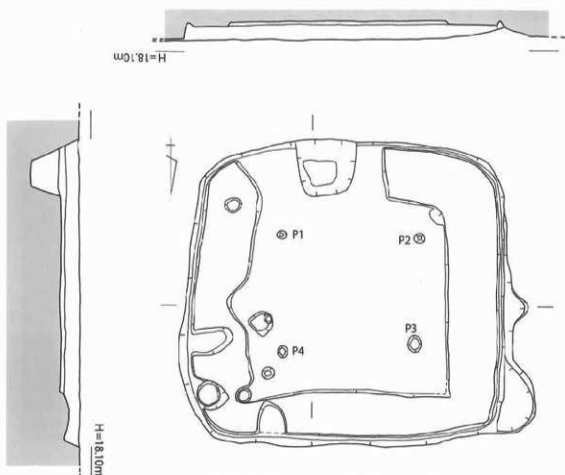
4 地点の中央付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-63°-Wに取り、規模は長軸長4.2m、短軸長3.9m、深さ0.3mを測る。主柱穴は確認出来ず、状況から主柱穴を穿たず、平に主柱を立てる簡易な建物である可能性が想起される。中央のピットには焼土が確認出来、地炉と考えられる。

SB-112 〈第55図〉

4 地点の北西端において検出した平面プランが円形を呈する竪穴住居である。SB-92に切られる。



第28図 SB-42・46 実測図 (1/80)



第29図 SB-43 実測図 (1/80)

規模は直径 8.6m ～ 7.0m、深さ 0.2m を測る。主柱穴は 8 穴と考えられ、8 本柱の建物であったと思われるが、やや不安定。中央にある長方形ピットは地炉の可能性はあるが、焼土等は確認出来ず、確定的な物証は無い。

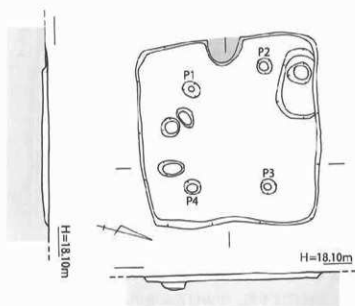
SB-117 〈第56図〉

4 地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴建物（住居？）である。長軸方位を N-9°-E に取り、規模は長軸長 4.3m、短軸長 3.7m、深さ 0.45m を測る。西壁中央に斜角のある深さ 10cm 程度のピットがあり、これを昇降用梯子の痕跡と考えられるならば無柱の住居、または、貯蔵穴の可能性が考えられる。上部掘方と下部の主体部分との軸の相違を考えれば、後者の可能性が高いと思われる。

SB-119

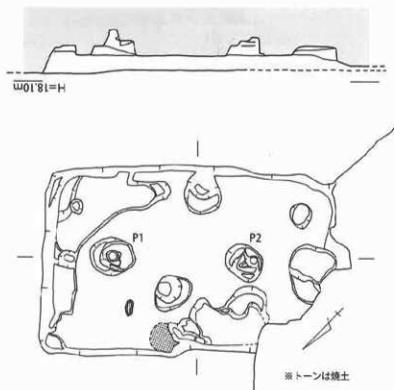
〈第57図〉

4 地点の北端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。



第30図 SB-45 実測図 (1/80)

SB-129を切る。
 長軸方位をN-52°
 -Eに取り、規模は
 長軸長7.8m、短軸長
 7.3m、深さ0.2mを
 測る。主柱穴は4穴
 確認出来、4本柱の
 建物であったと思わ
 れるが、比較的大型
 でありながら主柱穴
 の規模が小さく感じ
 られる。掘り方の検
 出ミスであろうか。
 本来の掘り方はP3
 にあるような状況
 だったと考えられる。
 また、主柱穴に切り
 合いが認められない
 事から建替え等は無
 かったものと思われる。



第31図 SB-49 実測図 (1/80)

SB-122 <第58図>

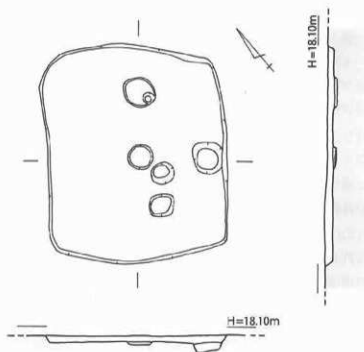
4地点の北端において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。切り合い関係については判然としない。長軸方位をN-30°-Eに取り、規模は長軸長4.25m+α、短軸長3.5m、深さ0.28mを測る。主柱穴は不明。中央付近に焼土が遺存しており、生活痕跡は僅かながら残っている。

SB-126 <第59図>

4地点の北端において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。切り合い関係、及び、規模等についても判然としない。

SB-132 <第60図>

4地点の北端付近において検出した平面プランが正方形を呈する竪穴住居である。長軸方位をN-50°-Eに取り、規模は長軸長4.6m、短軸長4.0m、深さ0.4mを測る。主柱穴は不明。中央付近に地炉と思われる焼土痕跡有り。

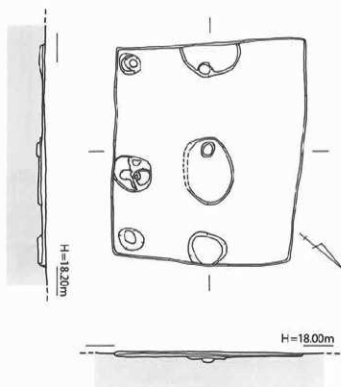


第32図 SB-50 実測図 (1/80)

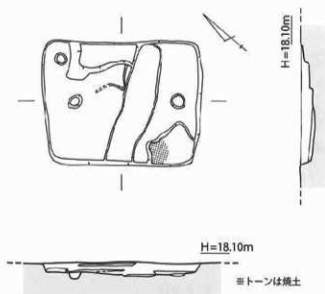
SB-135 <第61図>

4地点の中央付近において検出した平面プランが円形を呈する遺構である。調査担当者は竪穴住居とされているが、平面形・断面形ともに住居形態を成しておらず、土壌として扱う方が妥当と考える。

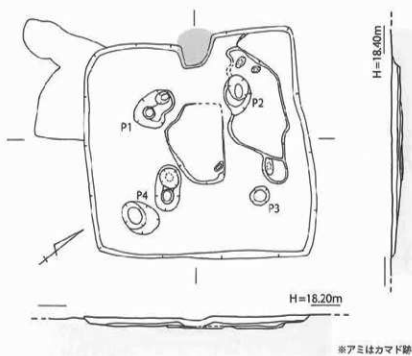
規模は直径 3.0m ～ 3.3m、深さ 1.2m を測る。



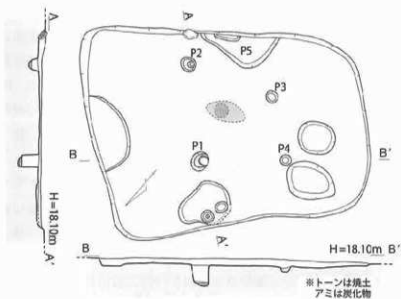
第 3 3 図 SB-51 実測図
(1 / 80)



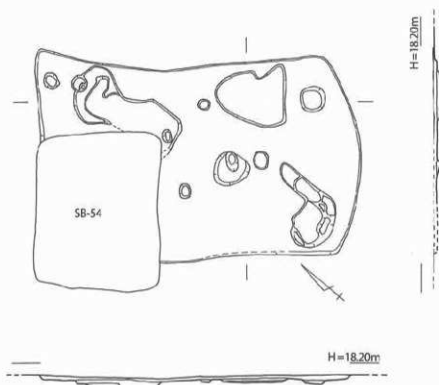
第 3 4 図 SB-54 実測図
(1 / 80)



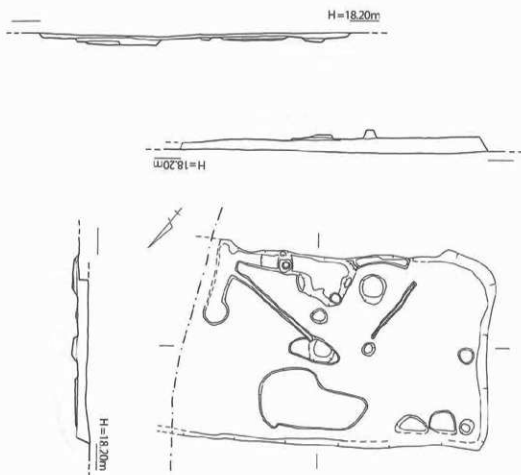
第35図 SB-55 実測図
[1/80]



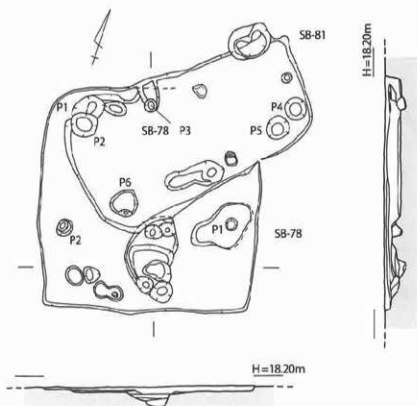
第36図 SB-56 実測図
[1/80]



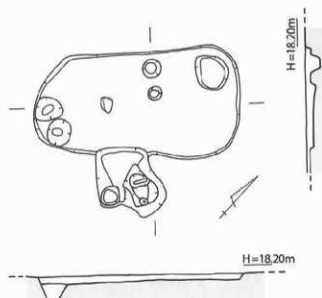
第37図 SB-57 実測図
[1/80]



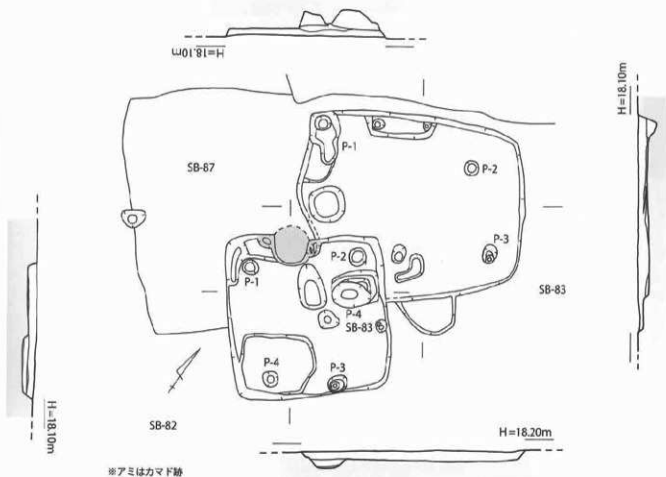
第38図 SB-75 実測図 [1/80]



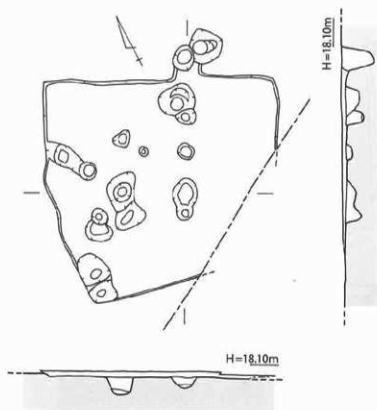
第39図 SB-78・81 実測図 [1/80]



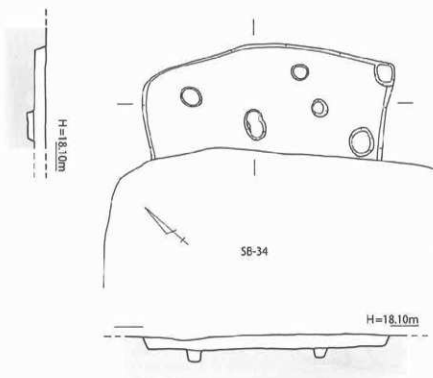
第40図 SB-80 実測図 [1/80]



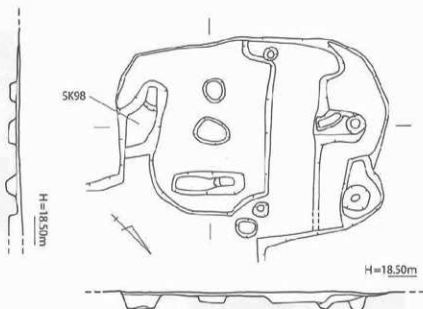
第41図 SB-82・83 実測図 (1/80)



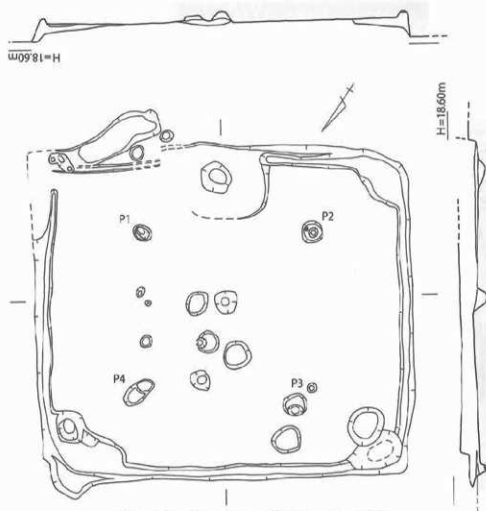
第42図 SB-85 実測図
(1/80)



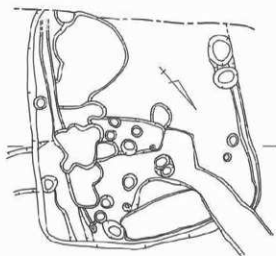
第 4 3 図 SB-86 実測図
[1 / 80]



第 4 4 図 SB-92 実測図
[1 / 80]

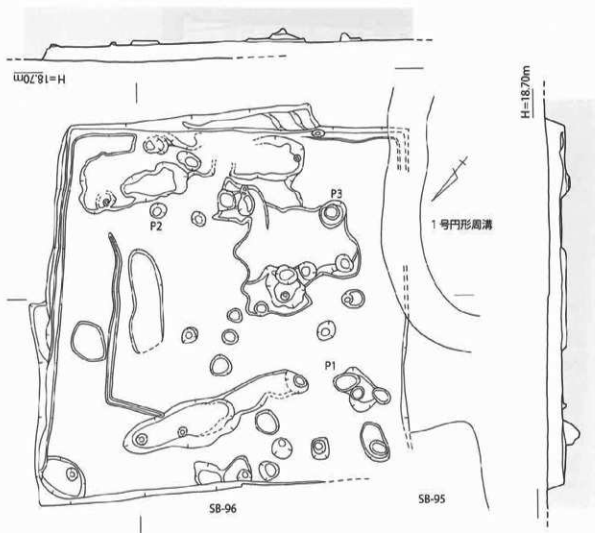


第45図 SB-94 実測図 (1/80)

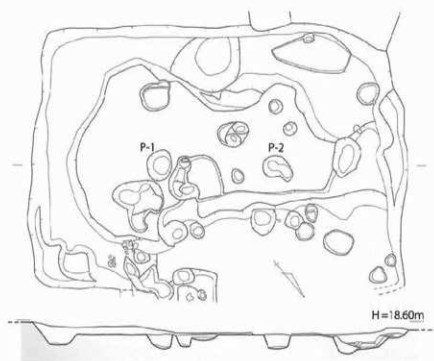


第47図 SB-97 実測図 (1/80)

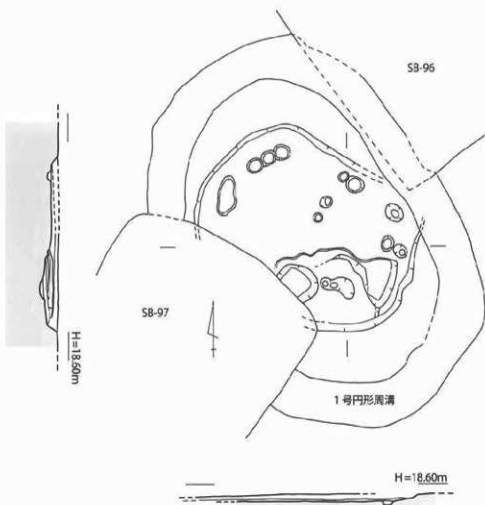




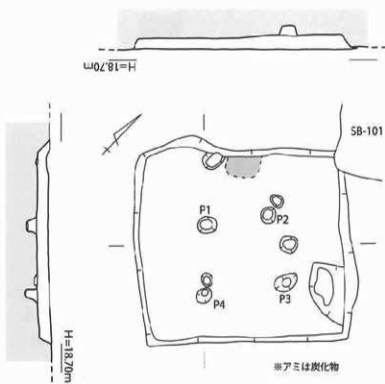
第46図 SB-96 実測図 [1/80]



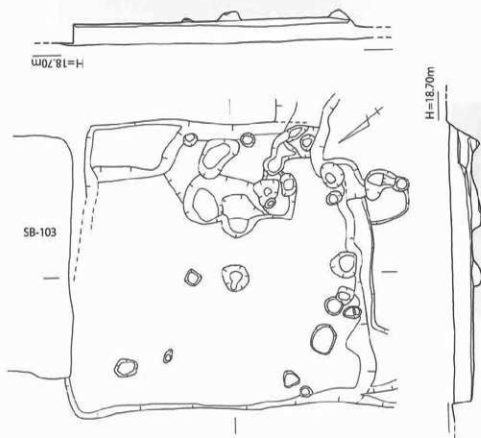
第49図 SB-99 実測図
[1/80]



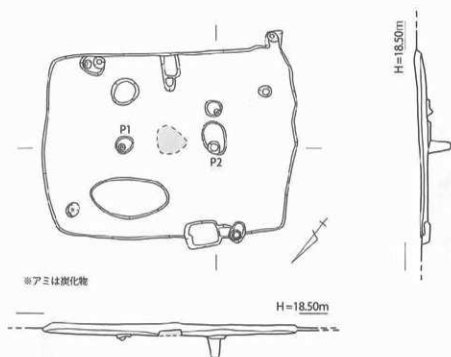
第48図 SB-98実測図 [1/80]



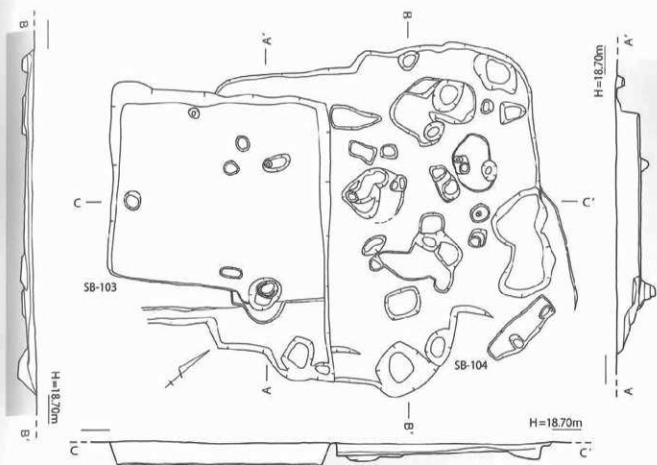
第50図 SB-100 実測図
[1/80]



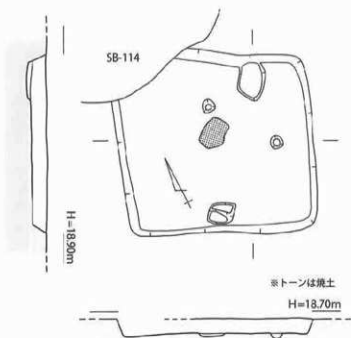
第51図 SB-102 実測図 [1/80]



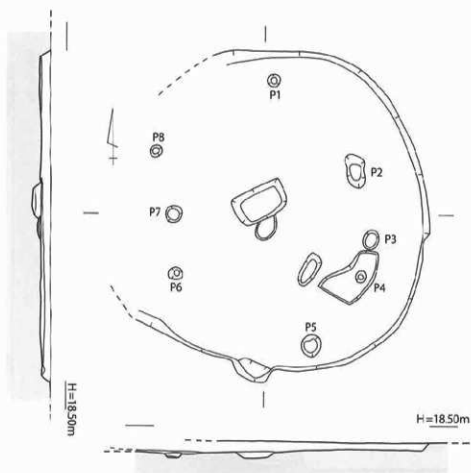
第53図 SB-106
実測図 [1/80]



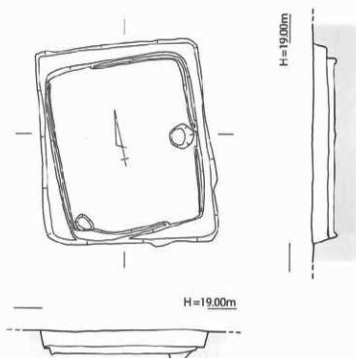
第52図 SB-103・104 実測図 [1/80]



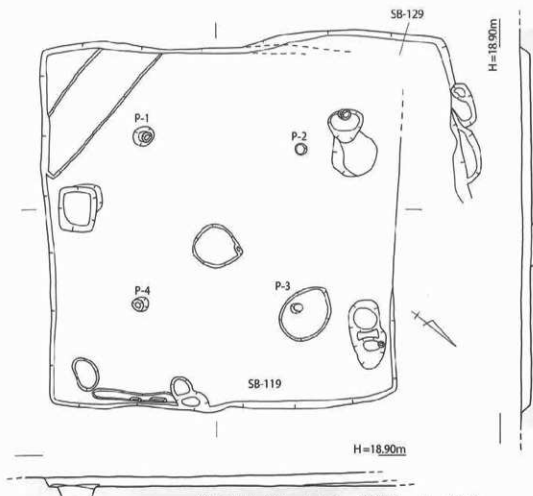
第54図 SB-109 実測図 [1/80]



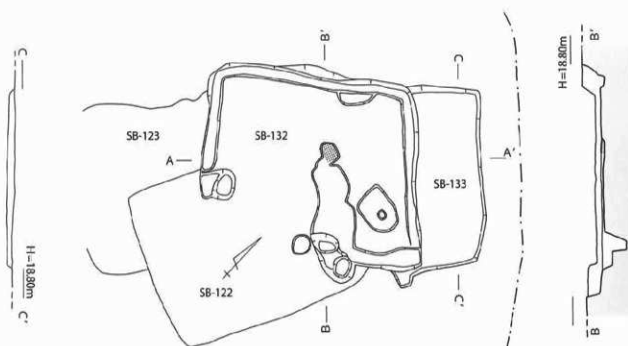
第 5 5 図 SB-112 実測図 (1/80)



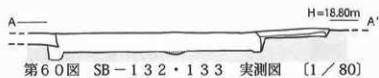
第 5 6 図 SB-117 実測図 (1/80)



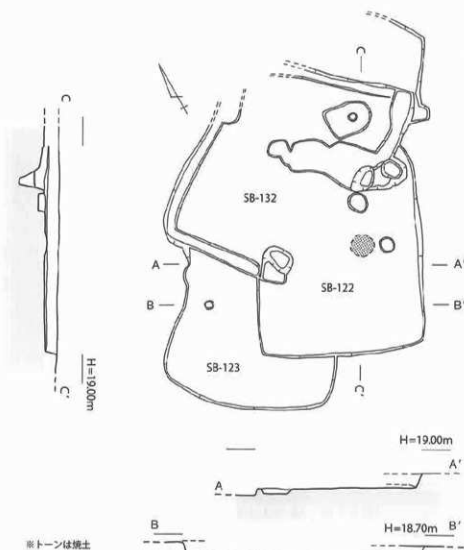
第57図 SB-119 実測図 (1/80)



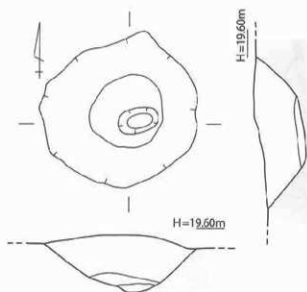
※トーンは焼土



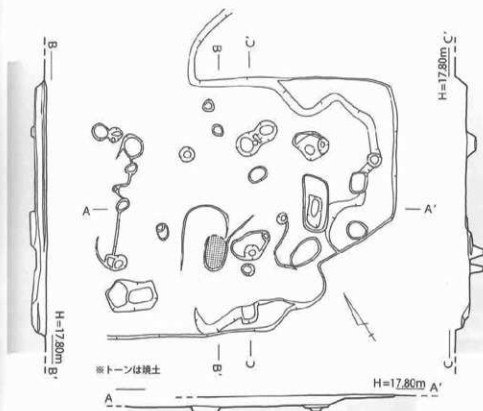
第60図 SB-132・133 実測図 (1/80)



第58図 SB-122・123 実測図 [1/80]



第61図 SB-135 実測図
[1/80]



第59図 SB-126 実測図 [1/80]

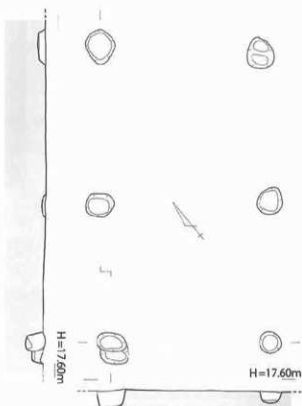
掘立柱建物

掘立柱建物 A <第62図>

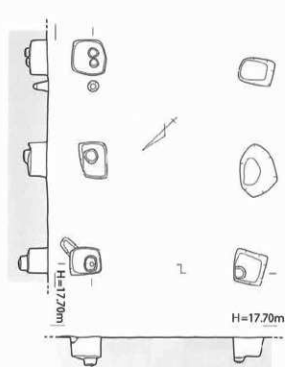
1地点の南端において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-42°-Eに取る1間×2間の側柱建物である。規模は6.5m×3.5m、床面積22.75㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成している。底面には柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。

掘立柱建物 B <第63図>

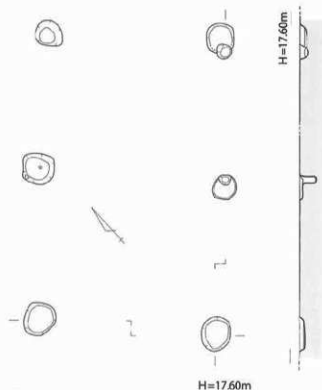
1地点の中央において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-42°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。規模は4.3m×3.4m、床面積14.62㎡を測る。柱穴掘方プランは比較的大きな長方形、または、楕円形を成している。底面には柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。



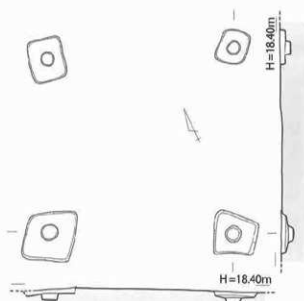
第62図 掘立柱建物 A 実測図 [1/80]



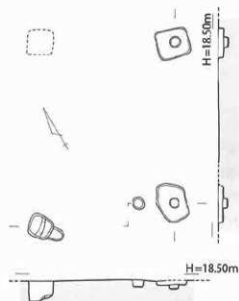
第63図 掘立柱建物B 実測図 [1/80]



第64図 掘立柱建物C 実測図 [1/80]



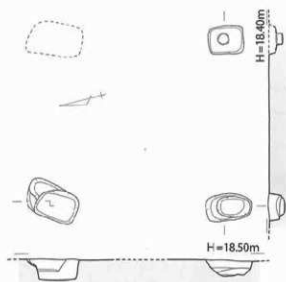
第65図 5号掘立柱建物 実測図 [1/80]



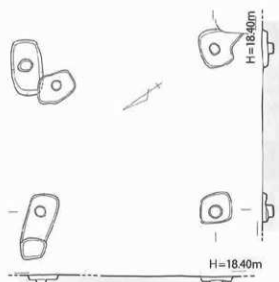
第66図 7号掘立柱建物 実測図 [1/80]

掘立柱建物C〈第64図〉

1地点の南端において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-45°-Eに取る1間×2間の側柱建物である。規模は6.1m×3.75m、床面積22.9㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に長方形、



第67図 8号掘立柱建物 実測図 (1/80)



第68図 9号掘立柱建物 実測図 (1/80)

または、正方形を成している。底面には柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。

5号掘立柱建物〈第65図〉

4地点の南端において検出した4本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-25^{\circ}-E$ に取る1間×1間の側柱建物である。規模は $3.9m \times 3.9m$ 、床面積 15.21 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に正方形を成している。底面には全て柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。

7号掘立柱建物〈第66図〉

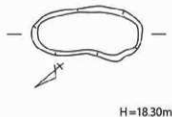
4地点の南端において検出した4本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-31^{\circ}-E$ に取る1間×1間の側柱建物である。規模は $3.4m \times 3.0m$ 、床面積 10.2 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に正方形であるが、やや不整形なものも含まれる。底面には一部柱圧痕が残っているが、全体的に小振の柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。

8号掘立柱建物〈第67図〉

4地点の南端において検出した4本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-14^{\circ}-E$ に取る1間×1間の側柱建物である。規模は $3.7m \times 3.55m$ 、床面積 13.14 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に長方形を成している。底面には一部柱圧痕が残っている。

9号掘立柱建物〈第68図〉

4地点の南端において検出した4本柱の掘立柱建物である。主軸方位を $N-34^{\circ}-E$ に取る1間×1間の側柱建物である。規模は $3.7m \times 3.45m$ 、床面積 12.77 m^2 を測る。柱穴掘方プランは基本的に正方形、または、長方形を成している。底面には全て柱圧痕が残っており、重量物が集荷されていたものと思われる。



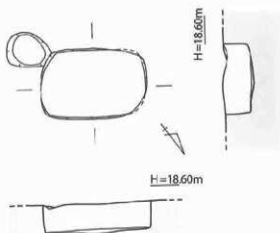
H=18.30m

土壌

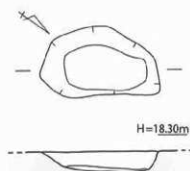
SK-03〈第70図〉

1地点の中央付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位を $N-53^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.1m \times 0.71m$ 、

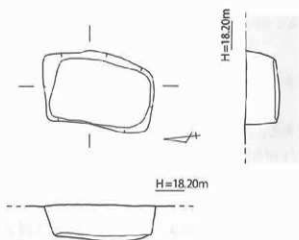
第69図 SK-01 実測図 (1/40)



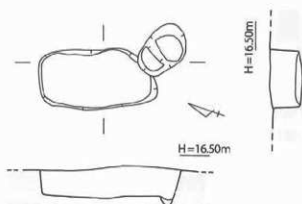
第70図 SK-03 実測図 [1/40]



第71図 SK-04 実測図
[1/40]



第72図 SK-06 実測図 [1/40]



第73図 SK-09 実測図 [1/40]

深さ 0.3m を測る。垂直気味に立つ壁面から貯蔵穴の可能性を考えたいが、SB 群からはやや距離がある。

SK-06 〈第72図〉

1 地点の南西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位を $N-17^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.18m \times 0.78m$ 、深さ 0.38m を測る。

SK-09 〈第73図〉

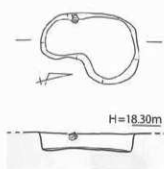
1 地点の北端において検出した平面プランが楕円形を呈する土壌である。長軸方位を $N-18^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.24m \times 0.63m$ 、深さ 0.3m を測る。SK-03 同様、垂直気味に立つ壁面から貯蔵穴の可能性を考えたい。

SK-16 〈第77図〉

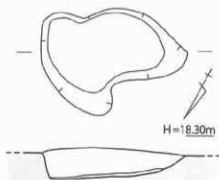
2 地点の東端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位を $N-18^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.2m \times 0.76m$ 、深さ 0.23m ~ 0.33m を測る。平面・断面形態から貯蔵穴の可能性を考えたい。

SK-25 〈第78図〉

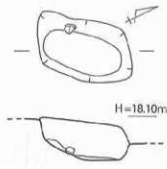
2 地点の中央付近において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。軸方位は不明。規模は



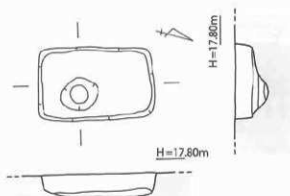
第74図 SK-11
実測図 [1/40]



第75図 SK-13
実測図 [1/40]



第76図 SK-14
実測図 [1/40]



第77図 SK-16 実測図 [1/40]

3.62m×1.3m～1.43m、深さ0.38mを測る。湾曲した幅広の土壇中央に楕円形の土壇を穿っており、中から完形品の壺形土器が出土しており、祭祀を実施した土壇と思われる。

SK-27 <第79図>

2地点の中央北端付近において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壇である。長軸方位をN-37°-Eに取る。規模は1.68m×0.62m～1.05m、深さ0.27mを測る。発掘担当者は祭祀を実施した土壇と判断しているが、遺物には甕棺の破片が含まれており、出土土器類は流入品の可能性が高い。

SK-30 <第80図>

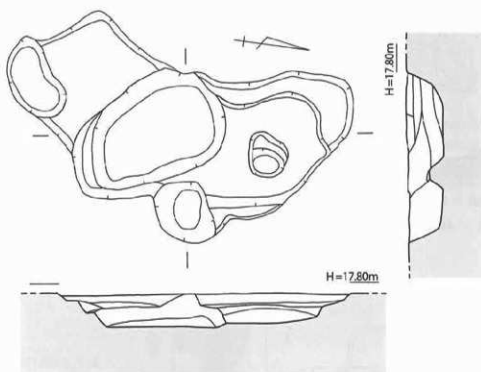
2地点の中央西側付近において検出した平面プランが楕円形を呈する土壇である。長軸方位をN-65°-Eに取る。規模は1.04m×0.71m、深さ0.14m～0.3mを測る。

SK-32 <第81図>

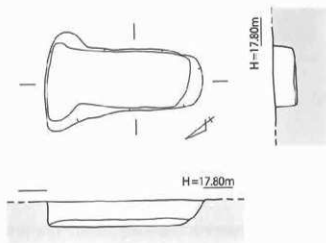
2地点の西端付近において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壇である。長軸方位をN-78°-Eに取る。規模は2.5m×2.45m、深さ0.5mを測る。平面・断面形状から土取穴の可能性もあるが判然とはしない。

SK-36 <第82図>

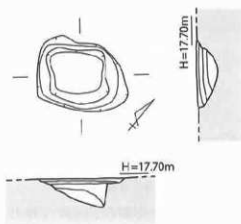
2地点の中央西側付近において検出した平面プランが円形を呈する土壇である。主体部最下と思われる部分の長軸方位はN-85°-Wに取る。規模は1.22m×1.15m、深さ0.53mを測る。土壇底面の形状から土壇墓と判断する方が妥当と思われる。



第78図 SK-25 実測図 [1/40]



第79図 SK-27 実測図 [1/40]



第80図 SK-30 実測図 [1/40]

SK-42 <第83図>

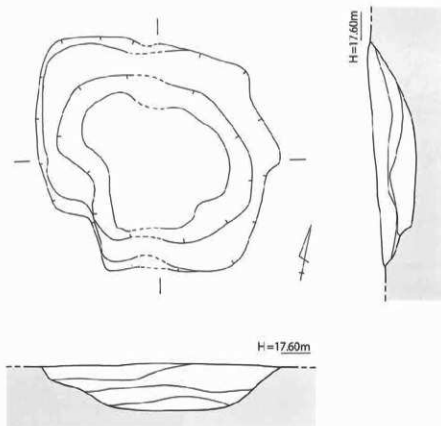
3地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壇である。長軸方位を $N-50^{\circ}-W$ に取る。規模は $0.88m \times 0.42m$ 、深さ $0.16m$ を測る。規模・形状から考えて小児用土壇墓の可能性を考慮する必要がある。

SK-50 <第84図>

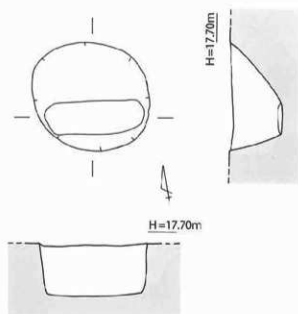
3地点の東端付近において検出した平面プランが長円形を呈する土壇である。長軸方位を南北に取る。規模は $1.2m + \alpha \times 0.8m$ 、深さ $0.75m$ を測る。規模・形状から考えて土壇墓の可能性を考慮する必要がある。SK-51との切り合い関係については不明。

SK-51 <第84図>

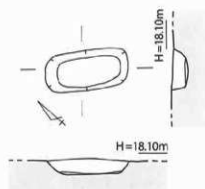
3地点の東端付近において検出した平面プランが長円形を呈する土壇である。長軸方位を南北に取る。規模は $1.76m \times 0.8m$ 、深さ $0.82m$ を測る。規模・形状から考えてSK-50と同様に土壇墓の可能性を



第81図 SK-32 実測図
〔1/40〕



第82図 SK-36 実測図 〔1/40〕



第83図 SK-42 実測図 〔1/40〕

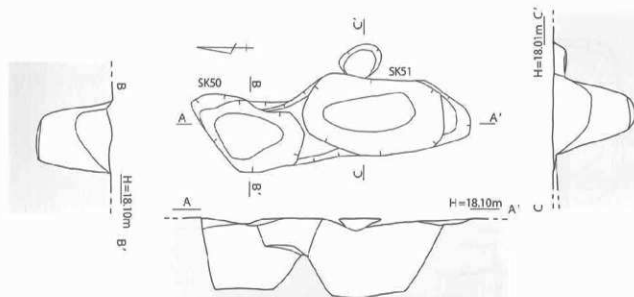
考慮する必要がある。

SK-59 〈第85図〉

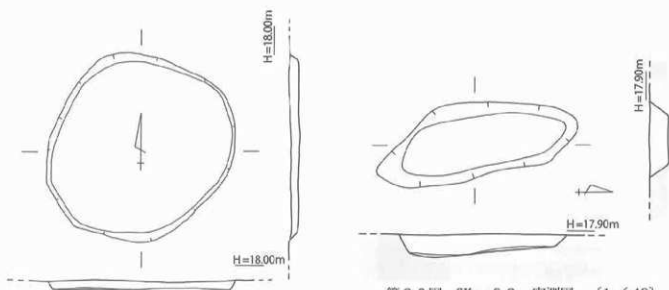
3地点の中央付近において検出した平面プランが円形を呈する土壌である。規模は2.06m×1.71m、深さ0.1mを測る。平面・断面形態から貯蔵穴の可能性を考えたい。

SK-60 〈第86図〉

3地点の南西付近において検出した平面プランが長円形を呈する土壌である。SB-30に切られている。長軸方位をN-12°-Wに取る。規模は2.16m×0.84m、深さ0.2mを測る。規模・形状から考え



第84図 SK-50・51 実測図 [1/40]



第86図 SK-60 実測図 [1/40]

第85図 SK-59 実測図 [1/40]

て土墳墓の可能性を残す。

SK-62 <第87図>

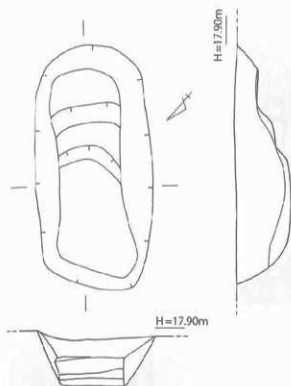
3地点の南西端において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土墳である。長軸方位をN-45°-Wに取る。規模は2.56m×1.23m、深さ0.58mを測る。階段状になった断面形態から貯蔵穴の可能性を考えたい。

SK-66 <第88図>

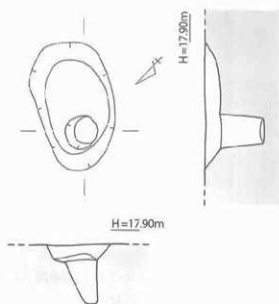
3地点の中央西側において検出した平面プランが楕円形を呈する土墳である。長軸方位をN-62°-Wに取る。規模は1.38m×0.84m、深さ0.16mを測る。基底部には直径30cm、深さ46cmの1穴が穿たれている事から建物の柱穴の可能性も考えたい。

SK-68 <第89図>

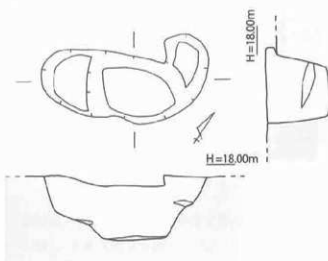
3地点の西端付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土墳である。長軸方位をN-5°



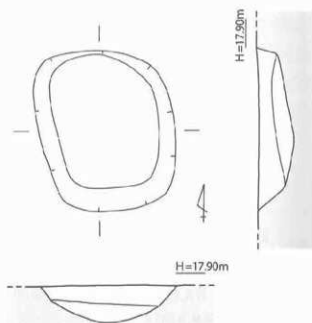
第 87 図 SK-62 実測図 [1/40]



第 88 図 SK-66 実測図 [1/40]



第 90 図 SK-72 実測図 [1/40]



第 89 図 SK-68 実測図 [1/40]

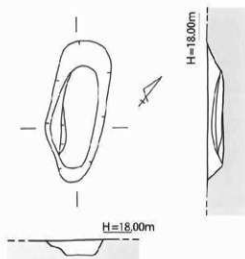
—W に取る。規模は $1.2\text{m} \times 1.42\text{m}$ 、深さ 0.38m を測る。

SK-72 〈第 90 図〉

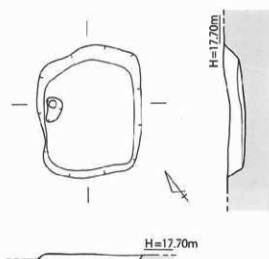
3 地点の東端付近において検出した平面プランが長円形を呈する土坑である。長軸方位を $N-54^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.7\text{m} \times 0.7 \sim 0.9\text{m}$ 、深さ $0.27 \sim 0.64\text{m}$ を測る。

SK-79 〈第 91 図〉

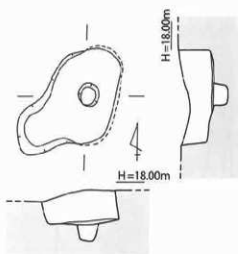
3 地点の北西端において検出した平面プランが長円形を呈する土坑である。長軸方位を $N-40^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.48\text{m} \times 0.6\text{m}$ 、深さ 0.16m を測る。西側断面にあるフラット部の在り方から、小児用土



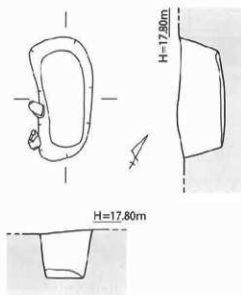
第91図 SK-79 実測図
〔1/40〕



第92図 SK-85 実測図 〔1/40〕



第93図 SK-86 実測図 〔1/40〕



第94図 SK-87 実測図 〔1/40〕

墳墓の可能性を考えたい。

SK-85 〈第92図〉

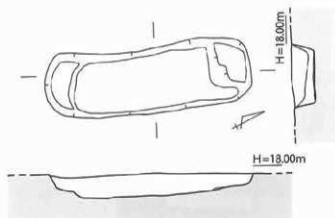
3地点の南西側において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-55°-Wに取る。規模は1.4m×1.11m、深さ0.2mを測る。西壁直下にあるピットの在り方から貯蔵穴の可能性も考えたい。

SK-86 〈第93図〉

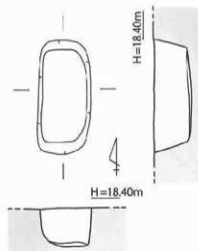
3地点の南西側において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-45°-Eに取る。規模は1.4m×0.8m、深さ0.3mを測る。基底面中央にある逆茂木状ピットの在り方から落とし穴状遺構の可能性を考えたい。

SK-87 〈第94図〉

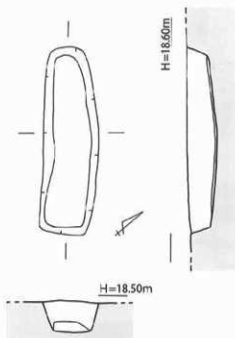
3地点の北端付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。SB-67内にあるが切り合い関係は不明。長軸方位をN-29°-Wに取る。規模は1.3m×0.64m、深さ0.5mを測る。



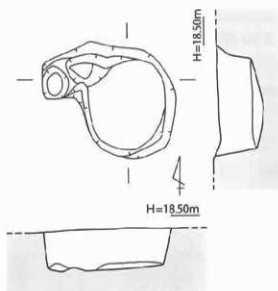
第95図 SK-88 実測図 [1/40]



第96図 SK-100 実測図 [1/40]



第97図 SK-102 実測図
[1/40]



第98図 SK-107 実測図 [1/40]

側壁面の立ち上がり角度や深さ等の状況を鑑み、土壇墓の可能性を考えたい。

SK-88 <第95図>

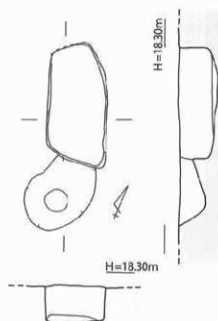
3地点の中央北側付近において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壇である。長軸方位をN-23°-Eに取る。規模は2.16m×0.72m、深さ0.22mを測る。両小口部分にあるフラット面の状況を鑑み、土壇墓の可能性を考えたい。

SK-100 <第96図>

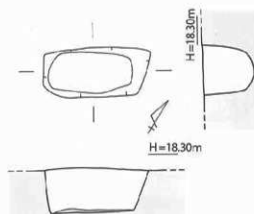
4地点の南端において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壇である。長軸方位を南北に取る。規模は1.2m×0.56m、深さ0.4mを測る。規模・形状から考えて土壇墓の可能性を考慮する必要がある。

SK-102 <第97図>

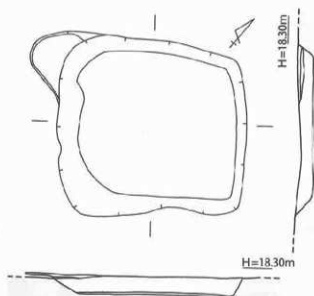
4地点の南端において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する縦方向に長い土壇である。長軸方位をN-49°-Wに取る。規模は1.96m×0.59m、深さ0.31mを測る。規模・形状から考えて土壇墓の可能性のあるものの、判然とはしない。



第99図 SK-108 実測図
[1/40]



第100図 SK-109 実測図 [1/40]



第101図 SK-113 実測図
[1/40]

SK-107 <第98図>

4地点の南西側において検出した平面プランが不整楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-38°-Wに取る。規模は1.45m×1.02m、深さ0.44mを測る。平面・断面形状から貯蔵穴の可能性が高い。北西側に付く突出部は昇降口の可能性もある。

SK-108 <第99図>

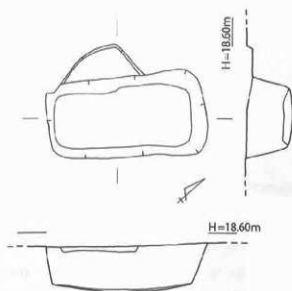
4地点の西端付近において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-22°-Wに取る。規模は1.92m×0.62m~0.72m、深さ0.42mを測る。規模・形状から考えて土壌墓の可能性を考慮する必要がある。

SK-109 <第100図>

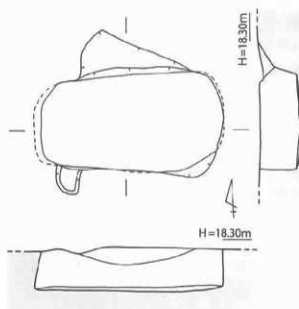
4地点の西端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-57°-Eに取る。規模は1.13m×0.52m、深さ0.48mを測る。SK-108と同様、規模・形状から考えて土壌墓の可能性を考慮する必要がある。

SK-113 <第101図>

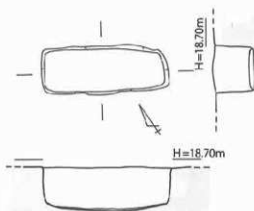
4地点の中央北側において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位をN-47°-



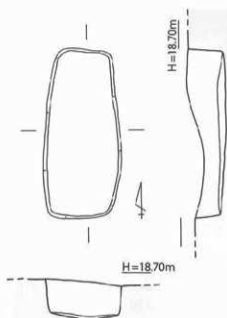
第102図 SK-114 実測図 [1/40]



第103図 SK-120 実測図 [1/40]



第104図 SK-121 実測図 [1/40]



第105図 SK-123 実測図 [1/40]

Eに取る。規模は1.92m×1.91m、深さ0.2mを測る。貯蔵穴と思われる。

SK-114 <第102図>

4地点の中央付近において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-40°-Eに取る。規模は1.67m×0.91m～1.2m、深さ0.05m～0.48mを測る。土壌墓、または、貯蔵穴の可能性が考えられる。

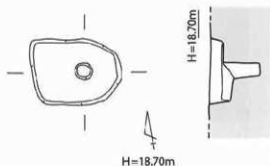
SK-120 <第103図>

4地点の中央北側において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-87°-Wに取る。規模は1.9m×1.14m、深さ0.43mを測る。押印文土器が出土したとの報告もあるが、

断面形状は如実に弥生期の貯蔵穴を成している。

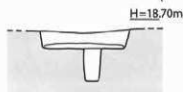
SK-121 <第104図>

4地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-58°-Wに取る。規模は1.33m×0.51m、深さ0.46mを測る。規模や断面形状から考えて土壌墓の可能性を考慮する必要がある。



SK-123 <第105図>

4地点の北端付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位を南北に取る。規模は1.7m×0.82m、深さ0.4mを測る。断面形状から考えて土壌墓の可能性はあるが、判然としない。



第106図 SK-124 実測図 [1/40]

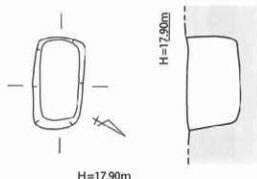
SK-124 <第106図>

4地点の北端において検出した平面プランが不整形を呈する土壌である。長軸方位をN-82°-Wに取る。規模は0.95m×0.7m、深さ0.17mを測る。基底面中央にある逆茂木状ビットの在り方から落とし穴状遺構の可能性を考えたい。

土壌墓

1号土壌墓 <第107図>

2地点の東端において検出した平面プランが長方形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-62°-Eに取る。規模は0.97m×0.54m、深さ0.56mを測る。掘り方の有無については不明。直葬か。



2号土壌墓 <第108図>

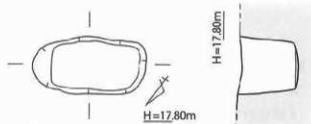
2地点の東端において検出した平面プランが楕円形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-55°-Eに取る。規模は1.19m×0.6m、深さ0.62mを測る。掘り方の有無については不明。直葬か。



第107図 1号土壌墓 実測図 [1/40]

4号土壌墓 <第109図>

2地点の中央において検出した平面プランが長方形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-75°-Eに取る。規模は1.18m×0.58m、深さ0.08m～0.29mを測る。掘り方の有無については不明。直葬か。

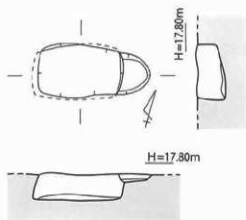


10号土壌墓 <第111図>

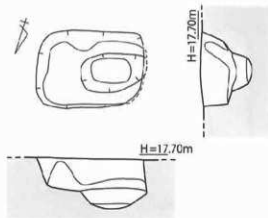
2地点の中央北側において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-66°-Eに取る。規模は1.1m×0.96m、深さ0.13m～0.4mを測る。南側の側壁部分にあるフラット面の状況から、木蓋土壌墓の可能性を考えたい。



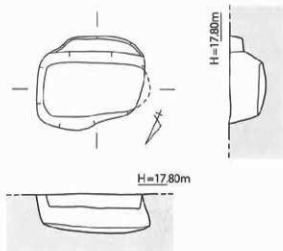
第108図 2号土壌墓 実測図 [1/40]



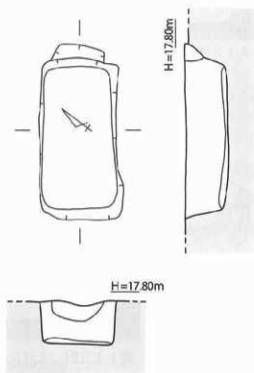
第109図 4号土墳墓 実測図
[1/40]



第110図 8号土墳墓 実測図 [1/40]



第111図 10号土墳墓 実測図 [1/40]



第112図 11号土墳墓 実測図 [1/40]

11号土墳墓〈第112図〉

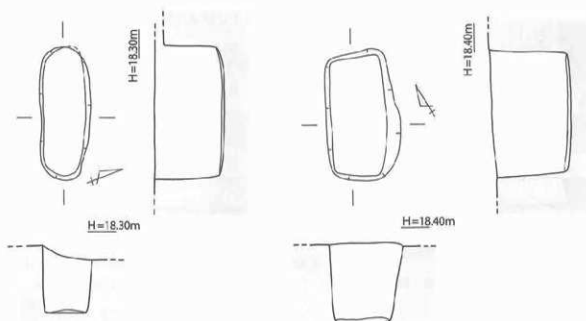
2地点の中央北側において検出した平面プランが長方形を呈する土墳墓である。長軸方位をN-37°-Wに取る。規模は1.84m×0.88m、深さ0.45mを測る。東側の小口部分にある傾斜面は土壌中に主体部たる施設を搬入する折の痕跡と思われる。この状況、及び、規模を鑑み、木棺直葬の可能性も考慮したい。

12号土墳墓〈第113図〉

3地点の北端において検出した平面プランが長円形を呈する土墳墓である。長軸方位をN-69°-Wに取る。規模は1.4m×0.53m、深さ0.59mを測る。

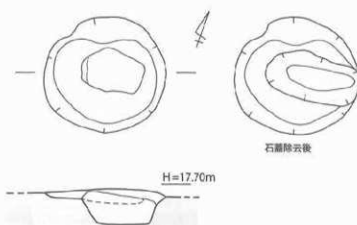
13号土墳墓〈第114図〉

4地点の北端において検出した平面プランが長方形を呈する土墳墓である。長軸方位をN-31°-Eに取る。規模は1.4m×0.78m、深さ0.82mを測る。



第113図 12号土墳墓 実測図
[1/40]

第114図 13号土墳墓 実測図 [1/40]



第115図 1号石蓋土墳墓 実測図 [1/40]

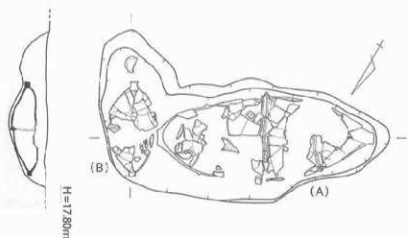
襖棺墓 (K)

K-3 (A) 〈第116図〉

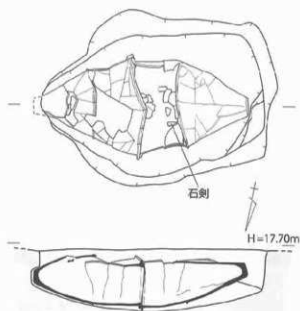
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する成人用襖棺墓である。規模は $1.7\text{m} + \alpha \times 1.0\text{m}$ 、深さ 0.43m を測る。掘り方中央に斜角 3° をもって襖棺を埋置する。上襖と下襖が口縁部で接する合口式襖棺で、主軸方位は $N-60^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 1.74m を測る。上半部は後世の削平により欠失している。

K-3 (B) 〈第116図〉

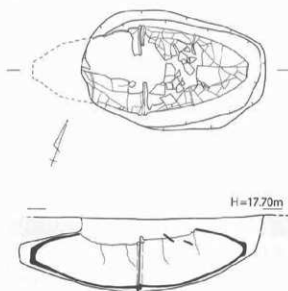
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する小児用襖棺墓である。規模は $1.2\text{m} \times 0.65\text{m} + \alpha$ 、深さ 0.32m を測る。掘り方中央に斜角 1° をもって襖棺を埋置する。上襖と下襖が口縁部で接する合口式襖棺で、主軸方位は $N-30^\circ-W$ に取る。規模は主軸線上で 0.75m を測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。



第116図 K-3 (A・B)
実測図 [1/30]



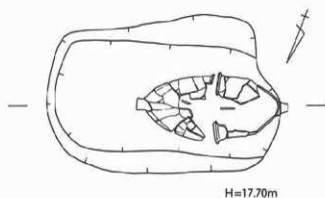
第117図 K-6 実測図 [1/30]



第118図 K-11 実測図 [1/30]

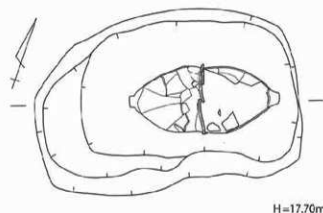
K-6 <第117図>

2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が不整長方形を呈する成人用褒棺墓である。規模は $1.87\text{m} + \alpha \times 1.41\text{m}$ 、深さ 0.5m を測る。掘り方中央に斜角 3° をもって褒棺を埋置する。合口式褒棺で、主軸方位は $N-79^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 1.7m を測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。副葬品として石剣切先があるが、状況から棺外副葬品と考えられる。



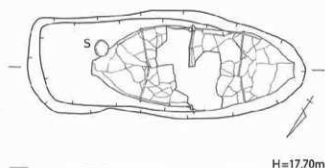
H=17.70m

第119図 K-13 実測図 [1/20]



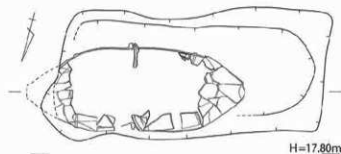
H=17.70m

第120図 K-14 実測図 [1/20]



H=17.70m

第121図 K-17 実測図 [1/30]



H=17.80m

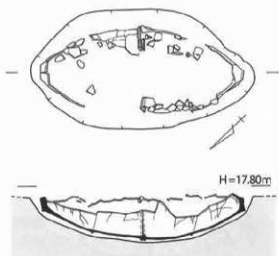
第122図 K-28 実測図 [1/30]

K-11 <第118図>

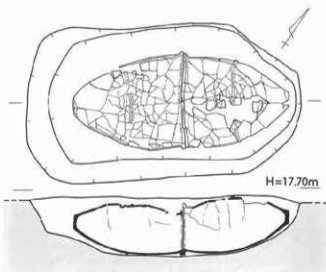
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する成人用甕棺墓である。規模は $1.47\text{m} + \alpha \times 0.95\text{m}$ 、深さ 0.58m を測る。掘り方末端に甕棺収納用の横穴を穿ち、斜角 2° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-71^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 1.73m を測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。

K-13 <第119図>

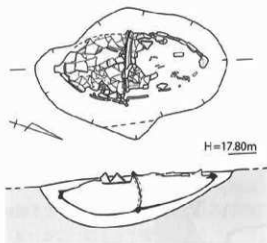
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が隅丸方形を呈する小児用甕棺墓である。規模は $1.22\text{m} + \alpha \times 0.83\text{m}$ 、深さ 0.35m を測る。掘り方の西寄りに斜角 3° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-68^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 0.8m を測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。



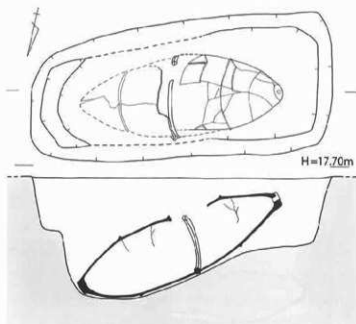
第123図 K-35 実測図 [1/30]



第124図 K-41 実測図 [1/30]



第125図 K-46 実測図 [1/20]



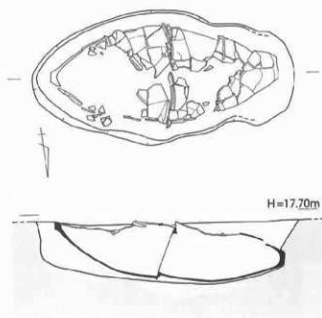
第126図 K-47 実測図 [1/30]

K-14 <第120図>

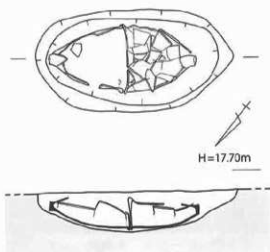
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が隅丸長方形を呈する小児用甕棺墓である。規模は1.41m×0.96m、深さ0.35mを測る。掘り方の東寄りに斜角15°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-70°-Eに取る。規模は主軸線上で0.81mを測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。

K-17 <第121図>

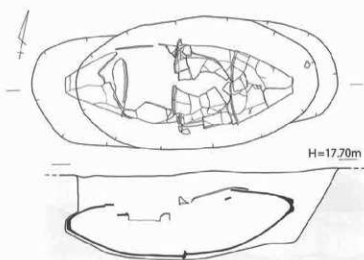
2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が不整長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は2.23m×0.86m、深さ0.54mを測る。掘り方の西寄りに斜角1°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-59°-Eに取る。規模は主軸線上で1.61mを測る。土圧により上半部は破損しているが、比較的遺存状況は良好。



第127図 K-52 実測図 (1/30)



第129図 K-58 実測図 (1/20)



第128図 K-54 実測図 (1/30)

K-28 <第122図>

2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は $2.32\text{m} \times 1.05\text{m}$ 、深さ 0.8m を測る。掘り方末端に甕棺収納用の横穴を穿ち、やや北東寄りに斜角 1° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-75^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 1.73m を測る。土圧により上半部は破損している。

K-35 <第123図>

2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する成人用甕棺墓である。規模は $1.79\text{m} \times 0.95\text{m}$ 、深さ 0.34m を測る。掘り方中央に水平に甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-43^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 1.62m を測る。上半部は後世の削平により欠失している。

K-41 <第124図>

2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が隅丸長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は2.19m×1.25m、深さ0.47mを測る。掘り方のやや東寄りに斜角1°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-55°-Eに取る。規模は主軸線上で1.72mを測る。土圧により上半部は破損している。

K-46 <第125図>

2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が不整形円形を呈する小児用甕棺墓である。規模は1.0m×0.7m、深さ0.26mを測る。掘り方中央に斜角5°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-19°-Wに取る。規模は主軸線上で0.84mを測る。上半部は後世の削平により欠失している。

K-47 <第126図>

2地点の中央付近において検出した、掘り方平面が隅丸長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は2.39m×1.13m、深さ0.97mを測る。掘り方中央に斜角25°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-72°-Eに取る。規模は主軸線上で1.74mを測る。遺存状況は良好。

K-52 <第127図>

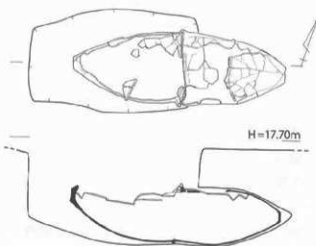
2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する成人用甕棺墓である。規模は2.09m×1.08m、深さ0.49mを測る。掘り方中央に斜角10°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-83°-Wに取る。規模は主軸線上で1.84mを測る。上半部は後世の削平により欠失している。

K-58 <第129図>

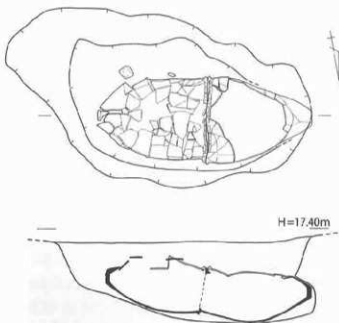
2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する小児用甕棺墓である。規模は1.03m×0.54m、深さ0.23mを測る。掘り方中央に斜角2°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-52°-Eに取る。規模は主軸線上で0.78mを測る。上半部は後世の削平により欠失している。

K-63 <第130図>

2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が長方形を呈する成人用甕棺墓である。K-62に切られている。規模は1.4m+α×0.82m+α、深さ0.77mを測る。掘り方末端に甕棺収納用の横穴を穿ち、やや北東寄りに斜角5°をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位はN-71°-Eに取る。規模は主軸線上で1.69mを測る。土圧により上半部は破損している。



第130図 K-63 実測図 [1/30]



第131図 K-76 実測図 [1/30]

K-74

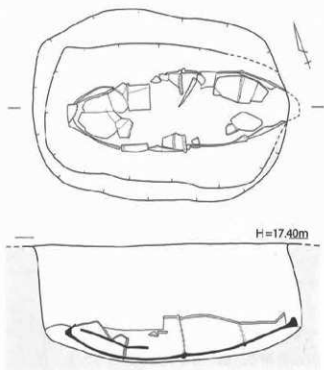
2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が不整形円形を呈する小児用甕棺墓である。規模は $1.8\text{m} \times 1.19\text{m}$ 、深さ 0.43m を測る。掘り方中央に斜角 5° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-77^\circ-E$ に取る。規模は主軸線上で 0.94m を測る。掘り方南西側にある長方形部分は、その形状から木棺墓、または、土塋墓の可能性ある。遺存状況は良好。

K-76 (第131図)

2地点の西側付近において検出した、掘り方平面が不整形長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は $2.45\text{m} \times 1.35\text{m}$ 、深さ 0.64m を測る。掘り方末端に甕棺収納用の横穴を穿ち、西寄りに斜角 4° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-79^\circ-W$ に取る。規模は主軸線上で 1.65m を測る。土圧により上半部は破損している。

K-77 (第132図)

2地点の西端付近において検出した、掘り方平面が隅丸長方形を呈する成人用甕棺墓である。規模は $2.05\text{m} + \alpha \times 1.51\text{m}$ 、深さ 0.91m を測る。掘り方中央に斜角 3° をもって甕棺を埋置する。合口式甕棺で、主軸方位は $N-69^\circ-W$ に取る。規模は主軸線上で 1.85m を測る。土圧により上半部は破損している。



第132図 K-77 実測図 [1/30]

溝状遺構

SD-01 (第3図)

1地点の南端で検出した溝状遺構で、北～南方向の流路を持つ。規模は現状で検出長 14.5m 、幅 1.7m 、深さ $0.13 \sim 0.53\text{m}$ を測る。

SD-02 (第3図)

1地点の南端で検出した溝状遺構で、北西～南東方向の流路を持つ。規模は現状で検出長 20.5m 、幅 2.6m 、深さ $0.01 \sim 0.05\text{m}$ を測る。形状も一定しないことから、自然流路と判断した。

SD-03 (第4図)

3地点の西端で検出した溝状遺構。流路方向不明。規模は現状で検出長 27.8m 、幅 0.6m 、深さ $0.18 \sim 0.35\text{m}$ を測る。

SD-04 (第4図)

3地点の中央付近で検出した溝状遺構で、南から北に向かい底面レベルを下げている。規模は現状で検出長 38.0m 、幅 2.0m 、深さ $0.19 \sim 1.15\text{m}$ を測る。直線的な方向性に加え、断面形が逆台形を成しながら一般的な溝を浚渫する深さを有していることから、大規模な区画溝、または、環濠の一部と判断した。調査区の関係上、これ以上の範囲・位置確認が出来なかった事が悔やまれる。

SD-05 (第5図)

4地点の中央付近で検出した溝状遺構。流路不明。規模は現状で検出長18.4m、幅0.6m、深さ0.25mを測る。西端付近で大きく南に屈曲するが、その後の方向性は不明。

SD-06 (第5図)

4地点の北端で検出した溝状遺構。東から西に向かい若干底面レベルを下げる。規模は現状で検出長21.8m、幅0.32m、深さ0.07m～0.24mを測る。中央付近で大きく屈曲するが、その後の延長部分については不明。

小 結

ここまで新庄・六反田遺跡検出の遺構について概観してきたが、ここで当該遺跡の特徴について記述したい。

最終的に、新庄・六反田遺跡(1～4地点)においては135軒の竪穴住居、9棟の掘立柱建物、122基の甕棺墓(K-88～114については平板測量のみ)、126基の土壇、13基の土壇墓、1基の石蓋土壇墓、1基の周溝状遺構、6条の溝状遺構、2基の集石遺構を検出した。

集落の主な時期は1期 弥生時代前期末～中期前半、2期 中期後半～後期前半、3期 後期後半～古墳時代前半、4期 白鳳期～奈良時代初頭の4時期に分かれる。

1期目は3地点の東側及び4地点の西側に集中する傾向がある。最も標高の高い地点であり、住居区域としての土地利用は当該周辺から始まるようである。

2期目は3地点の西側及び4地点の中央部分に分散する傾向にあり、1期の集中域から東西方向に拡散していくような状況を呈している。この現象を裏打ちするような物証はなく、明確な原因は把握出来ない。3期目は3地点と4地点の境部分周辺を中心として、4地点全域に住居が広がる時期であり、住居数が非常に多く検出された時期でもある。3地点中央部以西については当該時期の住居は極端に少なく、明確に住居区域に差を持たせている。SD-04を境界とした集落内外の概念が存在していたようで、弥生時代後期後半以降に形成された集落域とすれば中里遺跡1・2地点や深田遺跡との関係性が考えられ、当該地域の集落形態の変遷を考える上で、重要な示唆を含んでいる。

4期目は3地点の中央部(A群)及び2地点の西端部(B群)に分散し、住居区域が見事なまでに2極化する。A群はB群に比べやや古い時期にあり、6世紀後半～7世紀中頃までを主体としている。B群は7世紀中頃～8世紀初頭頃の住居群であり、状況的にはA群からB群へ居住域を変更(移動)したと考える事が妥当と思われる。比較的余裕を持った区域であるA群に対し、B群は狭い区域に押し込まれている感があり、大化の改新以降、本地域においても土地利用に一定の制限が規定されたものと思われる。

掘立柱建物に関しては、時期を決定する物証に乏しいが、1号～3号(a群)が6本柱で構成され、軸方向が直角である事から同時期の所産であると思われ、各建物間に余裕があるところから4期のA群に係する建物群と推定した。また、5・7～9号(b群)については全て4本柱で構成され、柱穴形状の類似性、建物間の密集性から3期の竪穴住居群に伴う建物群であると推定した。

甕棺墓に関しては、全て弥生時代中期の範疇に全ておさまるものと思われる。中でも中期中頃～中期後半に集中しており、本群を構成している。しかしながら、甕棺墓の墓域となっている区画には基本的に住居は進入しておらず、特に4期のb群については存在時期が大きく異なるにも拘らず、避けるように住居域を設定している。これは7世紀代に入る時期においても弥生時代中期～後期の甕棺墓の存在に気づいていた事になり、経年変化による甕棺墓の被覆土の変化を知る上で非常に興味深い事実であった。

以上、述べて来たように、当該遺跡の集落としての存続時期は非常に長いものの、時期により居住区域

が変化する状況が判明した。しかしながら、住居群と甕棺墓群を代表とする墓域は連動せず、当該調査区内においてはその相関性は明確に出来なかった。大きな成果としては、3期目の住居群の在り方が八女地方における環濠集落の消滅と中里遺跡や深田遺跡に見られる大規模な方形環濠の出現の解明に1つの手掛かりを見い出せた事であった。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては未だ未解明の事案が多く、今後の発掘調査における新発見と合わせ、以降、当該遺跡を含めた再考察を行い、当地方の歴史解明に尽力したい。

宮ノ后遺跡

遺跡の概要

当該遺跡は調査面積が約4,400㎡と広く、調査の便宜上、及び、圃場整備事業地における施工状況から3地区に分割されている。弥生時代から奈良時代、及び、平安時代～鎌倉時代までの遺構が検出されている。奈良期の遺構が中心を成すものの、その数は非常に少なく竪穴住居2軒、掘立柱建物4棟を確認しただけであった。C地区においては鎌倉期に該当すると思われる幅15m～20m、深さ1～1.5mの規模を持つ溝状遺構が検出されている。発掘報告者はこれを微高地上を巡る環濠であると結論づけられているが、この是非については本遺跡の所在遺構数が少ない事も合わせて後述したい。

以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述する。

1) 遺構と出土遺物

竪穴住居

SB-01 〈第133図〉

A地区において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。主軸方位をS-88°-Eに取り、規模は長軸長4.85m、短軸長3.78m、深さ0.18mを測る。東壁やや南寄りにカマドを付設する。主柱穴については判然としない。切り合い等の痕跡は見られず、建替え等は無かったものと思われる。

小田編年Ⅵ期～Ⅶ期の須恵器が出土しており、7世紀後半代を中心とした時期に営まれていたものと思われる。

SB-03 〈第138図〉

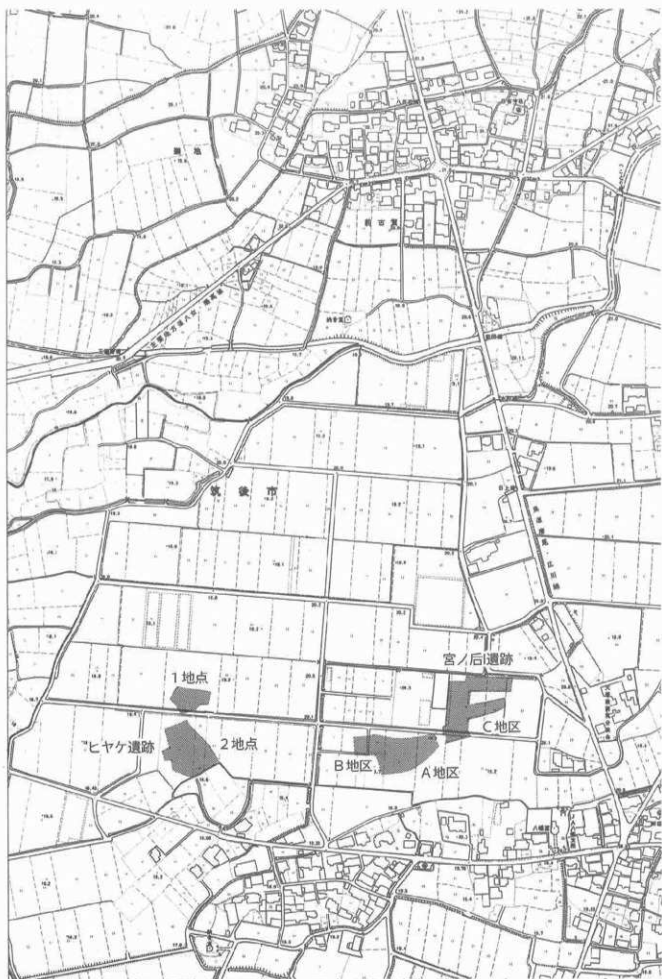
B地区中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する竪穴住居である。主軸方位をS-88°-Eに取り、規模は長軸長4.23m、短軸長3.34m、深さ0.31mを測る。東壁ほぼ中央にカマドを付設し、四壁に壁溝を有している。主柱穴については判然としない。切り合い等の痕跡は見られず、建替え等は無かったものと思われる。

小田編年Ⅶ期を中心とした須恵器が出土しており、7世紀



第133図 SB-01 実測図

[1/80]



第134図 宮ノ后遺跡 (A～C地区)、及び、ヒヤケ遺跡 位置図 (1/5,000)

後半～8世紀初頭頃を中心とした時期に営まれていたものと思われる。

掘立柱建物

2号掘立柱建物 (SB-02)

〈第137図〉

A地区において検出した4本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-79°-Wに取る1間×1間の側柱建物である。規模は3.6m×2.6m、床面積9.36㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形を成している。底面には一部柱圧痕状の痕跡が残るが、全体的に小振の柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。位置関係からSB-01との関係が考えられる。

4号掘立柱建物 (SB-04)

〈第139図〉

B地区中央付近において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-79°-Wに取る1間×2間の側柱建物である。規模は3.5m×3.05m、床面積10.68㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形であるが、やや不整形なものも含まれる。底面には一部柱圧痕が残っているが、全体的に小振の柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。

5号掘立柱建物 (SB-05)

〈第140図〉

B地区中央付近において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-2°-Eに取る2間×2間の側柱建物である。規模は4.0m×3.0m、床面積12.0㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形であるが、やや不整形なものも含まれる。ピットの一部に切り合いが認められることから、建て替え等の所作があったものと思われる。全体的に小振の柱穴を成しており、重量物の搬入には不向きと思われる。

位置関係からSB-03との関係が考えられる。

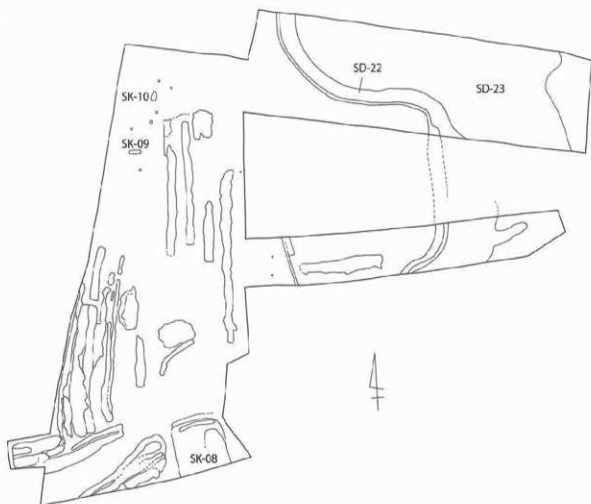
6号掘立柱建物 (SB-06) 〈第141図〉

B地区南端において検出した6本柱の掘立柱建物である。主軸方位をN-55°-Eに取る2間×1間の側柱建物である。規模は3.9m×3.14m、床面積12.25㎡を測る。柱穴掘方プランは基本的に円形であ



第135図 宮ノ后遺跡 A・B地区 遺構配置図

(1/600)



第136図 宮ノ后遺跡 C地区 遺構配置図 [1/600]

り全体的に小振の柱穴を成す。重量物の搬入には不向きと思われる。

土壌

SK-01 〈第142図〉

A区中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。SK-02を切っている。長軸方位をN-20°-Eに取る。規模は2.05m×0.75m、深さ0.35mを測る。垂直気味に立つ壁面や副葬品と思われる出土品から土壌墓と考えられる。

SK-02 〈第142図〉

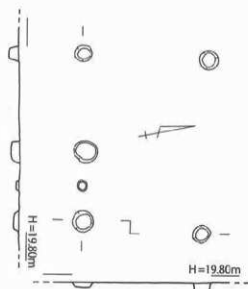
A区中央付近において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。SK-01に切られている。長軸方位は不明で、規模は1.3m + α × 1.3m、深さ0.52mを測る。

SK-03 〈第143図〉

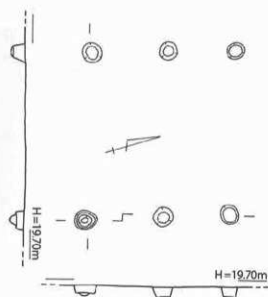
A区中央付近において検出した平面プランが不整円形を呈する土壌である。長軸方位は不明で、規模は1.2m×1.0m、深さ0.08m～0.23mを測る。

SK-04 〈第144図〉

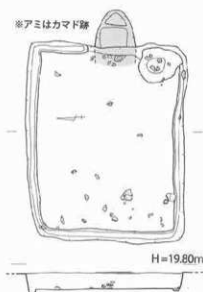
A区南端において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位をN-80°-Wに



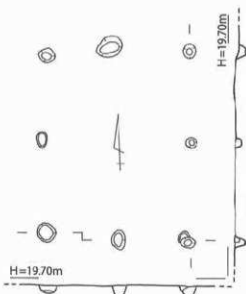
第137図 SB-02 実測図
[1/80]



第139図 SB-04 実測図
[1/80]



第138図 SB-03
実測図 [1/80]



第140図 SB-05 実測図
[1/80]

取る。規模は2.0m×0.6m、深さ0.24mを測る。土壇墓の可能性も考えたい。

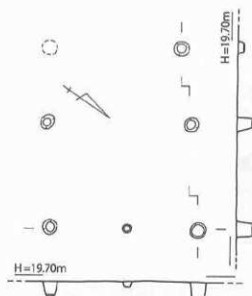
SK-05 <第145図>

A区・B区の境において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壇である。長軸方位を南北に取る。

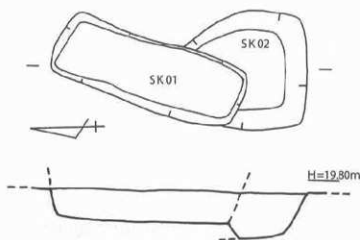
規模は1.7m×0.68m、深さ0.16mを測る。小型ではあるが、土壇墓の可能性も考えたい。

SK-06 <第146図>

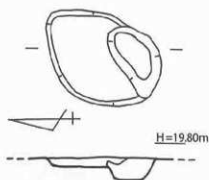
B区西側において検出した平面プランが楕円形を呈する土壇である。長軸方位をN-87°-Eに取る。



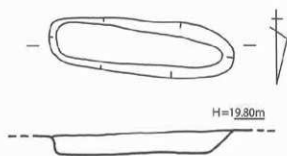
第141図 SB-06 実測図
[1/80]



第142図 SK-01・02 実測図 [1/40]



第143図 SK-03 実測図
[1/40]



第144図 SK-04 実測図 [1/40]

規模は 5.8m×4.2m、深さ 0.65m を測る。風倒木痕か。

SK-07 〈第147図〉

B区西端において検出した平面プランが長方形を呈する土壌である。長軸方位を N-50°-E に取る。
規模は 2.25m×1.05m、深さ 0.35m を測る。

SK-08 〈第136図〉

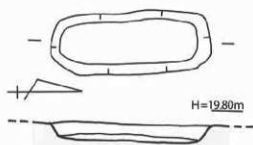
C区において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌である。長軸方位を N-76°-E に取る。
規模は 8.25m + α × 8.2m、深さ 0.23m を測る。

SK-09 〈第136図〉

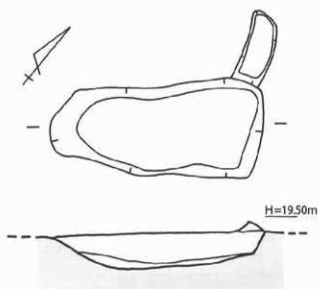
C区において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌である。長軸方位を N-80°-E に取る。
規模は 2.1m×0.6m、深さ 0.05m を測る。

SK-10 〈第136図〉

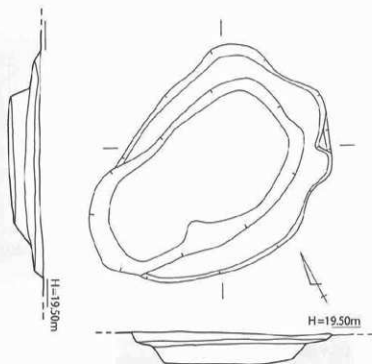
C区において検出した平面プランが不整楕円形を呈する土壌である。長軸方位を N-20°-E に取る。



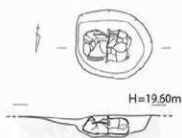
第145図 SK-05 実測図 [1/40]



第147図 SK-07 実測図 [1/40]



第146図 SK-06 実測図 [1/80]



第148図 SX-01
実測図 [1/40]

規模は1.45m×0.9m、深さ0.16mを測る。

SX-01（襃棺墓）〈第148図〉

B地区の南西端付近において検出した、掘り方平面が楕円形を呈する襃棺墓である。規模は0.8m×0.72m、深さ0.23mを測る。掘り方中央に水平に埋置する。合口式で、主軸方位はN-86°-Eに取る。規模は主軸線上で0.48mを測る。包衣壺（えなつぼ）であろうか。遺存状況は良好。

溝状遺構

SD-01〈第135図〉

A地区中央付近において検出した溝状遺構。東西方向に流路をとる。SB-01に切られている。規模は現状で検出長41.4m、幅0.6m、深さ0.01m～0.1mを測る。

SD-02〈第135図〉

B区東端付近において検出した溝状遺構。南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長15.8m、幅0.66m、深さ0.08～0.17mを測る。位置や規模からSD-01との接続も考えたが、軸方向が直角とはならないことから、別遺構と判断した。

SD-03〈第135図〉

B地区中央付近において検出した溝状遺構。東北東～西南西方向に流路をとり、底面レベルを東から西に向け下げている。SD-05に切られる。規模は現状で検出長36.6m、幅0.86m、深さ0.13m～0.28mを測る。本溝を境として南側には竪穴住居や掘立柱建物があるのに対し、北側には生活痕が希薄であると同時に、全体的に直線気味な流路をとり、その幅は1m未満と狭く、深さも浅いところから集落の北端を示す区画溝であると判断した。

SD-05〈第135図〉

B地区中央付近において検出した溝状遺構。SB-03を切っている。規模は現状で検出長6.0m、幅0.56m、深さ0.01m～0.07mを測る。

SD-06〈第135図〉

B地区西側において検出した溝状遺構。北東～南東方向に流路をとる。規模は現状で検出長20.6m、幅1.0m、深さ0.32m～0.53mを測る。北側部分において二股に分かれるが、南側の溝が本流になると思われる。自然流路か。

SD-08～21

C地区において検出した溝状遺構と発掘担当者はしているが、出土遺物や検出状況から新溝（攪乱）であると考えられ、本稿においては詳述は行わない。

SD-22〈第136図〉

C地区北東付近において検出した溝状遺構。SD-23に並行しながら南端付近において接続し、のみ込まれている。規模は現状で検出長35.8m、幅0.5m～2.5m、深さ0.05m～0.3mを測る。SD-23と同時に存在の溝と思われるが、その機能面については不明。

SD-23〈第136図〉

C地区東付近において検出した溝状遺構。SD-22に並行しながら大きく蛇行する。規模は現状で検出長59.2mを測り、幅・深さについては不明。本溝は発掘担当者が宮ノ后遺跡とヒヤケ遺跡を包括する環濠の一部として報告しているものである。

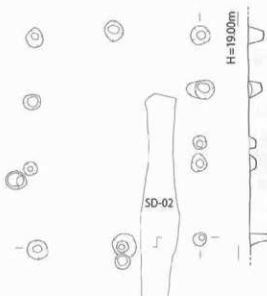
ヒヤケ遺跡

遺跡の概要

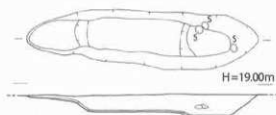
当該遺跡は調査面積が約 1,700 m²あり、調査の便宜上、及び、圃場整備事業地における施工状況から 2 地点に分割されている。弥生時代が中心となりながらも奈良時代～平安時代までの遺構が検出されている。検出された遺構の大半は溝状遺構（26 条）、及び、小ピット群であり、その他の遺構は非常に少なく掘立柱建物 1 棟と土壇数基を確認しただけであった。

1 地点の南側、排水路予定地内において大規模な溝状遺構の一部が検出され、この遺構は方向性や規模から宮ノ后遺跡から連続性を持った溝である可能性が高くなった。発掘報告者はこれを微高地上を巡る環濠であると結論づけられているが、この件については後述したい。

以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述するが、一部原図（現地測量図）に方位・標高・遺構番号などが記載されていないものがあるため全てを網羅する事が出来なかった。現状で出来得る限りの報告を行う事とする。



第 149 図 SB-01 実測図 [1/80]



第 150 図 SK-01 実測図 [1/80]

1) 遺構と出土遺物

掘立柱建物

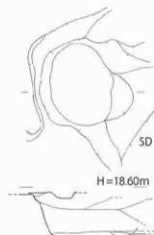
SB-01 〈第 149 図〉

1 地点の南端において検出した 10 本柱の掘立柱建物で、3 間 × 2 間の側柱建物である。規模は 4.46m × 3.5m、床面積 15.61 m²を測る。柱穴掘方は基本的に円形を成している。底面には一部柱圧痕状の痕跡が残るが、全体的に小振の柱穴を成している。重量物の搬入には不向きと思われる。

土壇

SK-01 〈第 150 図〉

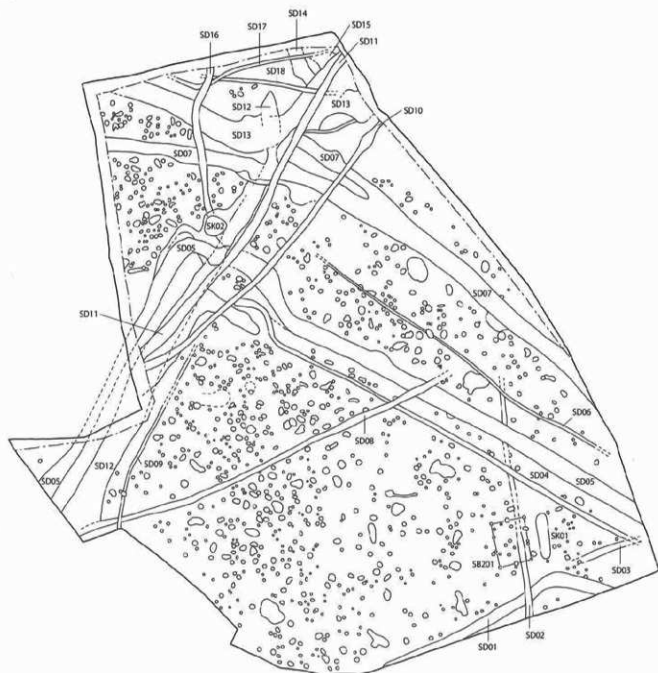
1 地点南端において検出した平面プランが細長楕円形を呈する土壇である。規模は 4.95m × 1.23m、深さ 0.36m ~ 0.5m を測る。



第 151 図 SK-02 実測図 [1/80]



第152図 ヒヤケ遺跡 1・2地点 位置図 [1/400]



第153図 ヒヤケ遺跡 1地点 遺構配置図 [1/400]

SK-02 〈第151図〉

1 地点北側において検出した平面プランが不整円形を呈する土壌である。規模は1.9m×2.0m、深さ0.8mを測る。

溝状遺構

SD-01 〈第153図〉

1 地点において検出した溝状遺構で、南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長26.4m、幅1.0m～1.4m、深さ0.06m～0.3mを測る。



第154図 ヒヤケ遺跡 2地点 遺構配置図 (1/400)

SD-02 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、東西方向に流路をとる。規模は現状で検出長24.2m、幅0.4m～0.7m、深さ0.07mを測る。直線的な流路をとるところから、人為的流路と判断した。

SD-03 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、南北方向に流路をとる。規模は現状で検出長5.0m、幅0.62m、深さ0.33mを測る。

SD-04 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、南西～北東方向を指向しながらSD-09と連動し調査区北東において台形状の突出部を介し、直角的に北西方向に流路を変える。流路の在り方からSD-05との同時並行性が強く考えられる。規模は現状で検出長49.0m、幅0.5m、深さ0.1m～0.29mを測る。底面レベルは南東～北西に向け下がる。直線的な方向性に加えコーナーに突出部を有するなど、人為的遺構である事に疑いはない。SD-05と連動した区画溝兼防御用環濠の可能性が考えられる。

SD-05 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、SD-04同様、南西～北東方向を指向しながら調査区北東において台形状の突出部を介し、直角的に北西方向に流路を変える。流路の在り方からSD-04との同時並行性が強く考えられる。規模は現状で検出長86.4m、幅1.4m～2.4m、深さ0.52m～0.84mを測る。後世にカットされた地表面レベルとの差を考慮すれば、幅や深さについても十分な防御機能を有していたものと考えられ、SD-04同様、コーナーに突出部を有するなど人為的遺構である事を加味した上で、SD-04と連動した区画溝兼防御用環濠の可能性が考えられる。この場合、本溝は内部主体に対し外環濠と言うことになるが、何に對しての環濠なのか、という点については現段階でも不明である。

SD-06 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、南東～北西方向に流路をとる。SD-02を切る。規模は現状で検出長34.6m、幅0.24m、深さ0.01m～0.11mを測る。

SD-07 <第153図>

1地点において検出した溝状遺構で、南東～北西方向に流路をとり、底面レベルを下げている。SD-10・11・16に切られる。検出部中央付近において南北2つに分岐し、南路はやや内湾しながら調査区外に向かうが、北路はSD-13に吸収されるような形で痕跡を失う。規模は現状で検出長61.2m、幅

1.5m～4.8m（中州部分）、深さ0.61m～0.96mを測る。全体的に内湾気味な流路をとるところから、台地周辺を走る自然流路と判断した。

SD-08〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、北東～南西方向に流路をとり、東から西に向かい底面レベルを下げている。規模は現状で検出長40.9m、幅0.6m、深さ0.22m～0.49mを測る。

SD-09〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、南西～北東方向を指向しながらSD-04と連動しているものと考えられる。規模は現状で検出長20.3m、幅0.3m、深さ0.08mを測る。

SD-10〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、北東～南西方向に流路をとる。SD-04・05・07・12を切る。規模は現状で検出長37.0m、幅0.53m～1.0m、深さ0.23m～0.42mを測る。自然流路か。

SD-11〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、北東～南西方向に流路をとる。調査区内で最も新しい時期の遺構となる可能性が高い。規模は現状で検出長37.7m、幅0.55m～1.5m、深さ0.3mを測る。

SD-12〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、北北東～南南西方向に流路をとる。調査区内で最も古い時期のもの1つと思われ、大半の遺構に切られている。規模は現状で検出長50.0m、幅2.0m～4.0m、深さ0.3m～1.28mを測る。底面の一部に小礫の集石が複数見られることから自然流路と考えられる。

SD-13〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、流路方向は不明。SD-12同様、調査区内で最も古い時期の遺構となる可能性が高い。中央付近で直角に近い状態で方向を変える。規模は現状で検出長27.8m、幅2.3m～8.0m、深さ0.6m～0.8mを測る。遺構のアウトラインが不明瞭な部分が多くあることから、一部氾濫源になっていたものと考えられる。

SD-14〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構。検出規模が僅かであるため、詳細については割愛する。

SD-15〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構。SD-14同様検出規模が僅かであるため、詳細については割愛する。

SD-16〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、南北方向に流路をとる。SD-07・13・17を切る。規模は現状で検出長14.8m、幅0.65m、深さ0.12mを測る。

SD-17〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、東西方向に流路をとる。SD-16に切られる。規模は現状で検出長15.8m、幅0.4m、深さ0.14m～0.28mを測る。

SD-18〈第153図〉

1地点において検出した溝状遺構で、北東～南西方向に流路をとる。SD-11・16・17に切れ、SD-13を切る。規模は現状で検出長12.0m、幅0.25m、深さ0.04m～0.21mを測る。

小 結

ここまで宮ノ后遺跡、ヒヤケ遺跡検出の遺構について概観してきたが、ここで当該両遺跡の特徴について記述したい。

宮ノ后遺跡において検出(確認)した遺構は、最終的に竪穴住居2軒、掘立柱建物4棟、土壇10基、甕柏墓1基、溝状遺構8条(SD-01~06、22、23)であった。調査面積に比し、極端な程遺構密集度が低い事が分かる。また、遺構の大半は7世紀後半~8世紀初頭に位置づけられ、特定の一時期に突如出現し消えてゆく遺構群として、極めて希有な存在である。

ヒヤケ遺跡において検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土壇2基、溝状遺構18条であった。溝状遺構が非常に多い遺跡であるが、SD-04・05のように、直線的に延びる溝の交点が大きく外方に飛び出し、突出部状の膨らみを形成している特殊な溝も存在し、明らかに人為的な作為があった事が容易に推測出来る遺構もある。用途については不明であるが、規模や形状から判断するとSD-05が先行し、SD-04が後出するものと思われる。SD-05からは8世紀後半頃の所産と思われる土師器の皿が出土しており、SD-04は9世紀以降と考えられる。

宮ノ后遺跡2地点の東端部で検出していたSD-23の延長部分について、宮ノ后遺跡とヒヤケ遺跡の調査の際周辺にトレンチを設定し、その痕跡を追求した当時の調査者が出した結果は、宮ノ后遺跡を丸ごと包含し、東西長480m、南北長190mの巨大なブーメラン形の環濠であると結論づけられた。しかし、前述したように推定された濠内に存在する遺構は極めて少なく、後世に削平が行われたとしても、巨大な環濠を設けてまで守るべき施設が見いだせない事から、別の状況を考慮せざるを得ないと判断し、以下の要件を挙げ検討してみた。

- 1 宮ノ后遺跡に在する遺構が8世紀後半に集中している。
- 2 濠の範囲とされる部分の現地形を観察すると、細長い水田が带状に連なっている。
- 3 带状の連なりは濠の推定範囲を超え、東西方向へ継続している。
- 4 带状の連なりは北東方向から南西方向に延び、標高を少しずつ減じている。

これらの要件を加味した上で、改めて検出遺構の在り方を検討した結果、宮ノ后遺跡とその西部部を中の島とした幅30m~40mの自然河川と判断した。宮ノ后遺跡2地点の東端部で検出していたSD-23の土層断面では砂利層や細砂層が一部互層を成し、明らかに水流作用による堆積である事は、この判断を補完しているものと考えられる。

この事から、経過は不明であると言わざるを得ないが、宮ノ后遺跡は避けがたい事情からSD-23が取り囲む中の島状の土地に1~2家族程度の移住があり、そこで一時期だけ生活を営んだものと思われる。SD-23の北西部に隣接するヒヤケ遺跡において極端な程溝状遺構が多いのは、この地域の配水事情がことのほか悪かった事を示しているものと考えられる。

中里遺跡 1・2 地点

遺跡の概要

当該遺跡は調査面積が約 1,550 m²あり、調査の便宜上、及び、圃場整備事業地における施工状況から 2 地点に分割されている。弥生時代後期の遺構が中心だが平安時代の遺構も僅かに検出されている。検出された遺構の主体は前方後方形周溝（発掘当時の名称）、その他小ピット群であり、その他の遺構は非常に少なく土壌墓を含めた数基を確認しただけであった。

1 地点では大規模な溝状遺構が検出され、この遺構は形態や規模から環濠状となる溝である可能性が高くなった。発掘報告者はこれを前方後方形周溝であると結論づけられたが、この件については後述したい。

以下、各遺構・出土遺物の詳細について記述する。

1) 遺構と出土遺物

溝状遺構

SD-01 〈第156図〉

1 地点の調査区全域において検出した溝状の遺構で、状況的には全周し環濠となるものと思われる。主軸方位を N-60°-W に取る。規模は以下の通りである。

東西方向 濠外端部間 52.5m 東西方向 濠内底面部間 46.5m
南北方向 濠外端部（突出部分）間 35m 南北方向 濠内底面部（突出部分）間 35m

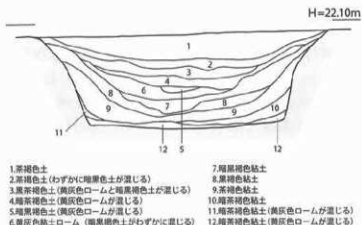
突出部（内側）規模

（北側） 東西 6.3m 南北 2.4m （南側） 東西 13.8m 南北 3.0m

次に、各部土層堆積状況の説明を行う。

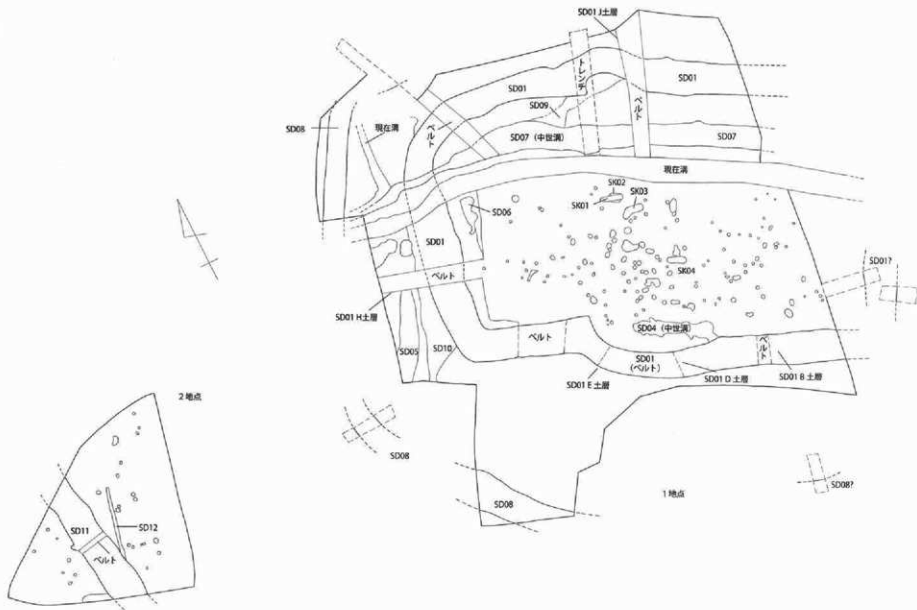
SD-01 B 土層 〈第155図〉

南辺の南東側に位置する土層壁面で、上面幅 3.04m、底面幅 2.08m、深さ 0.88m を測る。1~6' 層は後世における堆積土で、3 層~6' 層からは平安時代の遺物が出土しているという事であった。7 層~11 層からは弥生後期後半頃の土器を包含しており、SD-01 の存続時期を示しているものと思われる。断面形は精美な逆台形を呈しており、底面はほぼフラットに整えられている。外側の傾斜角は水平面に対し 61°、内側の傾斜角は 47° のやや緩やかな傾斜の後、78° の急傾斜を



第155図 SD-01 B 土層 断面実測図

[1/40]



もって濠底面に至る。

基盤土は底面より40cm上に境目があり、上部基盤土は茶褐色ローム、下部基盤土は黄灰色ロームとなっている。

SD-01 D土層〈第157図〉

南辺の中央、南側突出部のやや東側に位置する土層壁面で、上面幅2.82m、底面幅2.38m、深さ1.0mを測る。1～4層は後世における堆積土で、5層はSD-01機能中の2次の堆積か。6層～16層はSD-01掘削後あまり時間を経っていない堆積層と思われる。断面形は逆台形より凹字に近く、底面はほぼフラットに整えられている。外側の傾斜角は水平面にほぼ垂直を成し、内側の傾斜角も底面近くは78°、上部は61°と急傾斜となっている。

6・7層の流入土は濠外側に土壘状の盛土が存在していた可能性を示し、8～10層は内側に同様の盛土があった事を示しているか。また、9層中には円礫の転落も見られ、土壘状遺構に貼石状の配石が存在した可能性もある。

SD-01 E土層〈第158図〉

南辺の中央、南側突出部の西端付近に位置する土層壁面で、上面幅2.5m、底面幅1.6m、深さ0.9mを測る。1～3層は後世における堆積土で、4層～10層はSD-01存続期中の堆積か。掘り直し等の改修を積極的に示す痕跡が見られず、比較的自然堆積が連続している。底面はほぼフラットに整えられている。濠外側の傾斜角は水平面に対し68°、内側の傾斜は59°となっている。

ゆっくり時間をかけて埋まったように見えるが、7層は一時に内外両サイドより大量の流入土があったようで、濠縁辺の内外に土盛り状の施設の存在を示唆している。

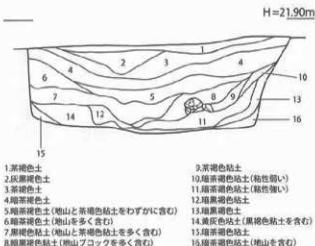
SD-01 H土層〈第159図〉

西辺のやや南側に位置する土層壁面で、上面幅3.6m、底面幅3.2m、深さ0.6mを測る。1～4層は後世における堆積土で、5層～9層はSD-01存続期中の堆積か。掘り直し等の改修を積極的に示す痕跡が見られず、比較的自然堆積が連続している。しかしながら、6層の内側からの流入や、7層の外側からのみの土砂大量流入に関しては注意を要する。底面はほぼフラットに整えられている。濠外側の傾斜角は水平面に対しほぼ直角であり、内側の傾斜は54°となっている。

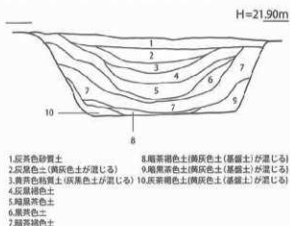
比較的小期間のうちに埋まったように見え、隣接するE土層とは対称的な経過を示しており、何故このような現象が発生しているのか慎重に検討する必要がある。

SD-01 J土層〈第160図〉

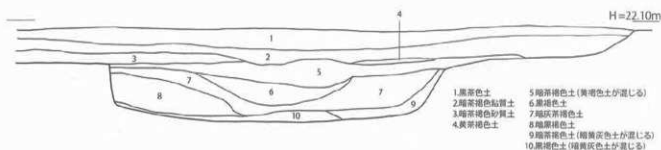
北辺のほぼ中央、北側突出部の中央付近に位置する土層壁面で、上面幅2.9m、底面幅2.5m、深さ0.5mを測る。1・2層は現代水田の耕作土と床土で、3・4層はSD-09の堆積土。5・6層は中世頃の堆積土。7～10層はSD-01に伴う堆積である。中世以降の改変が大きく、正確さを欠くが、掘り直し等の改



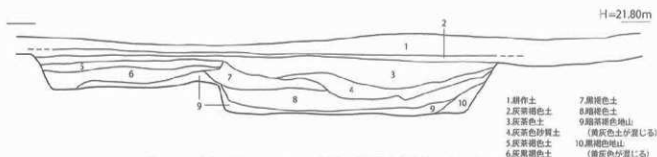
第157図 SD-01 D土層 断面実測図
[1/40]



第158図 SD-01 E土層
断面実測図 [1/40]



第159図 SD-01 H土層 断面実測図 [1/40]



第160図 SD-01 J土層 断面実測図 [1/40]

修を積極的に示す痕跡が見られず、比較的自然堆積が連続している。底面はほぼフラットに整えられている。濠外側の傾斜角は水平面に対し77°、内側の傾斜は57°となっている。

E・H土層と同じく一時期に内外両サイドより大量の流入土があったようで、8層がこれを示している。濠縁辺内外に土盛り状施設の存在、または、短期間での埋没があった事を示唆している。

SD-02

調査区北東側に設定されたトレンチ（位置特定不能）において検出した溝状遺構で、東西方向に軸をとる。SD-01 J土層 3・4層に該当するものと思われ、SD-09の延長部と思われる。

SD-03

調査区北東側に設定されたトレンチ（位置特定不能）において検出した溝状遺構で、東西方向に軸をとるものと思われる。SD-01 J土層 5・6層に該当するものと思われる。

SD-04 <第156図>

調査区南側中央付近において検出した溝状遺構で、東西方向に軸をとる。規模は現状で検出長8.86m、幅1.35m～1.8m、深さ0.05m～0.35mを測る。出土遺物から中世にかかる溝と考えられる。

SD-05 <第156図>

調査区西端中央付近において検出した溝状遺構で、南北方向に軸をとる。規模は現状で検出長10.0m、幅1.5m～1.8m、深さ0.18mを測る。

SD-06 <第156図>

調査区西端付近において検出した溝状遺構で、南北方向に軸をとる。規模は現状で検出長3.9m、幅0.02m～1.35m、深さ0.16m～0.41mを測る。出土遺物から中世にかかる溝と考えられる。

SD-07 <第156図>

調査区北側において検出した溝状遺構で、東西方向に軸をとる。規模は現状で検出長40.8m、幅1.4m、深さ0.34m～0.6mを測る。出土遺物から中世にかかる溝と考えられる。

SD-08

〈第156・161図〉

調査区南端に位置する溝状遺構で、溝断面の規模は上面幅3.4m、底面幅2.2m、深さ1.16mを測る。底面はほぼフラットに整えられており、溝外側の傾斜角は水平面に対し50°、内側の傾斜は65°となっている。SD-01の南辺～



第161図 SD-08 断面実測図 (1/40)

西辺付近を全体を取り囲むように周っており、断面形状・規模はSD-01 B土層と近似しており、同時期に存在していた可能性が高い。併存するとすればSD-01の外側の濠となり、多重濠の可能性が考えられる。しかしながら、土層堆積状況が記録されておらず厳密な検証が出来ない事が悔やまれる。

SD-09 〈第156図〉

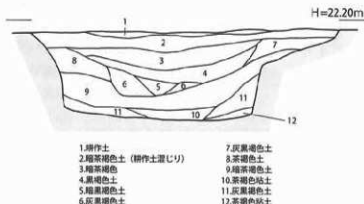
調査区北側において検出した溝状遺構で、SD-01北側突出部内側から同溝をトレースするように東に延びているものと思われる。規模は現状で検出長10.8m、幅0.65m～2.0m、深さ0.1m～0.26mを測る。遺構西端付近でSD-07に接している。平安時代前期か。

SD-10 〈第156図〉

調査区西端において検出した溝状遺構だが、詳細は不明。規模は現状で検出長9.0m、幅0.72m～4.0m、深さ0.22mを測る。

SD-11 〈第156・162図〉

調査区の2地点において検出した溝状遺構で、SD-01南西端から直線41mの距離に位置している。溝断面の規模は上面幅3.3m、底面幅1.97m、深さ0.85mを測る。底面はほぼフラットに整えられており、断面西側の傾斜角は水平面に対し19°の非常に緩やかな傾斜の後、77°の急傾斜をもって濠底面に至る。



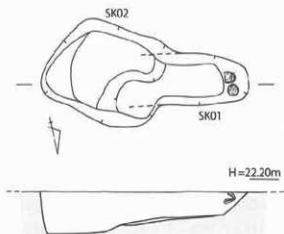
第162図 SD-11 土層断面実測図 (1/40)

断面東側の傾斜角は59°のやや強い傾斜の後、82°の急傾斜をもって濠底面に至る。

1・2層は現代水田の耕作土と床土で、時期は明確ではないが3～6層は掘り直し（平安期以降か）に係る堆積土。7～12層はSD-11に伴う堆積である。9層はSD-11掘削後あまり時間を経っていない堆積層と思われる。SD-01 E・H土層と同じく一時期に内外両サイドより大量の流入土があったようだ。また、断面形状は東側断面がSD-01 D土層内側と酷似し、規模はSD-08に近似する事からSD-01・08の両溝状遺構と同時期に存在していた可能性が考えられる。併存するとすれば三重目の溝状遺構となり、SD-01を含む三重環濠の存在が示唆される事となる。

SD-12 〈第156図〉

調査区2地点において検出した溝状遺構だが、詳細は不明。規模は現状で検出長8.0m、幅0.35m、深さ0.3mを測る。



第163図 SK-01・02 実測図
[1 / 40]



第164図 SK-03 実測図
[1 / 40]



第165図 SK-04 実測図
[1 / 40]

土壌

SK-01 <第163図>

1地点の中央において検出した平面プランが隅丸長方形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-76°-Wに取る。規模は長軸長2.2m、短軸長0.55m、深さ0.29mを測る。西端部に副葬品と思われる土師器坏身が3点有る。8世紀後半頃に比定される。直葬か。

SK-02 <第163図>

2地点の中央において検出した平面プランが正方形を呈する土壌である。長軸方位をN-59°-Wに取る。規模は長軸長1.2m、短軸長1.0m、深さ0.44mを測る。SK-01との前後関係は不明である。

SK-03 <第164図>

1地点の中央において検出した平面プランが不整長方形を呈する土壌墓である。長軸方位をN-81°-Wに取る。規模は長軸長1.75m、短軸長0.47m~0.52m、深さ0.1m~0.27mを測る。断面形状やSK-01との位置関係も含め土壌墓と判断した。

SK-04 <第165図>

1地点中央の南東側において検出した平面プランが楕円形を呈する土壌である。長軸方位をN-67°-Wに取る。規模は長軸長1.9m、短軸長0.7m、深さ0.1m~0.17mを測る。二段掘りになっており、状況的には弥生時代中期~後期の土壌墓に類似しているが、単独で存在する事に若干無理が生じるため、本報告では土壌としておきたい。

小 結

ここまで中里遺跡1・2地点検出の遺構について概観してきたが、ここで当該遺跡の特徴と歴史的な性格について記述したい。

中里遺跡1・2地点において検出(確認)した遺構は、最終的に土壌(墓)4基、溝状遺構12条であった。中心となる時期は弥生時代後期中頃～末頃、及び、8世紀中頃～後半で、後者は土城墓を指している。

中里遺跡における重要な検討課題は、調査時に発掘担当者が提唱した「前方後方形周溝」が妥当な名称であるのか、また、周溝が単体で存在している一重周溝であるのか、そして何よりも当該遺構築造の目的と共同体内での位置づけは如何なるものであったのか、考えてみたい。

SD-01の在り方について

規模については、前述した通り東西方向は濠外端部間52.5m、南北方向は濠外端部(突出部分)間35mを測り、単体の遺構としてみれば極めて大きなものとなる。八女市酒井田に所在し同様の突出部をもつ深田遺跡(古墳時代前期)と比較すると約6割程度の規模となる。

出土遺物は僅かしかなく、甕形や壺形、鉢形の土器が溝の下層部分から確認されている。概して室岡所在の西山ノ上遺跡におけるB期に該当し、おおよそ弥生時代後期中頃～後半の時期比定が可能と思われる。しかしながら、最下層と位置づけられている土器の一部には丸底を示すものもあり、存続時期としては後期中頃～末頃にかけての時期が推定される。

「前方後方形周溝」の名の根源となっていた南北辺の中央付近に造られた一対の突出部であるが、南北の規模に明確な差が見られ、佐賀県吉野ヶ里遺跡の内郭部分に見られるような均等に精美な方形も成していない。形状に関しては両突出部とも西側屈曲部(内側)については直角近くにつれるが、東側屈曲部については共に大きく屈曲する事なくならかに元の溝形状に戻るなど、不安定な要素が多い。この事はSD-01掘削時における突出部分造形の本来の意味合いを熟知していなかった事が原因の一つと思われる。全体を概観した中で、最も形状が安定している西辺(内側)を仮の縦基準として突出部の終点と見られる東側屈曲部までの距離を計測すると両突出部ともに約23mを測ることから、一定の制約のもとに掘削が行われたものと思われる。しかし、掘削を行った共同体自体が本来あるべき姿を理解していないために、この不安定な状況を生み出しているものとも考えられる。

ただ、縦方向の基準とした西辺内側は真北に近い方向を向いており、突出部を付設した濠の在り方を指南した企画を示す物の存在を推定する事は可能と思われ、無計画な造作ではない事だけは確かであると考えられる。

SD-08、及び、SD-11の在り方について

SD-08については、第156図にあるようにSD-01との間隔は南側程広く、北側に向かう程狭くなっている事がわかる。一見意味合いを異にする状況を呈しているが、SD-01の南側突出部が北側に比べ規模が大きく整っている事やSD-01全体を覆うような方向性を指向している事から、これと連動したものと解す事も可能で、同時併存を考慮すべきと思われる。

SD-11については部分的な調査であり、SD-01の南西角からの距離が41mを測り、かなりの遠距離にある事や、出土遺物に関しても8世紀後半代と思われる土器器が出土するなど、同時併存とするにはやや根拠が薄い。しかしながら土層断面の観察では上層部分に掘り直しの層が見られ、これがSD-01B土層に近似している事から、土器器出土層は上層部分と考えられ、下層部分の堆積土は弥生期の

所産と考えられる。これと同じような現象が1地点のSD-01 M土層にも見られ、堆積土の床面に近い下部土層中から須恵器が出土している。また、断面形状についても深田遺跡のSX-05断面と類似する点も見られ、掘削底面の規模や形状がSD-01やSD-08と比べ相違が少ないことから、総合的に考慮しSD-01・08と同時併存していると判断した。

この判断に基づいて、SD-01・08・11を包括して多重濠遺構と呼びたい。

多重濠遺構について

本遺構は中心部にあるSD-01に突出部が付設されていることから、蒲原宏行氏が唱えられている環有明海文化導入に準拠して構築されたものと考えて良いと思われる。しかしながら、吉野ケ里遺跡等で見られる様相とは著しく異なり、遺構内に共同体が行った濠掘削以外の活動の痕跡、堅穴住居や掘立建物、祭祀遺構や生産関連遺構等が見出せていない。

多重濠遺構の掘削には多大の労力が動員され、相当な日常活動が制限されたものと思われるが、大規模な環濠集落並の規模を有しながら内部に生活痕跡を持たない事には相当の理由がなければ実現しないことである。考えられる理由を列挙すれば、

- 1 過去における削平が大規模で、生活痕跡の全てが失われた。
- 2 集落移転を前提として濠の掘削に着手したが、完成前に放棄した。
- 3 世情の不安定化を受け、生活域を伴わない、新たな共同体結束の証を造営した。
- 4 共同体の旧体制の瓦解に伴い、新しい思想を含む外来文化を取り入れようとしたが、旧来の枠組みから完全に脱する事が出来なかった。

非常に雄略で、根拠に乏しい仮説であるが、個別に検討したい。

1については、大規模な削平が存在するとした場合、室岡地区に所在する西山ノ上遺跡の住居群を取り囲む環濠と同規模である本遺構の各SDの状況と整合性がとれなくなる事から、可能性としてはないものとする。

2については、集落形成と環濠掘削はセット関係にある事から、あり得ない事と思われる。

3・4については、本遺構は誰からも視覚化が可能で、共同体全体の結束がなければ実現不可能であり、掘削当初から生活域の設定が行われていない為に生活痕跡が存在せず、新たな文化の導入に際し遺構形状が有している本来の目的が理解出来ず、形だけの導入になった事や旧来の固定観念に縛られた結果、相対的に多重環濠集落に似た形状とする事に落ち着いたものと考えられる。

以上の観点から、3・4の仮説を帰結点とし、本遺跡における多重濠遺構の性格は「旧体制の瓦解、又は、瓦解直前に際し、新たな文化導入を具現化（可視化）し、来るべき世情に対応すべく共同体全体に係るモニュメントの構築」だったものと理解したい。

本遺構に性格が良く似た遺構として挙げられるのが深田遺跡SX-05であり、これは以前古墳時代前期の「豪族居館」と呼ばれていた遺構であるが、最近の研究では居住域や生産域、祭祀空間等をパッケージとして包括した中の施設の一部分との考え方が広がっている。

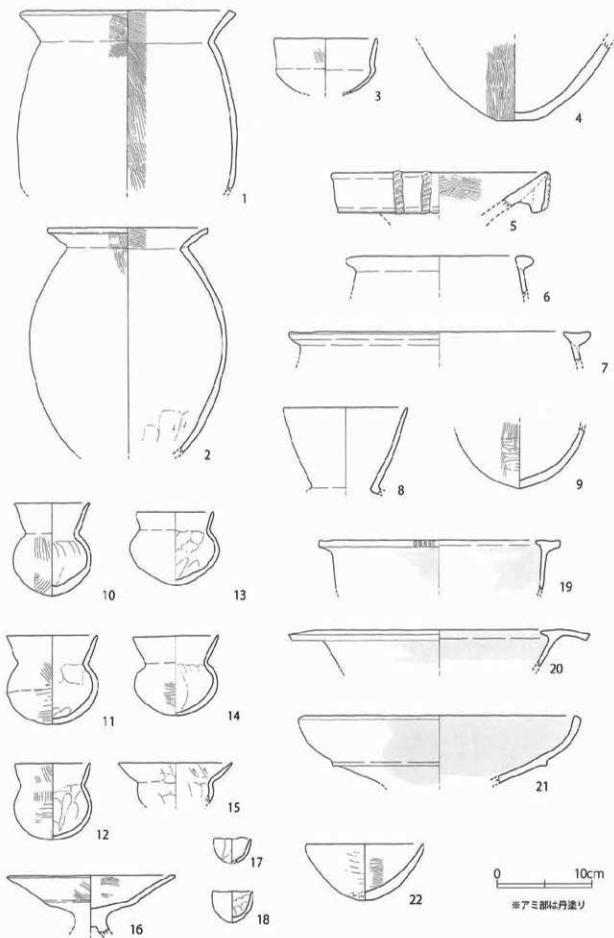
SX-05においても当該期の建物群は発見されず、発掘担当者は削平による所産とされていた。

大規模でありながら生活痕跡が見当たらない等において、本遺構（多重濠遺構）は深田遺跡SX-05と同様の機能を有する施設ではないかと考えられる。倭国大乱を経て、一度は安定期を迎えた国内であったが、次なる古墳時代を迎えるにあたり、地域間の再編が活発になり、旧来の対象とは異なる新たな拠所を必要とした結果、生み出されたものと考えたい。

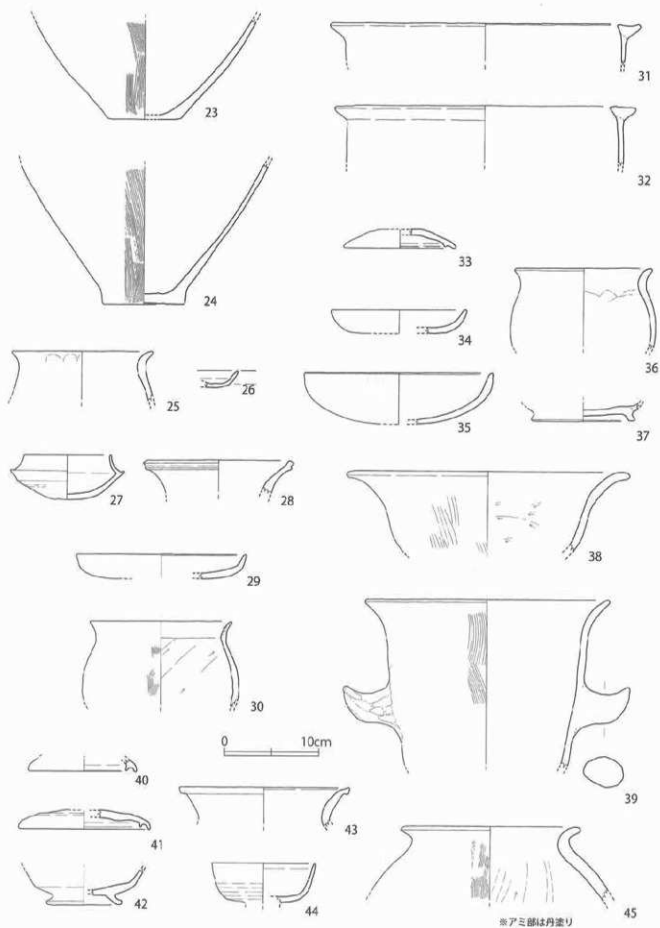
そういう意味において、深田遺跡SX-05と本遺跡における多重濠遺構は共同体が結束の象徴として

必要とされたものであり、時系列に並べると中里遺跡 多重濠遺構→深田遺跡 SX-05 との連続性を認めて良いものとする。

この系列が正しければ、筑紫君磐井に繋がる筑紫君一族の原初は既に弥生時代後期段階から始まっている事となり、八女古墳群成立の根源を考える上でも、非常に重要な意義を投げかけていると感じる。

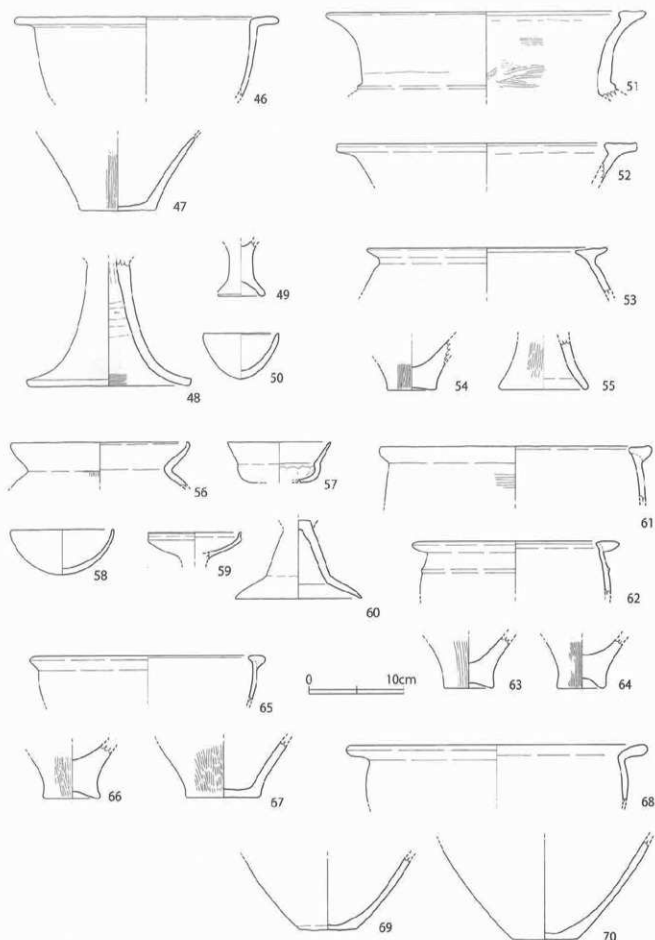


第166図 SB-01(1～4)、SB-03(5～7)、SB-04(8・9)、SB-06(10～18)、SB-07(19～22)
出土遺物実測図 [1/4]

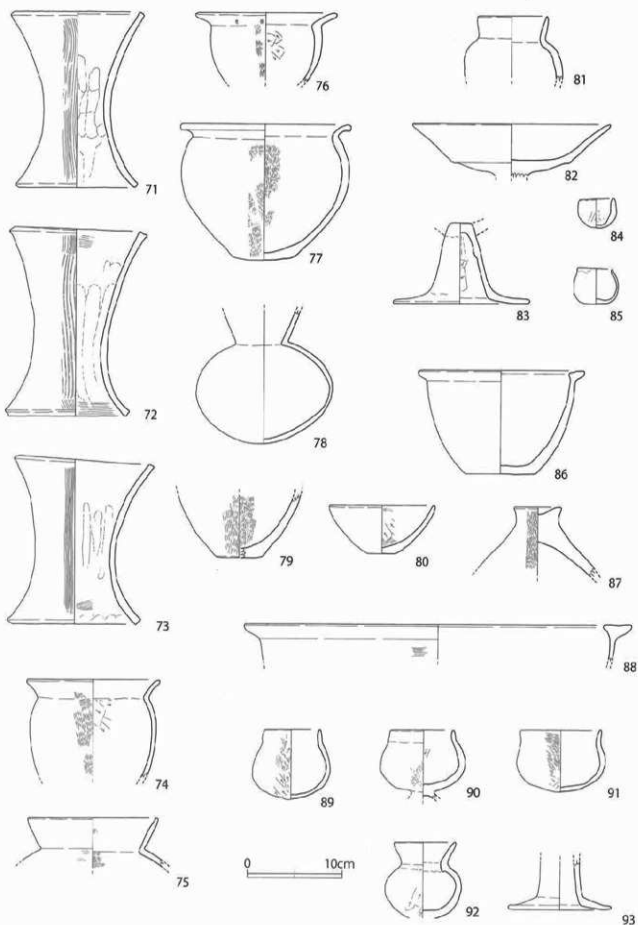


第167図

SB-07(23・24)、SB-11(25・26)、SB-13(27～30)、SB-14(31・32)、SB-15(33)、
SB-17(34～39)、SB-18(40～45) 出土遺物実測図 [1/4]



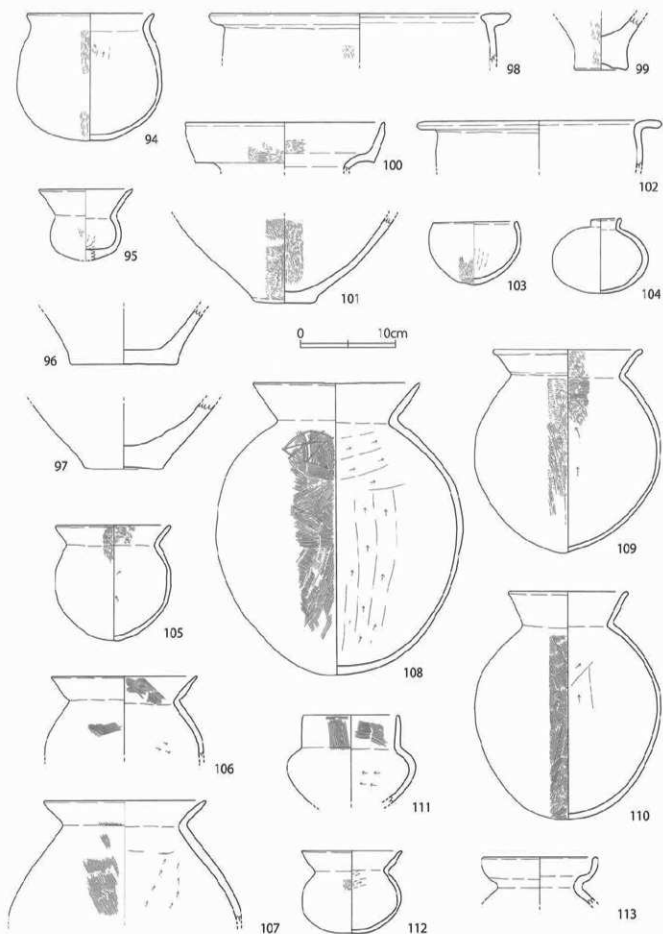
第168図 SB-23(46 ~ 50)、SB-25(51・52)、SB-26(53 ~ 55)、SB-27(56 ~ 60)、SB-33(61 ~ 64)、SB-36(65 ~ 67)、SB-39(68 ~ 70) 出土遺物実測図 [1/4]



第169圖

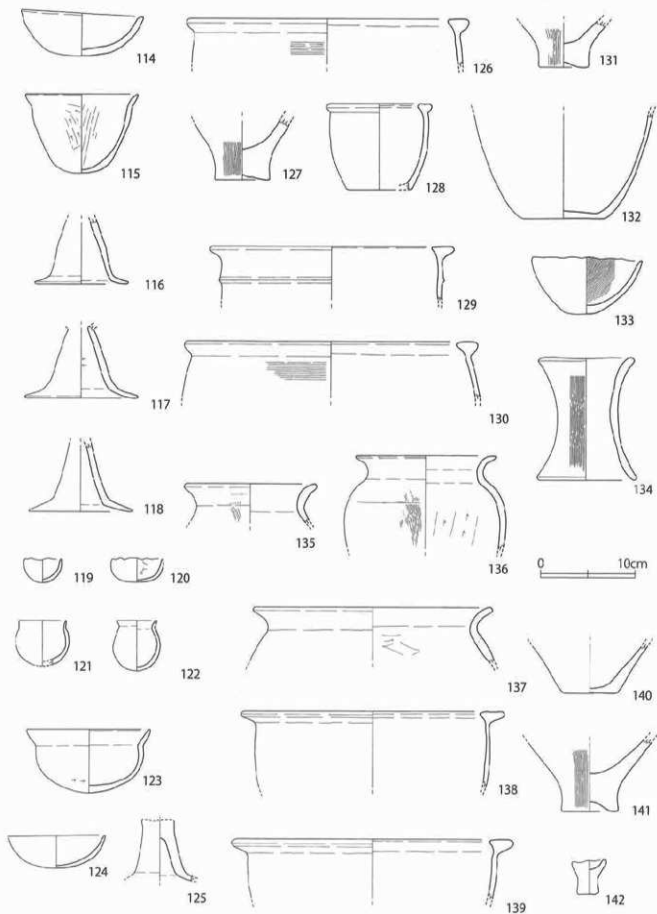
SB-39(71 ~ 73)、SB-75(74 ~ 80)、SB-78(81 ~ 85)、SB-80(86 ~ 88)

SB-81(89 ~ 93) 出土遺物実測図 [1/4]



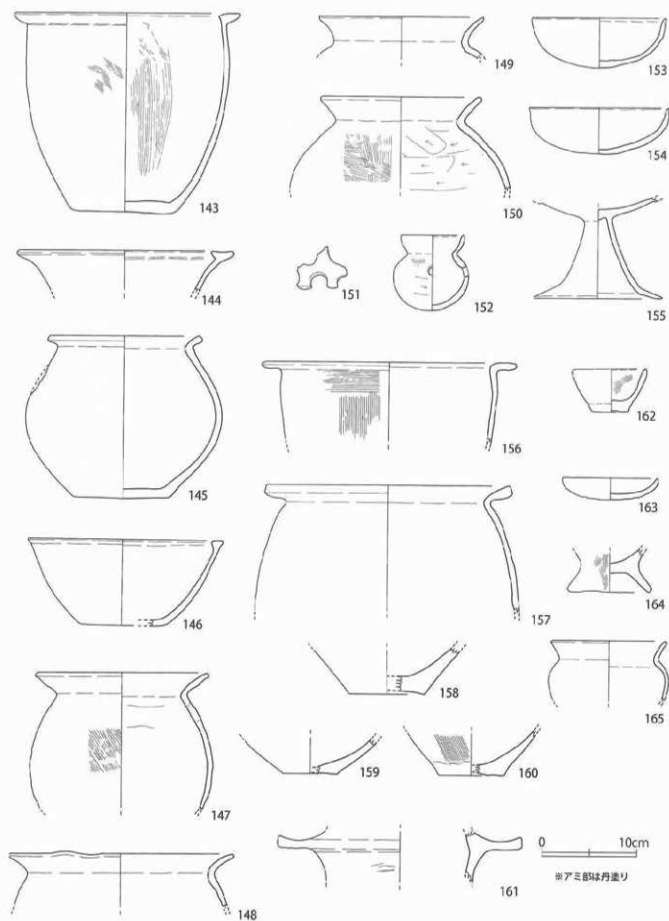
第170図

SB-82(94)、SB-83(95)、SB-85(96・97)、SB-86(98・99)、SB-94(100～104)、SB-96(105～113) 出土遺物実測図 (1/4)



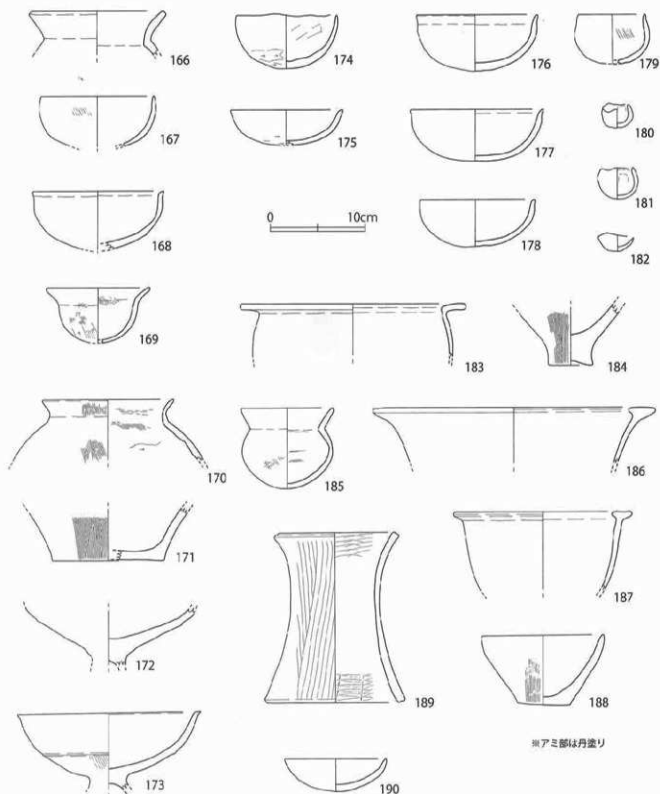
第171圖

SB-96(114 ~ 122)、SB-97(123 ~ 125)、SB-98(126 ~ 128)、SB-99(129 ~ 134)、
SB-100(135・136)、SB-102(137 ~ 142) 出土遺物実測図 [1/4]



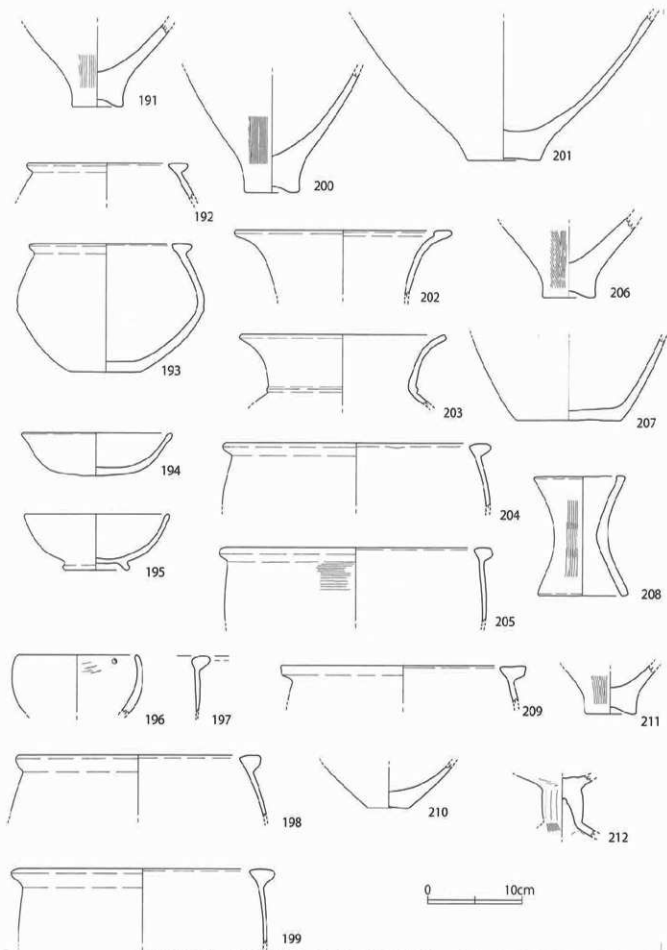
第172図

SB-102(143 ~ 146)、SB-103(147 ~ 155)、SB-104(156 ~ 161)、SB-106(162)、
SB-112(163 ~ 165) 出土遺物実測図 [1/4]



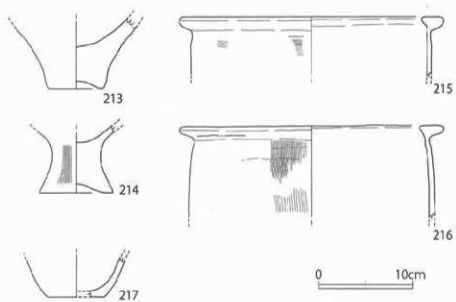
第173図

SB-117(166 ~ 169)、SB-119(170 ~ 175)、SB-122(176 ~ 182)、SB-126(183 ~ 189)、SB-132(190) 出土遺物実測図 [1/4]

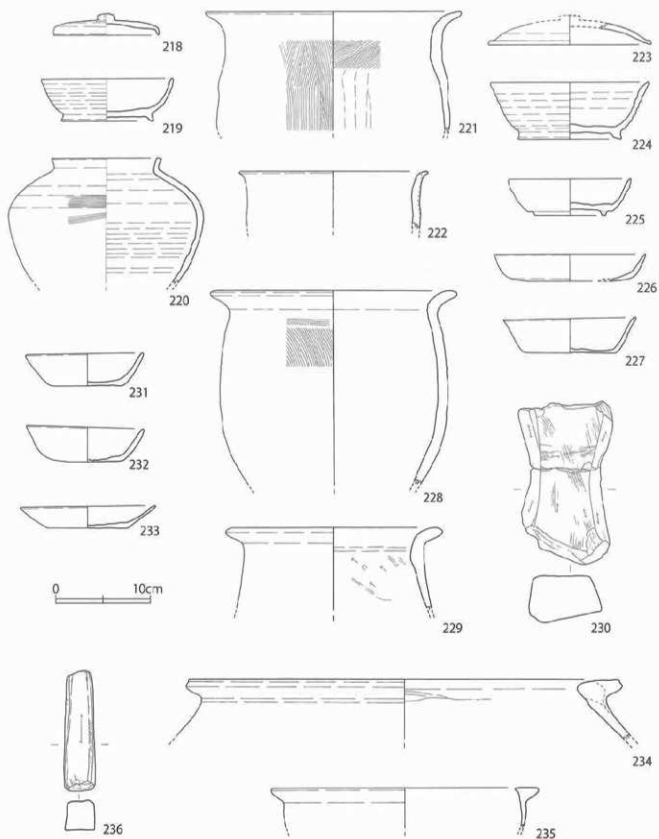


第174图

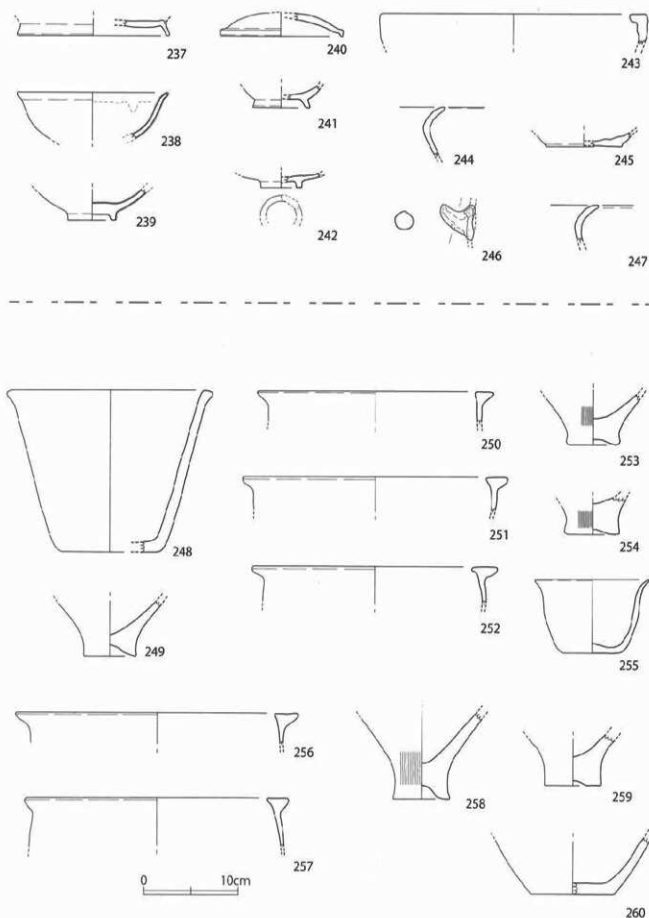
SK-25(191), SK-27(192・193), SK-30(194・195), SK-59(196 ~ 198), SK-62(199 ~ 203), SK-68(204 ~ 208), SK-72(209・210), SK-86(211), SK-100(212) 出土遺物実測図 [1/4]



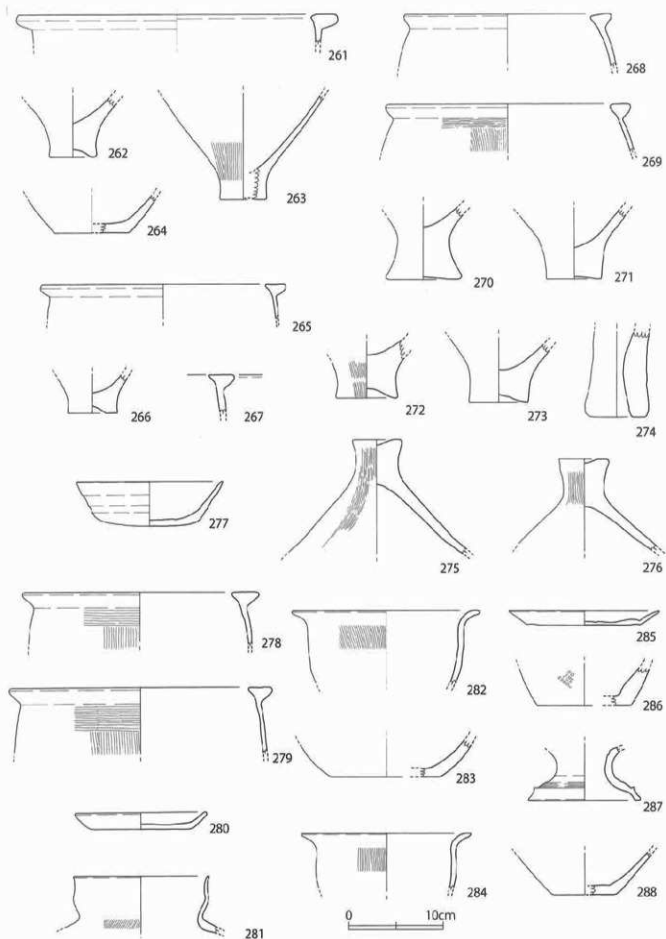
第175図 SK-102(213～216)、SK-123(217) 出土遺物実測図 [1/4]



第176図 宮ノ后遺跡 SB-01(218～222)、SB-03(223～230)、SK-01(231～233)、SK-07(234～236) 出土遺物実測図 [1/4]

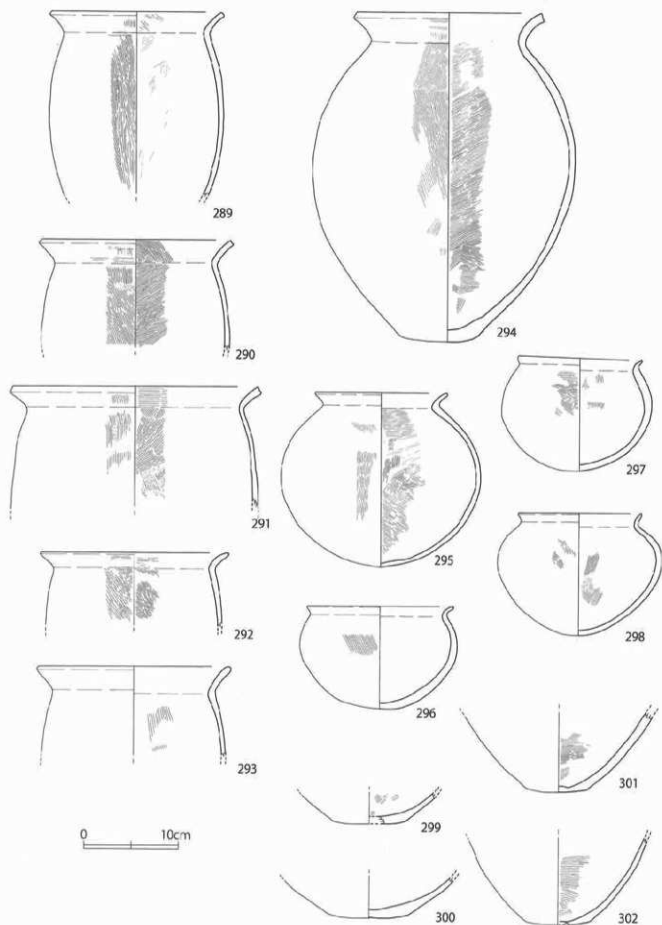


第177図 宮ノ后遺跡 SK-06(237)、SK-08(238・239)、SD-04(240・241)、SD-09(242)、SD-10(243)、SD-11(244)、SD-12(245～247)、ヒヤケ遺跡 SK-01(248・249)、SK-02(250～255)、SK-03(256～260) 出土遺物実測図 [1/4]

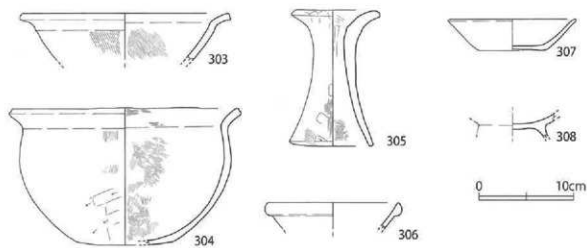


第178図

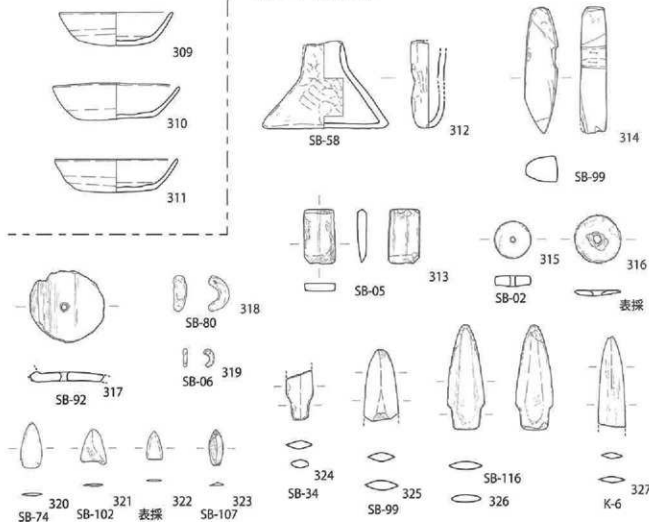
ヒヤケ遺跡 SK-04(261～264)、SK-05(265・266)、SD-01(267)、SD-02(268～277)、SD-03(279)、SD-05(280)、SB-07(281・282)、SD-12(283)、SD-13(284)、SD-20(285～287)、SD-27(288) 出土遺物実測図 [1/4]



第179圖 SD-01 出土遺物実測図 [1/4]



新庄・六反田遺跡



中里遺跡 SD-01(303 ~ 305)、SD-07(306)、SD-09(307)、SD-11(308)、SK-01(309 ~ 311) 出土遺物実測図 [1/4]
新庄・六反田遺跡 出土遺物実測図 [1/4]

押図	番号	実測 番号	出土 遺構	機 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成	備 考
166図	1	RP-5	SB-01	甕形	22.9			タテハケ	暗茶褐色、砂粒少ない、良好	
"	2	RP-3	"	甕形	16			内指ナデ	茶褐色、大小の砂粒含む、良好	
"	3	RP-1	"	小型広口甕	11			外ハケ、内ナデ	赤褐色、小砂粒含む、良好	
"	4	R-92	"	甕形?		4.2		外タテハケ、内ナデ	薄茶褐色、小砂粒多い、やや不良	
"	5	A	SB-03	甕形	22.5				淡茶褐色、砂粒を少量含む、やや不良	棒状浮文
"	6	RP-2	"	甕形	19.9			不明	明黄色、大小の砂粒あり、良好	
"	7	RP-4	"	甕形	32			ナデ	黒褐色、少量の砂粒、良好	
"	8	RP-2	SB-04	長頸壺	13.1			ヘラミガキ	赤褐色、精良、良好	
"	9	RP-06	"	底部破片				叩き後ハケ	赤褐色、大小の砂粒含む、良好	2次焼成あり
"	10	RP-8	SB-06	小型丸底甕	7.9		9.8	ハケ後ナデ	茶褐色、小砂粒多い、良好	
"	11	RP-7	"	小型丸底甕	9.6		9.3	ハケ後ナデ	茶褐色、大小の砂粒あり、良好	
"	12	RP-6	"	小型丸底甕	8		8	ハケ後ナデ	明褐色、砂粒少量あり、良好	
"	13	RP-10	"	小型丸底甕	8.2		7.7	ナデ	明褐色、大小の砂粒あり、良好	
"	14	RP-9	"	小型丸底甕	9.1		8.4	ハケ後ナデ	茶褐色、大小の砂粒多い、良好	
"	15	RP-11	"	小型広口甕	12.1			指オサエ、ナデ	茶褐色、精良、良好	
"	16	RP-14	"	高杯	17.8			ハケ後ナデ	黒褐色、砂を含む、良好	
"	17	RP-2	"	ミニチュア	4		2.7	指頭オサエ	茶褐色、砂粒少量あり、良好	鉢形
"	18	RP-3	"	ミニチュア	4.3		3.3	指頭オサエ	黒褐色、精良、良好	鉢形
"	19	RP-4	SB-07	甕形	25.6			ナデ	明褐色、大小の砂粒多い、良好	丹塗土器
"	20	RP-1	"	高杯	31.9			ナデ	黒茶褐色、砂粒含む、良好	丹塗土器
"	21	RP-2	"	高杯	30			内ミガキ	淡褐色、大小の砂粒少量あり、良好	丹塗土器
"	22	RP-11	"	鉢形?	12.5		5.9	横ハケ、ケズリ	茶褐色、大小の砂粒、良好	完形品
167図	23	RP-6	"	甕形		8		タテハケ後ナデ	明黄色、大小の砂粒、良好	
"	24	RP-5	"	甕形		8.8		タテハケ後ナデ	暗赤褐色、大小の砂粒、良好	
"	25	RP-2	SB-11	甕形	15			不明	暗褐色、砂粒少ない、良好	
"	26	R-94	"	皿				ナデ	淡灰色、精良、良好	土師器
"	27	RP-1	SB-13	坏身	9.4		4.7	回転ナデ	砂粒少ない、良好	須恵器、Ⅲ B
"	28	RP-3	"	甕形	16			回転ナデ	赤褐色、砂粒を少量含む、良好	須恵器
"	29	RP-4	"	皿	18		2.5		茶褐色、砂粒を僅かに含む、良好	土師器
"	30	RP-5	"	甕形	14.9			ハケ後ナデ	赤褐色、大小の砂粒含む、良好	
"	31	RP-3	SB-14	甕形	33				赤褐色、大小の砂粒含む、良好	
"	32	RP-2	"	甕形	32			ヨコナデ	淡茶赤褐色、細砂粒含む、良好	
"	33	RP-1	SB-15	坏蓋	12			回転ナデ	黒褐色、砂含む、良好	須恵器
"	34	R-48	SB-17	皿	14.4		2.5		淡茶褐色、細砂粒少量、やや不良	土師器
"	35	RP-5	"	坏身	20		5.4		茶褐色、大小の砂粒、良好	
"	36	RP-10	"	甕形	14.6				明褐色、大小の砂粒多い、良好	
"	37	RP-3	"	坏身			11		白黄色、精良、良好	高台破片
"	38	R-105	"	甕形	30			ハケ、ナデ	淡茶褐色、砂粒多い、良好	
"	39	RP-11	"	甕	26			ハケ	褐色、大小の砂粒多い、良好	
"	40	RP-1	SB-18	坏蓋	11.4			回転ナデ	灰色、砂粒僅かに含む、良好	須恵器
"	41	RP-2	"	坏蓋	14			回転ナデ	灰色、大小の砂粒含む、良好	須恵器
"	42	RP-11	"	坏身		7.9			赤褐色、精良、良好	須恵器
"	43	RP-10	"	甕形	18.1				灰色、大小の砂粒含む、良好	須恵器
"	44	RP-9	"	高杯	11			ヘラケズリ、回転ナデ	灰色、精良、良好	須恵器、小型
"	45	RP-15	"	甕形	19				赤褐色、大小の砂粒含む、良好	土師器
168図	46	RP-6	SB-23	甕形	28				暗褐色、細砂粒含む、良好	
"	47	RP-21	"	底部破片		8.1		ハケ	淡褐色、細砂粒含む、良好	
"	48	RP-4	"	高杯		17.4		ヘラナデ	暗褐色、細砂粒含む、良好	丹塗土器
"	49	RP-2	"	ミニチュア		5			白黄色、細砂粒多い、良好	墨台形
"	50	RP-1	"	ミニチュア	8		4.8		淡茶色、細砂粒含む、良好	鉢形
"	51	R-114	SB-25	甕形	34			ナデ	淡茶褐色、砂粒多い、良好	
"	52	R-115	"	高杯	32			ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、良好	
"	53	A 59	SB-26	甕形	25.5			ヨコナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
"	54	B 54	"	底部破片		5.3		ハケ、ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
"	55	C 53	"	墨台脚		9.5		ハケ、ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	

第1表 出土遺物観察表 ①

採掘 箇所	番号	実測 番号	出土 遺構	機 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成	備 考
168区	56	RP-5	SB-27	甕形	19			ナデ	明褐色、小砂粒含む、良好	
	57	RP-2	"	小型広口壺	11			ナデ	明褐色、小砂粒含む、良好	
	58	RP-1	"	坏身	11		4.7		淡褐色、砂粒含む、良好	
	59	RP-3	"	甕台	10			内ミガキ	茶褐色、砂粒を僅かに含む、良好	受け部
	60	RP-4	"	高坏脚		13.4			白灰色、精良、良好	
	61	A	SB-33	甕形	29.1			ハケ後ナデ	赤褐色、小砂粒含む、良好	
	62	R-83	"	甕形	22				淡乳褐色、細砂粒多い、やや不良	
	63	R-87	"	底部破片	5.3			ハケ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
	64	R-88	"	底部破片	5.3			ハケ	淡茶褐色、砂粒多い、良好	
	65	R-9	SB-36	甕形	25			ナデ	薄茶褐色、小砂粒多い、良好	
	66	R-4	"	底部破片	5.8			ハケ	淡茶褐色、砂粒多い、良好	
	67	R-2	"	底部破片	8			ハケ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	
	68	R-4	SB-39	甕形	32				薄赤茶褐色、小砂粒多い、良好	
	69	B	"	底部破片	5.6			ナデ	淡茶色、大小の砂粒少量あり、良好	
	70	A	"	底部破片	7				淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
169区	71	C	SB-39	甕台	13.3	12.4	18.5	ハケ後ナデ	淡茶褐色、大小の砂粒少量あり、良好	
	72	D	"	甕台	13.2	12.3	19.8	ハケ後ナデ	褐褐色、細砂粒含む、良好	
	73	E	"	甕台	13.7	13.1	17.4	ハケ後ナデ	赤褐色、細砂粒を多く含む、良好	
	74	R-5	SB-75	甕形	14.2			外ハケ、内ケズリ	薄赤灰褐色、砂粒多い、良好	
	75	R-6	"	甕形	13.8			ハケ	淡褐色、精良、良好	
	76	R-8	"	鉢形	15			外ハケ、内ケズリ	濃灰褐色、細砂粒多い、良好	
	77	R-10	"	甕形	18.2	6.4	14.2	ハケ	淡乳明茶褐色、細砂粒多い、良好	
	78	R-11	"	長頸甕				ヘラケズリ後ナデ	淡明茶褐色、精良、良好	
	79	R-3	"	底部破片	5			ハケ	淡乳茶褐色、砂粒多い、良好	
	80	R-4	"	鉢形	11.2	3	5	内ケズリ	淡灰褐色、砂粒多い、良好	
	81	R-7	SB-78	甕形	7.5			ケズリ、ナデ	淡乳灰褐色、精良、良好	
	82	R-10	"	高坏	21				淡茶褐色、精良、良好	
	83	R-12	"	高坏脚		14.4		外ミガキ、内ケズリ	淡黄褐色、細砂粒多い、良好	
	84	R-2	"	ミニチュア	3.7		3		淡乳黄褐色、精良、良好、完形品	手づくね
	85	R-10	"	ミニチュア	3.8	3.2	3.7		淡茶褐色、精良、良好	手づくね
	86	R-2	SB-80	鉢形	17.7	7.3	10.8	外ミガキ、内ナデ	淡黄茶褐色、細砂粒多い、良好	
	87	R-1	"	蓋				外ハケ、内ナデ	淡乳褐色、砂粒多い、良好	
	88	R-3	"	甕形	41.2				淡乳黄褐色、細砂粒多い、良好	
	89	R-23	SB-81	小型甕	5.9		7.3	外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、精良、良好	
	90	R-20	"	脚付小型甕	6.8			外ハケ、内ケズリ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
	91	R-22	"	小型広口壺	8.6		6.5	外ハケ、内ナデ	淡乳黄褐色、精良、良好	
	92	R-24	"	小型丸底甕	6.6		8.2	ナデ	淡明茶褐色、精良、良好	
	93	R-19	"	高坏脚		11			淡乳茶褐色、砂粒多い、不良	
170区	94	R-3	SB-82	甕形	13.5		13.3	外ハケ、内ケズリ	淡明茶褐色、赤色粒子含むが精良、良好	
	95	R-1	SB-83	小型広口壺	10		7.5	外ナデ、内ケズリ	薄茶褐色、赤色粒子含むが精良、良好	
	96	R-2	SB-85	底部破片		11.2		ナデ	淡赤褐色、精良、良好	
	97	R-1	"	底部破片		8.2			淡黄褐色、砂粒多い、良好	
	98	R-9	SB-86	甕形	32			ナデ	淡褐色、砂粒多い、良好	
	99	R-5	"	底部破片	5.8			タテハケ	淡乳黄褐色、細砂粒多い、良好	
	100	R-3	SB-94	二重口縁甕	21			外ハケ、内ナデ	淡黄茶褐色、砂粒多い、良好	
	101	R-2	"	底部破片	7			叩き後ハケ	淡灰褐色、砂粒多い、良好	
	102	R-4	"	甕形	26			ナデ	淡黄褐色、砂粒多い、良好	
	103	R-8	"	鉢形	9		6.6	外ナデ、内ハケ	淡黄褐色、砂粒多い、良好	ほぼ完形
	104	R-9	"	短頸甕	3		7.8	ナデ	淡乳茶褐色、精良、やや不良	
	105	R-15	SB-96	丸底甕	12		12.2	外ナデ、内ケズリ	淡黄茶褐色、砂粒多い、良好	
	106	R-6	"	甕形	15.4			ハケ後ナデ	淡赤褐色、砂粒含む、良好	
	107	R-10	"	甕形	17			外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒多い、良好	
	108	A	"	甕形	17.5			外ハケ、内ケズリ	黄茶褐色、砂粒含む、良好	線刻画
	109	R-22	"	甕形	15.8		21.4	外叩き、内ケズリ	淡茶褐色、砂粒多い、良好	
	110	R-21	"	甕形	12.6		24	外ハケ、内ケズリ	淡黄茶褐色、精良、良好	3カ所に線刻画

第1表 出土遺物観察表②

棟号	番号	実測 番号	出土 遺構	機 種	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	調 整	色調・胎土・焼成	備 考
170	111	R-23	〃	直口壺	10			外ケズリ、内ケズリ	淡茶灰色、精良、やや不良	
〃	112	R-14	〃	丸底甗	10.6		8.6	外ハケ、内ケズリ	淡黄茶褐色、精良、良好	
〃	113	R-1	〃	二重口鉢	12.4			ナデ	淡黄褐色、砂粒多い、良好	
171	114	R-8	SB-96	坏身	12.9		4.5	内ナデ	淡乳黄褐色、礫砂粒多いが精良、良好	
〃	115	R-11	〃	鉢形	12			ケズリ	淡黄茶褐色、精良、やや不良	
〃	116	R-40	〃	高坏脚		10		ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、やや不良	
〃	117	R-5	〃	高坏脚		12		外ナデ、内ケズリ	暗赤茶褐色、小砂粒多い、やや不良	
〃	118	R-39	〃	高坏脚		11		ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、やや不良	
〃	119	R-35	〃	ミニチュア	3.9		1.9	ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、良好	鉢形
〃	120	R-34	〃	ミニチュア	5.4		2.5	ナデ	淡黄灰褐色、精良、良好	鉢形
〃	121	R-31	〃	ミニチュア	5			ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	壺形
〃	122	R-51	〃	ミニチュア	4.2		5.3	ナデ	淡茶褐色、精良、良好	壺形
〃	123	R-2	SB-97	鉢形	13		6.7	ナデ	淡灰白色、砂粒含む、やや不良	
〃	124	R-1	〃	坏身	10.3		3.4	ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、不良	
〃	125	R-4	〃	高坏脚				ナデ	淡黄茶褐色、礫砂粒含む、不良	
〃	126	R-1	SB-98	壺形	29.6			外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	127	R-4	〃	底部破片		5.8		外ハケ、内ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、不良	
〃	128	R-6	〃	鉢形	10.8		9	ナデ	淡灰茶色、砂粒多い、良好	
〃	129	R-10	SB-99	壺形	25.6			ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
〃	130	R-11	〃	壺形	30.4			外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	
〃	131	1	〃	底部破片		5.2		外ハケ、内ナデ	暗茶灰褐色、砂粒含む、やや不良	南側周溝内
〃	132	R-2	〃	底部破片		8.6		ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	
〃	133	R-1	〃	鉢形	11.7	2.8	6	外ナデ、内ハケ	淡灰茶褐色、砂粒多い、良好	
〃	134	A	〃	器台	9.2	10.1	12.8	外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
〃	135	R-2	SB-100	壺形	13.8			外ハケ、内ケズリ	茶褐色、砂粒を含む、良好	
〃	136	R-1	〃	壺形	14.8			外ハケ、内ケズリ	赤茶褐色、小砂粒含む、不良	
〃	137	R-7	SB-102	壺形	25.4			外ハケ、内ケズリ	淡黒灰色、赤色粒子含む、良好	
〃	138	R-4	〃	壺形	27.4				淡黄褐色、砂粒多い、不良	
〃	139	R-1	〃	壺形	29			ナデ	淡黄褐色、砂粒多い、不良	
〃	140	R-11	〃	底部破片		5.6		ナデ	淡黄褐色、精良、不良	
〃	141	R-18	〃	底部破片		5.8		外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	142	R-64	〃	ミニチュア	3.4		3.6		淡黄茶褐色、細砂粒含む、不良	
172	143	A	SB-102	壺形	24	10.6	20.9	外ハケ、内ハケ	淡黄茶褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	144	R-6	〃	壺形	23.1			内外ナデ	淡黄褐色、精良、良好	
〃	145	B	〃	壺形	15.7	10.2	17		淡茶褐色、砂粒多い、不良	丹塗土器
〃	146	C	〃	鉢形	20.5	8.8	9	内外ナデ	淡黄乳褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	147	R-4	SB-103	壺形	18			外ハケ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	148	R-8	〃	壺形	22.9			内外ケズリ	淡茶灰褐色、細砂粒含む、良好	
〃	149	R-20	〃	壺形	17.3			内外ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	150	R-33	〃	壺形	16.5			外ハケ、内ケズリ	淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	
〃	151	R-61	〃	甗					淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	多孔式
〃	152	R-25	〃	有孔丸底甗	6.6		7.9	外下ケズリ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	ハソウ形
〃	153	R-1	〃	坏身	14.3		5.2	ナデ	淡黄茶褐色、細砂粒含む、不良	完形品
〃	154	R-2	〃	坏身	14.8		4.8		淡黄茶褐色、砂粒含む、不良	完形品
〃	155	R-38	〃	高坏脚		13.6		内ケズリ	黄茶褐色、砂粒含む、不良	
〃	156	R-4	SB-104	壺形	27			外ハケ、内ナデ	淡黄灰褐色、細砂粒含む、良好	
〃	157	R-9	〃	壺形	25.8				赤茶褐色、砂粒多く含む、不良	
〃	158	R-16	〃	底部破片		8		ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、やや不良	
〃	159	R-6	〃	底部破片		5.8			淡茶褐色、砂粒多い、不良	
〃	160	A	〃	底部破片		6.8		外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
〃	161	R-19	〃	筒形器台				ヘラナデ?	淡茶褐色、砂粒含む、良好	丹塗土器
〃	162	R-3	SB-106	鉢形	7.6	4	4.5	ナデ	暗茶褐色、精良、良好	
〃	163	C	SB-112	坏身	10			ナデ	暗茶褐色、細砂粒含む、良好	
〃	164	B	〃	高台付底部		8.9		外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
〃	165	A	〃	小壺	11.8			ナデ	淡黄褐色、細砂粒含む、良好	

第1表 出土遺物観察表③

採国	番号	実測 番号	出土 遺構	機 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成	備 考
173図	166	R-103	SB-117	甕形	14.6			ナデ	淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	
"	167	R-109	"	坏身	11.8			外ナデ、内ミガキ	淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	
"	168	R-108	"	坏身	13.8				淡黄灰褐色、砂粒含む、不良	
"	169	R-110	"	鉢形	11.8			外ハケ、内ナデ	灰茶褐色、砂粒僅かに含む、良好	
"	170	R-115	SB-119	甕形	13.8			外ハケ、内ケズリ	茶褐色、砂粒を含む、良好	
"	171	R-6	"	底部破片		11.8		ハケ	淡黄灰褐色、砂粒含む、やや不良	
"	172	R-5	"	高坏					明茶褐色、細砂粒含む、不良	
"	173	A	"	高坏	19.4			ナデ	淡黄灰褐色、精良、良好	
"	174	B	"	坏身	10.6		5.6	外下ケズリ、内ナデ	淡乳灰褐色、砂粒含む、良好	
"	175	R-14	"	坏身	11.9			外下ケズリ、内ナデ	淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	
"	176	R-130	SB-122	坏身	12.8		5.9		明茶褐色、細砂粒含む、不良	
"	177	R-128	"	坏身	14		5.4		淡黄褐色、砂粒含む、不良	
"	178	R-129	"	坏身	12.2		4.9		淡黄灰褐色、砂粒含む、不良	
"	179	R-138	"	小型広口甕	7.1			内ハケ	淡黄灰褐色、砂粒含む、不良	
"	180	R-139	"	ミニチュア	2.7		2.5	ナデ	淡灰褐色、砂粒含む、良好	
"	181	R-141	"	ミニチュア	3.5		3.3	ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
"	182	R-140	"	ミニチュア	3.7		1.8	ナデ	淡黄灰褐色、細砂粒含む、良好	
"	183	R-3	SB-126	甕形	23.6			ナデ	暗赤茶色、砂粒含む、良好	丹塗土器
"	184	R-14	"	底部破片		4.6		外ハケ、内ナデ	淡黄灰褐色、砂粒含む、良好	
"	185	R-18	"	小型丸底甕	9.6		8.5	ハケ後ナデ、内ケズリ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
"	186	R-4	"	甕形	30			ナデ	赤茶褐色、小砂粒含む、良好	
"	187	R-2	"	鉢形	18.6			内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
"	188	R-8	"	鉢形	12.8	5.6	7.4	外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、やや不良	
"	189	A	"	甕台	13.2	14.9	18.1	内外ハケ	明茶褐色、砂粒多く含む、良好	
"	190	R-158	SB-132	坏身	10.7		3.4		淡黄褐色、砂粒含む、不良	
174図	191	A	SK-25	底部破片		5.4		外ハケ、内ナデ	淡灰褐色、砂粒多く含む、やや不良	
"	192	R-1	SK-27	甕形	17			外ハケ、内ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
"	193	A	"	甕形	17.2	7.5	13.5	ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
"	194	B	SK-30	坏身	15.8	2.5	4.5	外ケズリ、内ナデ	淡黒灰褐色、赤色粒子含む、精良、良好	互質
"	195	A	"	高台付甕	15.2	6.8	5.9	外ケズリ、内ナデ	淡乳灰褐色、精良、良好	互磨
"	196	R-1	SK-59	有蓋無頸甕	12.6			内ハケ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	
"	197	R-3	"	甕形					黄褐色、砂粒多く含む、不良	
"	198	R-2	"	甕形	26				暗灰褐色、砂粒多く含む、良好	
"	199	R-12	SK-62	甕形	28			ナデ	淡黄褐色、砂粒多く含む、良好	
"	200	R-4	"	底部破片		5.8		外ハケ、内ナデ	淡茶灰褐色、砂粒含む、やや不良	
"	201	R-11	"	底部破片		7.8		外ハケ、内ナデ	黄褐色、砂粒多く含む、良好	
"	202	R-6	"	甕形	23			ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、良好	
"	203	R-7	"	甕形	22			ナデ	明茶褐色、砂粒多く含む、不良	
"	204	R-9	SK-68	甕形	28.4				茶褐色、砂粒多く含む、不良	
"	205	R-4	"	甕形	29			ハケ	淡黒灰褐色、砂粒含む、不良	
"	206	R-10	"	甕形		5.6		外ハケ、内ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	
"	207	R-5	"	底部破片		11		ナデ	淡茶灰褐色、砂粒含む、やや不良	
"	208	R-2	"	甕台	9.7	9.5	12.6	外ハケ、内ナデ	淡乳褐色、細砂粒含む、良好	
"	209	R-1	SK-72	甕形	26			ナデ	淡灰褐色、砂粒多く含む、不良	黒斑有り
"	210	R-3	"	底部破片		4.4		ナデ	淡黒灰褐色、砂粒含む、やや不良	
"	211	A	SK-86	底部破片		5.4		外ハケ、内ナデ	淡乳褐色、砂粒含む、良好	
"	212	A	SK-100	高坏				ケズリ、ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	
175図	213	R-1	SK-102	底部破片		6			淡灰褐色、砂粒多く含む、不良	
"	214	R-7	"	底部破片		7.8		外ハケ、内ナデ	淡黄褐色、砂粒含む、良好	
"	215	R-8	"	甕形	28			外ナデ、内ハケ	淡茶灰褐色、砂粒多く含む、やや不良	
"	216	R-5	"	甕形	28			外ハケ、内ナデ	淡灰褐色、細砂粒含む、良好	
"	217	R-3	SK-123	底部破片		6		ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
176図	218	SB-01	坏蓋		11.2			外ケズリ、内ナデ	淡茶灰褐色、黒色粒含む、やや不良	No. 9、須恵器
"	219	"	高台付坏身	13.9	9.6	4.5		内外ナデ、外底ケズリ	黒灰色、砂粒少量含む、良好	No. 2、須恵器
"	220	"	"	甕形	11.6			外ナデ、内ケズリ	淡灰褐色、砂粒含む、良好	No. 5、須恵器

第1表 出土遺物観察表④

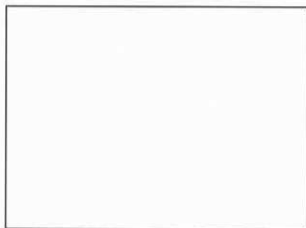
種別	番号	実測 番号	出土 遺構	機 種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整	色調・胎土・焼成	備 考
176図	221		"	瓶形	27			外ハケ、内ヘラ後ハケ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	No.6、土師器
"	222		"	瓶形	20.1				淡赤褐色、赤色粒を含む、精良、良好	No.8
"	223		SB-03	杯蓋	17.2			外ケズリ、内ナデ	茶褐色、赤色砂粒を含む、良好	No.16
"	224		"	高台付坏身	16.8	11	6	ケズリ後ナデ	茶褐色、砂粒を含む、良好	No.7
"	225		"	高台付坏身	13	9.6	3.8	ケズリ後ナデ	灰色、細砂粒含む、良好	No.14
"	226	2	"	皿	16	12.6		ナデ	茶褐色、砂粒を含む、良好	
"	227		"	坏身	14.1	9.6	3.7	ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	No.9,11,20
"	228		"	瓶形	26			外ハケ、内ナデ	茶褐色、砂粒を含む、良好	No.22
"	229		"	瓶形	23			外ハケ、内ケズリ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	No.3
"	230	R-5	"	砥石					砂岩製	全面使用痕
"	231		SK-01	坏身	12.5	7.4	4.4	ナデ	薄茶褐色、精良、良好	No.3、ヘラ切り
"	232		"	坏身	12.4	7.7	3.5	ナデ	薄茶褐色、精良、良好	No.2、ヘラ切り
"	233		"	皿	14.3	8	2.3	ナデ	薄茶褐色、精良、良好	No.1、ヘラ切り
"	234	R-2	SK-07	瓶形	46.2			外ナデ、内ハケ	黒茶褐色、砂粒多く含む、良好	
"	235	R-1	"	瓶形	28.4				黒茶褐色、砂粒多く含む、不良	
"	236	R-8	"	砥石					砂岩製	全面使用痕
177図	237	R-3	SK-06	底部破片		16.2		外底ケズリ、内底ナデ	薄灰色、精良、良好	
"	238	R-3	SK-08	白磁機	16			施軸	淡緑色	
"	239	R-4	"	青磁碗底部		5.2		施軸	灰緑色	外底釉かき取り
"	240	R-1	SD-04	杯蓋	13			内外ケズリ	黒灰色、細砂粒含む、良好	
"	241	R-2	"	碗底部		6		ナデ	淡灰色、精良、不良	
"	242	R-2	SD-09	青磁碗底部		4.4		施軸	淡灰色	外底釉かき取り
"	243	R-2	SD-10	火鉢	28			ナデ	暗茶褐色、砂粒含む、良好	
"	244	A	SD-11	瓶形				ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	
"	245	R-2	SD-12	底部破片		8		内外ケズリ	茶褐色、赤色砂粒含むが精良、良好	
"	246	R-4	"	瓶?					淡茶褐色、細砂粒含む、良好	把手
"	247	R-1	"	瓶形				ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	
"	248	R-1	SK-01	鉢形	21.6	10.8	17	内外ナデ	淡茶褐色、砂粒多い、やや不良	
"	249	R-3	"	瓶形		5.4			灰褐色、砂粒多く含む、不良	ヒヤケ南園排水路
"	250	R-1	SK-02	瓶形	25			内外ナデ	灰茶褐色、砂粒含む、良好	"
"	251	R-3	"	瓶形	28			内外ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	"
"	252	R-6	"	瓶形	26			内外ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	"
"	253	R-8	"	底部破片		5.6		外ハケ、内ナデ	淡茶灰色、黒色粒含む、やや不良	"
"	254	R-7	"	底部破片		5.8		外ハケ、内ナデ	茶褐色、細砂粒多く含む、良好	"
"	255	R-10	"	鉢形	12.2	6.4	7.8	内外ナデ	灰白色、砂粒含む、不良	"
"	256	R-2	SK-03	瓶形	30			内外ナデ	淡茶褐色、砂粒多く含む、不良	"
"	257	R-4	"	瓶形	28			内外ナデ	茶褐色、砂粒多く含む、良好	"
"	258	R-7	"	底部破片		6		外ハケ、内ナデ	赤灰色、砂粒多く含む、不良	"
"	259	R-9	"	底部破片		6		内外ナデ	灰茶褐色、砂粒多く含む、やや不良	"
"	260	R-5	"	底部破片		8.8		内外ナデ	茶褐色、細砂粒含む、良好	"
178図	261	R-4	SK-04	瓶形	34			内外ナデ	茶褐色、砂粒多く含む、不良	ヒヤケ南園排水路
"	262	R-3	"	底部破片		5		外ハケ、内ナデ	茶褐色、細砂粒多く含む、やや不良	"
"	263	R-2	"	底部破片		5		外ハケ、内ナデ	淡茶褐色、細砂粒多く含む、良好	"
"	264	R-5	"	底部破片		8			茶褐色、細砂粒多く含む、不良	"
"	265	R-1	SK-05	瓶形	26			内外ナデ	淡茶褐色、細砂粒含む、良好	"
"	266	R-2	"	底部破片		5.3			淡茶褐色、細砂粒多く含む、良好	"
"	267	R-2	SD-01	瓶形				内外ナデ	茶褐色、細砂粒多く含む、良好	"
"	268	R-2	SD-02	瓶形	22			内外ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、不良	ヒヤケ南園排水路
"	269	R-3	"	瓶形	26			ハケ、ナデ	灰白色、砂粒含む、不良	"
"	270	R-10	"	底部破片		8			茶褐色、砂粒多く含む、不良	"
"	271	R-9	"	底部破片		5.8			淡茶褐色、砂粒含む、不良	"
"	272	R-6	"	底部破片		6.6		外ハケ、内ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、やや不良	"
"	273	R-8	"	底部破片		6.2			茶褐色、砂粒多く含む、不良	"
"	274	R-12	"	器台		6.8		内ナデ	淡茶褐色、砂粒含む、良好	"
"	275	R-15	"	蓋				外ハケ、内ナデ	茶褐色、砂粒多く含む、やや不良	"

第1表 出土遺物観察表⑤

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号

PL 1 (新庄・六反田)



(1) SB-01



(2) SB-02・05



(3) SB-03 (北より)



(4) SB-04 (南東より)



(5) SB-06



(6) SB-07以西 喪棺墓群



(1) SB-07 (南より)



(2) SB-07 投弾出土状況



(3) SB-10



(4) SB-11・13・14・15



(5) SB-14



(6) SB-13・14・15

PL 3 (新庄・六反田)



(1) SB-17・18周辺



(2) SB-24周辺 (北北東より)



(3) SB-24周辺 (北西より)



(4) SB-25・26・27 (南より)



(5) SB-28・29より東方を望む



(6) SB-33・34 (南西より)



(1) SB-36



(2) SB-28・37・38



(3) SB-28・37・38周辺



(4) SB-45 (東より)



(5) SB-46 土器群出土状況



(6) SB-47・48周辺

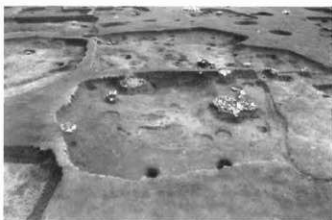
PL 5 (新庄・六反田)



(1) SB-50 (北西より)



(2) SB-51 (南西より)



(1) SB-53 (北西より)



(1) SB-56・62・63 (北西より)



(1) SB-57 周辺 (北北西より)



(1) SB-70 より南方を望む



(1) SB-73・74・75・77 (南東より)



(2) SB-74より西方を望む



(3) SB-82・87・83 (南東より)



(4) SB-94 (北西より)



(5) SB-97・1号円形周溝周辺



(6) SB-99・102 (北西より)

PL 7 (新庄・六反田)



(1) SB-103・102



(2) SB-104・103 (北西より)



(3) SB-106・101周辺



(4) SB-112・92 (南より)



(5) SB-117 (東より)



(6) SB-122・123周辺 (南西より)



(1) SB-128・116・119 (北より)



(2) SB-132・122 周辺から西方を望む



(3) 掘立柱建物 B (西より)



(4) 7号掘立柱建物



(5) 9号掘立柱建物



(6) 1号石蓋土墳墓



(1) 6号褒棺墓 (K 6)



(2) 11号褒棺墓 (K 11)



(3) 14号褒棺墓 (K 14) 周辺



(4) 17号褒棺墓 (K 14) 周辺



(5) 35号褒棺墓 (35K)



(6) 41号・42号褒棺墓 (K 41・K 42)



(1) 46号褒棺墓 (K 46)



(2) 52号褒棺墓 (K 52)



(3) 57号・58号褒棺墓 (K 57・K 58)



(4) 62号・63号褒棺墓 (K 62・K 63)



(5) 76号褒棺墓 (K 76)



(6) 119号~122号褒棺墓 (K119~K122)



(1) SK-62



(2) SK-100



(3) SK-114



(4) 第2地区全景(西より)



(1) SB-01 (西より)



(2) SB-03 (西より)



(3) SB-04 (東より)



(4) SB-05 (東より)



(5) SD-03・05 (東より)



(6) SD-06 (北東より)

PL 13 (宮ノ后)



(1) SD-23 (西より)



(2) SK-01・02



(3) SK-06・SD-06 (南より)



(4) 襖棺墓 (脛衣壺?)



(5) 全景 (西より)



(6) 全景 (東より)



(1) SB-01 (西より)



(2) SD-04・05 (南東より)



(3) SD-05 北西部コーナー (東より)



(4) SD-07 土層断面



(5) SD-10 (北東より)



(6) SD-11・12 (北北東より)

PL 15 (ヒヤケ)



(1) SD-12 (北北東より)



(2) 2地点全景



(3) 調査区全景 (南東～北東)



(4) 調査区全景 (北西～南東)



(1) SD-01 B土層断面



(2) SD-01 D土層断面



(3) SD-01 E土層断面



(4) SD-01 G土層断面



(5) SD-01 M土層断面



(6) SD-01 南側突出部(西より)

PL 17 (中里1・2地点)



(1) SD-01 南側突出部東 土器出土状況



(2) SD-01 南側突出部東 (西より)



(3) SD-01 南辺西側コーナー (南より)



(4) SD-01 北側突出部 (北より)



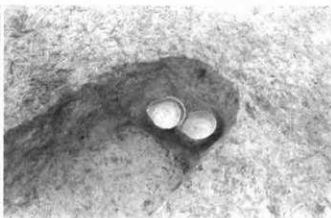
(5) SD-08 完掘状況 (北西より)



(6) SD-11 (南東より) 2地点



(1) SK-01・02 (南より)



(2) SK-01 出土品状況



(3) SK-01・02・03 (南より)



(4) 西北西より前方後方形遺構全体を望む



(5) 2地点全景 (東より)



(6) 2地点全景 (西より)



SB-01

1



SB-01

2



SB-03

5



SB-04

8



SB-06

11



SB-06

14



SB-06

18



SB-07

20



SB-07

21



SB-07

22



SB-07

24



SB-13

27



SB-13

28



SB-13

30



SB-17

36



SB-17

38



SB-17

39



SB-18

41



SB-18

42



SB-18

43



SB-23

46



SB-23

48



SB-23

49 • 50



SB-26

54



SB-27

56



SB-27

58



SB-27

60



SB-33

63・64



SB-36

66・67



SB-75

74



SB-75

77



SB-75

78



SB-78

83



SB-78

84・85



SB-80

86・87



SB-81

89~92



SB-85

97



SB-86

99



SB-94

101



SB-94

103



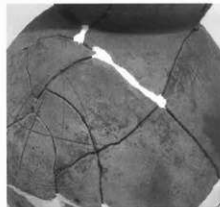
SB-94

104



SB-96

110



SB-96

110



SB-96

110



SB-96

112



SB-96

114



SB-96

115



SB-96

118



SB-96

122



SB-97

123 • 124



SB-98

127



SB-99

131



SB-99

132



SB-99

134



SB-100

136



SB-102

140



SB-102

142



SB-102

143



SB-102

145



SB-102

146



SB-103

150



SB-103

151



SB-103

152



SB-103

153 • 154



SB-103

155



SB-106

162



SB-112

164



SB-112

165



SB-117

168



SB-117

169



SB-119

170



SB-119

171



SB-119



174

SB-122



178

SB-122

179



SB-122

180~182



SB-126

185



SB-126

187



SB-126

188



SB-126

189



SB-132

190



SK-25

191



SK-27

193



SK-30

194



SK-30

195



SK-59

196



SK-59

197



SK-62

201



SK-62

203



SK-68

207



SK-68

208



SK-100

212



SK-102

214



SK-102

216



SB-01

218



SB-01

219



SB-01

220



SB-01

221



SB-03

224



SB-03

225



SB-03

227



SB-03

228



SB-03

230



SK-01

231 ~ 233



SK-07

234



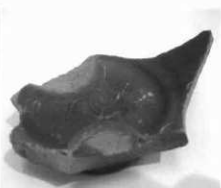
SK-07

236



SK-08

239



SK-08

239



SK-01

249



SK-02

254



SK-02

255



SK-03

257



SK-03

258



SK-03

260



SK-04

262



SK-05

266



SD-02

270



SD-02

272



SD-02

274



SD-02

275



SD-02

277



SD-03

279



SD-05

280



SD-20

285 • 286



SD-27

288



SD-01

289



SD-01

292



SD-01

294



SD-01

295



SD-01

296



SD-01

297



SD-01

299



SD-01

305



SD-07

306



SD-09

307



SD-11

308



SK-01

309~311



SB-58

312



SB-05

313



SB-99

314



SB-02

315



表探

316



SB-92

317



SB-80

318



SB-06



319



SB-74, 102他

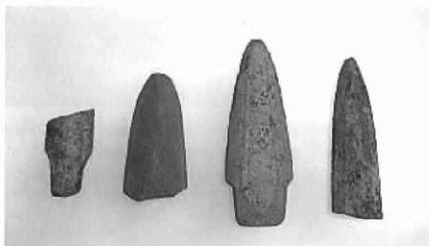


320 ~ 322



SB-107

323



SB-34, 99, 116, K-6

324 ~ 327

報告書抄録

ふりがな	やめしないいせきぐん1						
書名	八女市内遺跡群1						
副書名	福岡県八女市津江・忠見所在遺跡の発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第104集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2014年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
しんしょう・ 新庄・	ふくおけけんやめし 福岡県八女市	402109	33°11'39"	130°31'41"	19850715~ 19851228	10,000㎡	園場整備 事業
ろくたんいせき 六反田遺跡	しんしょうあざろくたんぼ・ 新庄字六反田・						
みやのあとといせき 宮ノ后遺跡	みやのあと・ひやけ 宮ノ后・ヒヤケ						
ひやけいせき ヒヤケ遺跡	くにわけあざなかざと 国武字中里						
なかざといせき 中里遺跡							
1・2地点 1・2地点							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
新庄・六反田遺跡	集落	弥生時代中期～ 後期	竪穴住居、竪棺墓		弥生式土器、石製品、 皮袋状土製品		多重遺構
宮ノ后遺跡	集落	奈良時代	溝状遺構				
ヒヤケ遺跡	集落	奈良時代後期～ 平安初期	竪穴住居、掘立柱建物				
中里遺跡1・2地点	集落	弥生時代後期～ 末	環濠		弥生式土器		
要約	新庄・六反田遺跡では弥生時代中期から後期にかけての密度の高い集落群及び竪棺墓群を 検出。集落群は竪穴住居を主体としており、古墳時代前期まで継続する。これに対し竪棺墓群は 中期を逸脱することなく、後半期を中心として密集する。宮ノ后遺跡、及び、ヒヤケ遺跡において は、河川の中ノ島状の地形を利用し僅かながらの集落を形成している状況が判明した。水はけ は想像以上に悪かったものと考えられる。中里遺跡では、発掘当初「前方後方形の溝」と判断され ていたが、突出部を有する多重遺構であると結論づけた。						

八女市内遺跡群 1
八女市文化財調査報告書
第 1 0 4 集

平成26年3月31日

発 行 八女市教育委員会
八女市本町 6 4 7
印 刷 (株) 東 兄 弟
八女市祈禱院 5 6 3